

## 第1章

# 障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は 2019 年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は 24 名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ 1 時間から 1 時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報の管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。協力者は、男性 16 名、女性 8 名で、先天性障害 19 名、中途障害 5 名、年齢は 21 歳～60 歳(平均 38.5 歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11 および 22-001-01)を受けて実施した。

今年度は、初めての試みとして聴覚障害のある選手へのインタビューを実施した。調査対象者 24 名中 8 名が聴覚障害のある選手であり、学校生活やスポーツ実施に際して、コミュニケーションや情報保障に関する課題が複数挙げられていた。以下、関連するインタビュー結果を一部抜粋する。

「ろう学校から小学校にインテグレーションしてからは、コミュニケーションで苦労したし、一緒に遊ぶ時もコミュニケーションで疲れてしまう経験をしてきた。～(中略)卓球部で活動したが～コミュニケーションの難しさもあって義務感で参加していた。」

「小学生の時は手話の存在を知らず～先生や友達の会話を理解することが難しく、コミュニケーションで苦労していた。」

「大学の水泳部では指導者は聴覚障害に対する配慮はあるが十分ではなく、ほかの部員とのコミュニケーションがうまく取れないことがある。」

「聴覚障害のある人がもっとスポーツを楽しむためには、コミュニケーションのサポートが一番大事であると思う。バドミントンの練習時に、手話通訳等がなければ、具体的な技術、それに関わる動きが理解できず～楽しさを感じることができない。活動時に情報保障がなされることで、いろいろなスポーツにもっと多くの聴覚障害者がアクセスできると思う。」

以上の語りから指摘できるのは、健聴児・者とのコミュニケーションや人間関係構築の困難性である。ろう学校(現・聴覚支援学校)出身者の多くが、部活動や学校でのクラブ活動等に積極的に取り組み、幼少期からの諸活動が現在の取り組みにつながっているものと考えられるが、普通学校および大学在学経験のある対象者の中には、教員や仲間とのコミュニケーションが円滑に取れず、部活動等に満足に取り組むことができなかった事例も散見された。本調査において、競技的にスポーツに取り組んでいる選手の多くが、健聴者と接点を持ちながらスポーツ活動を継続し、競技力を向上させているが、その背景には聴覚障害に理解のある教員や指導者、デフコミュニティと健聴者コミュニティの橋渡し役となる人物が存在していることが明らかになった。その一方で、もしも、学齢期からコミュニケーションの困難性を抱え続け、情

報保障が十分になされなければ、身近に運動・スポーツする場があったとしても疎遠になってしまうのではないだろうか。

以上の日常的なコミュニケーション、情報保障の必要性に加えて、競技的にスポーツに取り組んでいる選手からは、「専門競技に精通した手話通訳者、支援者などが有機的に連携していくことが必要」「どのスポーツもそうだが、手話のできる指導者がすごく大切」といった声が挙がっており、手話のできる指導者および活動時の情報保障の必要性が指摘されていた。

また、複数の選手からデフスポーツの競技環境の厳しさに関する指摘も挙がっていた。

「アスリート雇用の規模を拡大してもらえれば、もっと多くの障害者アスリートが学校卒業後も競技を続けられると思う。」

「(東京デフリンピックが開催されるが)デフリンピック種目ではないスポーツや、デフスポーツを取り巻く環境はあまり変わっていない。」

「(デフハンドボールの)練習拠点となる場所がない/(チーム設立にあたり)経済的な支援が不足しているため、スポンサー等についても探していく必要がある。」

以上の選手たちの声に見られるように、デフアスリートのアスリート雇用等、選手個人に対するサポートがパラアスリートに比べて充足しておらず、競技環境についても練習環境や資金的な支援等、未充足である状況が推察される。

そして、視覚障害のある選手については、前年度調査でも指摘されているとおり、先天性障害のある調査対象者の多くが視覚特別支援学校の「部活動」や学校関係者の紹介によって各種スポーツに出会い、専門的な指導スキルを持ったコーチ・教員のもとで競技を始めており、学齢期の取り組みの延長線上に現在のスポーツキャリアが存在しているものと考えられる。また、中途障害の選手に関しても、資格取得のために視覚特別支援学校専攻科や専門課程のある大学に進学後に競技と出会ったケースが複数見られ、他障害以上に学校段階での取り組みや出会いが重要であると考えられる。

さらに、今年度調査で特徴的なのは、複数の競技経験がある、あるいは高いレベルで複数競技を両立している(していた)選手が散見される点である。SNSやインターネット上で活動を知りアクセスした、地元の選手発掘事業に参加し新たな競技を始めたという事例が見られ、これまでの調査では各競技の情報入手の困難性や競技に触れる機会の不足が指摘されていたが、近年拡充されてきている J-STAR プロジェクト等の選手発掘や各種体験イベント、ならびに各競技団体の情報発信が徐々にではあるが拡大していることで、選手自身の生活環境や障害、競技に対する志向性等に応じた競技のトランジションが生じてきているのではないだろうか。

本年 11 月には東京でデフリンピックが開催されるが、果たしてデフアスリートの競技環境改善の契機となるのだろうか。聴覚障害のある選手への調査は今年度初めての取り組みであり、本稿のみで多くの指摘をすることは困難であるが、デフリンピック開催前後でデフスポーツならびにデフアスリートにどのような変化がもたらされるのか注目されるところである。

また、パラリンピック競技においては、東京パラリンピック以後、一部の競技団体でスポンサーが減少したといった報道がなされていたが、昨年のパリパラリンピックを経て、競技者を取り巻く環境はどのように変化しているのだろうか。本プロジェクトで実施している競技団体調査や競技者の認知度調査等を含めて今後も検討していきたいと考えている。

(河西正博)

## 調査報告

■図表1-1 キャリア調査インタビュー一覧

項目	24-A	24-B	24-C
調査年度	24	24	24
識別記号	77	78	79
生まれた年	1999	1977	1970
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン ※2	A3	A2	A5
主実施競技 ※3	水泳	射撃	射撃
パラスポーツ開始年齢	3	21	47
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際出場
パラスポーツ開始時の重要な他者	父親	射撃(ビームライフル)を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ(自身も射撃選手)	大会を初めて見に行き、様々な情報をくれた人
パラスポーツ開始場所	父親がコーチを務めるスイミングスクールのプール	障害者対象のビームライフル教室を開講しているIスポーツセンター	K県のI射撃場
パラスポーツ情報提供者	パラ水泳競技連盟の方	射撃(ビームライフル)を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ(自身も射撃選手)	大会を初めて見に行き、様々な情報をくれた人
パラスポーツ開始場所へのアクセス	両親	本人	本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	小学校は父親で、中学校は父親と自分と目置いてくれていた後輩たち 高校も父親で、大学は障害があつて水泳部に所属していたNさん(よく一緒に練習をした)	S選手(大会でよく優勝していて、憧れの存在) 両親と家族、コーチ、会社の人たちの応援。夫は大会等に帯同してくれている。	一緒にピストルをやっている仲間
パラスポーツ継続状況	小学校5年の時にパラ水泳関係者と出会い、パラ水泳の大会に出場するようになった。 小・中と週3回のペースでスイミングスクールに通い、高校、大学では水泳部に所属。 東京パラリンピックの選考会を最後に水泳は引退。	2010年に実銃(エアライフル)の免許取得。2013年に初めて国際大会に出場し、40歳前後でライフル銃の免許も取得。 2017年にアスリート雇用でV社に転職。現在週3日は射場で練習し、ほかの日は自宅でシミュレーションの機械を使って練習。メンタルトレーニングのコーチからオンライン等で指導を受けている。 ロサンゼルス大会を目指している。 現在は健常者の試合にも出るようになり、昨年は12回大会に出場した。	現在もK県の射撃場で練習をしている。最初のころは週に1回は行っていたが、最近ではそこまで行っていない。 射撃場に行くと撃つのも練習だが、現在は疲労が蓄積することもあり、撃つ練習は月に1度くらいに減らし、自宅でできる練習を行っている。 自宅ではインナーマッスルを強化する練習や引き金をスムーズに引く練習を週に1度程度実施している。 現在年6回程度は様々な大会に出場。
支援	なし	勤務先	なし
将来ビジョン	今すぐにはわからないかもしれないが、10年後、20年後スポーツに関わる部署で仕事ができればと考えている。またそういうことができないか模索している。	パラリンピックに出場すること、長く競技を続けることが目標である。年齢とともに体力は落ちてくる、しかし競技レベルは下げたくないし、かといって障害のこともあり、体に大きな負担はかけたくない。そうした中でいかに続けていくかが課題となっている。	ロサンゼルスパラリンピックを目指す。そのためにも、5段(564点)をクリアしたい。当面は全日本パラ射撃選手権で3連覇をしたい。 競技の普及も考えているが、わずか5人なのでどうしていいかわからないのが正直なところである。 選手雇用も考えなくはないが今の安定した生活も捨てがたく、踏み切れない。
その他特記事項	高校時はほかの水泳部員とともに練習したことでモチベーションが高くなったり、また、様々な刺激を受けていた。 大学時は競技レベルの違いから他部員と練習できず、一人であるいは、同じ障害の選手と二人での練習が多く、モチベーションの維持に苦労した。 障害のある選手にも障害のない選手と同じように大学から支援(練習時間帯やプール使用、コーチ帯同など)があればモチベーションに好影響があつたかもしれないと感じている。	障害特性からほとんど運動には縁のない生活が、ビームライフル射撃を知ったことでスポーツを行うようになった。 身体接触のないターゲット系の競技と出会ったことが競技生活への入り口。 きっかけが運転免許更新時の担当者からの情報提供と、通える範囲に障害者を対象とした施設があつたという偶然が作用したと考えられる。 障害者のアスリート雇用制度の恩恵。長く継続できる競技特性があり、長く競技を続けることが目標となっている。	銃所持に関する様々な条件があり、それらをクリアすることで、銃の保持を維持し、選手を継続できている。 脳性麻痺という障害の特徴から体の動きに制限があることが疲れやすさや各種スポーツ、学校体育への参加に制限を加えていた。

項目	24-D	24-E	24-F
調査年度	24	24	24
識別記号	80	81	82
生まれた年	2001	1986	1980
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	その他	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	3歳頃	0	0
障害内容	聴覚	聴覚	肢体
障害程度	軽度	重度	中度
学校種別	特支→普通	特支	普通
スポーツキャリアパターン ※2	A4	A2	A3
主実施競技 ※3	デフハンドボール	棒高跳び、サーフィン	パラカヌー
パラスポーツ開始年齢	21	17, 31	29
主実施競技の競技レベル ※3		国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人。カヌー教室などを開催した際に、中学時代から健常者に交じってカヌーをやっていたことを覚えていてくれた。
パラスポーツ開始場所	進学先の大学ハンドボールサークル	通っていた高等ろう学校	戸田漕艇場
パラスポーツ情報提供者	進学先の大学教授	高校の恩師H氏	日本カヌー連盟の知人
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	妻・兄
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	進学先の大学教授N1氏、大学女子ハンドボール部OGで日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会のN2氏、デフハンドボールGKのM氏、レジェンド的存在の選手T氏	ビデオを撮ったり相互にアドバイした大学の友人と、技術に関して指導を受けたりアドバイスを求めた先輩Kさん、競技環境整備のアドバイスをいただいたY大学の指導者Hさん	兄と妻。舟を水面まで運んでくれて、移動のサポートをしてくれている。兄はカヌースプリントの経験者、妻は水上支援するためにカヌーを漕げるように訓練してくれた。
パラスポーツ継続状況	高校でハンドボールを始め、大学3年生でデフハンドボール日本代表チーム設立を目指して再開。現在メンバーが20名となり定期的に練習ができるようになった。月に1回の合同練習と週に1回のT地区での練習を継続してきたが、練習拠点となる場所がまだない。2024年度の東京都社会人ハンドボールリーグに「デフハンドボールクラブ」として加盟、チームの強化を図り東京2025デフリンピックでプレーすることを目指している。	2003年から棒高跳びを専門とする。2009年から3大会連続デフリンピックに出場し2017年国際大会入賞後引退。ろう学校の指導者としても活躍。2018年、幼少期に経験したサーフィンを始め、2021年にはデフサーフィン選手として、聴者の大会にも出場。波がある時は、早朝に波に乗ってから出勤するという生活をしているが、当面はサーフィンを極めるために継続したいと思っている。	2010年にリオパラリンピックの実施競技にカヌーが加わる可能性が高まり、パラカヌーを始めた。2027年に延期されたワールドマスターズゲームズ関西への出場を目標に競技を継続している。パラカヌーはモチベーションが続く限り継続していく。
支援		なし	勤務先
将来ビジョン	東京2025デフリンピックで日本代表としてプレーすることが目標。東京都社会人ハンドボールリーグの4部に「デフハンドボールクラブ」として加盟し試合経験を重ねることを目指して準備を進めているが、経済的な支援が不足しているため、スポンサー等についても探していく必要がある。	サーフィン検定で2級の取得。指導者として、ろうの子どもたちのスポーツ環境を整えたいと思いNPO法人の立ち上げ構想を持つ。今は資金持ち出しなので助成金の獲得ができればいい。今後も一生涯、何らかのスポーツをしていると思う。スポーツの楽しさをろうの子どもたちに伝えて経験してもらえような存在になればいい。	自分が納得できるまでパラカヌーができたなら競技は引退して、指導者として活動していきたいと考えている。パラカヌーでは、障害者が障害者をコーチングするスキームができていないので、自分がその道をつくってきたい。
その他特記事項	デフスポーツを継続するためには、国内に潜在しているデフプレーヤーと指導者、専門競技に精通した手話通訳者、支援者などが有機的に連携していくことが必要である。小学校6年生ですでに160cmを超え、中学校で180cm、現在は192cmという体格に恵まれたことも、競技スポーツへのモチベーションにつながった。	最初からデフリンピックを目指していたわけではなく、棒高跳びがデフリンピック種目だったということで、デフリンピックにも出場した。棒高跳びの競技特性に、短距離走や跳躍と器械運動で培った空中姿勢や空間把握能力が適合した。幼少期から体を動かすことが大好きで、身近な環境としてスポーツがあったことや高い身体能力での成功体験が競技スポーツへの誘いとなっていた。	先天性の障害であるが、10歳から健常者に交じってカヌーを始め、高校では県代表としての国体出場、大学ではインカレ出場と、下肢障害がある中でも、全国レベルで競技に取り組んだ。リオパラリンピックでカヌーが競技に追加されることが決まってから、パラカヌーの日本代表選手になる機会を獲得。

項目	24-G	24-H	24-I
調査年度	24	24	24
識別記号	83	84	85
生まれた年	1964	1995	1981
性別	女	男	男
居住地域	関東	関東	東海
調査時身分 ※1	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	10	0	0
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン ※2	B1	A3	A4
主実施競技 ※3	パラ馬術	パラ馬術	視覚障害者柔道、グランドソフトボール
パラスポーツ開始年齢	47	20	21～22、30～31
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際入賞(柔道)
パラスポーツ開始時の重要な他者	夫と英代表のソフィー・ウェルズ選手	アスリート雇用で採用してくれた企業	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所	体験から受け入れてくれた乗馬クラブK	S乗馬クラブ	盲学校の体育館
パラスポーツ情報提供者	夫	S乗馬クラブの指導者(パラリンピアン、自身は脊椎損傷で車いす利用者)。	盲学校の柔道が専門の先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	指導者	親、特に父親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	家族の理解、夫の後押し、所属先会社、受け入れてくれる乗馬クラブ、応援してくれている関係者の皆さん	S乗馬クラブの指導者(パラリンピアン、自身は脊椎損傷で車いす利用者)	視覚障害者柔道：盲学校の柔道専門のS先生、町道場の先生、練習仲間、練習場への移動を担ってくれた親、特に父親。 ／グランドソフトボール：盲学校の時の友達
パラスポーツ継続状況	44歳で乗馬を始め、47歳でパラ馬術の大会に出場、2016年強化選手、2018年度東京アスリート認定選手に選出。パラリンピック出場を目指した。2017年より契約社員となり、出社は月に1回。週3日から4日は乗馬クラブでのトレーニング。ほかに、ビデオ分析や馬学、コンディショニングトレーニング。パリパラリンピックを目指すため、オランダでの強化レッスンを昨年9月から月に1回行う。12月に国際大会出場。	大学3年時に、東京2020パラリンピックへの参加を考え乗馬でパラリンピックを目指そうと決意。パラリンピアンが教えてくれるS乗馬クラブに入り、指導者との共同生活を始め、食事の提供、車による移動支援も受けている。ジュニアの選手と馬を共有する機会も多く、英語が堪能なことから、海外の大会では選手兼通訳をすることもあり、競技者であると同時に、サポート役を務めることが年々増えてきている。	盲学校で21～22歳の時、視覚障害者柔道大会に出て準優勝した。22～23歳の時初めて国際大会に出場し、2007年に国内大会で優勝し、世界選手権で入賞した。2008年の北京パラリンピック出場後は大きな大会には出場せず、32～33歳で引退した。 30～31歳でグランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達に誘われて始めた。現在は週1回練習をして全国障害者スポーツ大会に出場した。
支援	勤務先／公的機関	勤務先	公的機関
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指し、目標にはまだ遠いので近づくように努力したい。通常レッスンは継続し、半年に1回はオランダでの強化レッスンや遠征の予定。ホースセラピーや障がい者乗馬のサポートをしている。いろんな人に馬に乗ってほしいと思っている。馬術よりスポーツの楽しさを知り、馬術以外にもスポーツを探したい。	今後は、選手を継続しつつも、後輩への支援をしていく予定である。自身がホースセラピーを体験したことでパラ乗馬に興味を持ったように、まずはホースセラピーを体験できる機会を増やして裾野を広げる活動にも携わってこうと考えている。	柔道も体が動くならもう一度やってみようと思うこともあるが、難しいと思う。グランドソフトボールは体が動く限り、続けていきたい。
その他特記事項	障害は、受傷部位を隠したいもの、見られたくないものとして存在した。特に着替えが阻害要因となって、学校における「体育」は、する対象ではないと捉えられてきた。しかし本来体を動かすことは嫌いではなく、環境が整えば、趣味として、さらには競技としてスポーツができることを体現している。パラ馬術は、サポートがあつて継続できている。場所によっては片手で乗るのは怖いというクラブもあるので、受け入れてくれる乗馬クラブでないといけない。	以前、ホースセラピーを体験していたことで乗馬への抵抗感がなくなっていた。パラ馬術に挑戦しようと思ったタイミングと、東京2020パラリンピックに向けてアスリートを支援する企業が増え、実績ゼロの状態でのアスリート雇用契約を結ぶことができた。	視覚障害が進む前に柔道を始め、そのころから障害のない柔道関係者と接していたことが視覚障害者柔道として柔道を行う時の理解が得やすくスムーズな移行ができたと考えられる。視覚障害者柔道、グランドソフトボールとも盲学校を起点としたスポーツの取り組みであり、視覚障害者のスポーツ実施にとって盲学校は大きな影響を及ぼしている。

項目	24-J	24-K	24-L
調査年度	24	24	24
識別記号	86	87	88
生まれた年	1976	2003	1974
性別	男	女	女
居住地域	東海	関東	関東
調査時身分 ※1	一般雇用	その他	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	視覚	肢体	聴覚
障害程度	軽度	重度	重度
学校種別	普通	普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン ※2	A5	A2	A1
主実施競技 ※3	グランドソフトボール(視覚障害者野球)	車いすバスケットボール、カヌー、陸上	競泳
パラスポーツ開始年齢	34	大学1年、小学5年、中学1年生	25
主実施競技の競技レベル ※3	国内上位	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	盲学校1年生の時の担任教師	車いすテニス:両親/陸上:両親/カヌー:区長、K区職員でパラカヌーの選手/車いすバスケット:元車いすバスケット日本代表選手Nさん	ポスターにあった「障害者募集中」の文字、障害者水泳クラブの仲間
パラスポーツ開始場所	盲学校のグラウンド	車いすテニス:C県K市のテニスクール/車いすバスケット:自宅近くの簡易コート	S市民スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者	盲学校1年生の時の担任教師	父親(障害者スポーツに関する情報をインターネットやメールマガジン障害者スポーツセンターの掲示などから得ていた)	障害者水泳クラブの仲間
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	父母	本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	チームの仲間	両親、元車いすバスケットボール選手Nさん	Jアスレティッククラブの仲間、ろう者スイマーYさん、Iスイングクラブの仲間
パラスポーツ継続状況	盲学校卒業後、2011年(34歳)、盲学校1年生の時の担任の教師にグランドソフトボールを見学に来ないかと誘われ見学に行き、そこからグランドソフトボールに関わるようになった。その年の全国障害者スポーツ大会に出場し優勝した。現在、週に一度、日曜日に休憩時間も含めて6時間くらい、ほぼ県の障害者福祉センターのグラウンドで練習をして、年に7回くらい大会に出場している。	幼小期に車いすテニス、チェアスキー、カヌーを始め、中学では、陸上とカヌー、水泳が中心だった。車いすバスケットは小学3年生の時初めて体験し、高校2年生ごろチームに登録するようになった。現在は車いすバスケットが中心でそのトレーニングとして陸上競技をやっている。車いすバスケットの練習は週に4回程度、陸上競技の練習は週に1回程度、自宅でローラーを使ったり、陸上競技場に行ったりしている。	水泳を始めたら、泳げるようになることとタイムがよくなるのが楽しくのめり込んだ。よりレベルの高い大会を目指すために、仕事終わりに遠方まで運転して練習に行く毎日を送った。障害者水泳クラブでは多くのろう者と知り合うことができ障害者の大会とマスターズのどちらか月に1回出場していた。6年前に結婚し、昼間の時間帯にマスターズ同好会メンバーと練習し、マスターズ大会一本に絞って出場している。
支援	公的機関	公的機関	
将来ビジョン	体が動く限りはグランドソフトボールを続けていきたいと考えている。競技が残っていればという前提だが。指導者になろうという事は考えていない。みんなとわいわいやれればいい。	車いすバスケットボールに関しては現在、次世代カテゴリーに在るが、その上のハイパフォーマンスカテゴリーに入り、パラリンピックに出場したいと考えている。これが現在スポーツを続ける上でのモチベーションになっている。将来的にはパラスポーツを続けながら仕事ができる環境があればいいと思う。	マスターズ登録(100歳登録)をしているので、いつまでも環境が許せば泳ぎ続けたいと思っている。
その他特記事項	遠近感がわかりにくいことがあるが、卓球やそのほかのスポーツを経験していたことで、そのことにどう対処すればいいのかということは身についたと考えている。できるだけ長く続けたいが、盲学校に行く生徒が少なくなり、選手数が減少してきており、競技が存続するかが一つの課題となっている。	車いすテニスに始まり、陸上やチェアスキー、カヌーや車いすバスケットボールなどを経験してきた。東京でパラリンピックが開かれることが決まってから、パラスポーツに関する様々な情報が増えたり、体験会が増えたり、カヌー会場が近かったりしたことがポジティブに影響している。またパラリンピック開催を機に設けられた助成金制度の対象にもなっている。両親の強力なサポートがスポーツ実施の後押しとなっている。	学齢期はスポーツとは無縁であったが、25歳の時にたまたま出かけた地元のスポーツセンターに掲示されているポスターを見ていた時に、「障害者募集中」という文字が目に入り、それが契機で水泳を始めると夢中になり、競泳選手として大会に出場するようになった。水泳を通して人生のパートナーとも知り合うこととなり、生活環境は変わったが、これからも水泳人生は続いていく。

項目	24-M	24-N	24-O
調査年度	24	24	24
識別記号	89	90	91
生まれた年	1991	1975	1990
性別	男	女	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	1歳3か月	0	2
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	普通	特支
スポーツキャリアパターン ※2	A2(先天扱い)	A5	A1
主実施競技 ※3	ブラインドサッカー、ゴールボール	バドミントン	陸上競技
パラスポーツ開始年齢	小学校5年、高校1年	21歳ごろ	中学校入学後
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	地域	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み、交際しているパートナー	小学部の担任の先生、視覚支援学校の陸上部の先輩
パラスポーツ開始場所	他県の小学校のグラウンド	近隣市の障害者スポーツセンター	在学していた視覚支援学校
パラスポーツ情報提供者	小学校5年時の担任の先生	幼馴染み	視覚支援学校の陸上部の先輩
パラスポーツ開始場所へのアクセス	小学校5年時の担任の先生、父母	本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	ブラインドサッカー: 当時同じチームで代表チームに入っていたT選手/ゴールボール: 監督の先生/家族	交際しているパートナー(デフの選手)	ガイドランナー、妻
パラスポーツ継続状況	小5でブラインドサッカーを始め中3で日本代表入り。高校の時にゴールボール部とフロアバレーボール部に入り土日はブラインドサッカーをやっていた。高校3年(2009年)の時にゴールボールの日本代表チームに入り、以降2014年までゴールボールに専念。2015年にブラインドサッカーに戻り自分のチームを立ち上げ、2022年に日本代表チームに復帰。2023年にパリパラリンピック出場権を得た。	幼馴染みからの声かけがあり、交際していたパートナー(学校の後輩)がたまたまバドミントン経験者であったことからバドミントンを始めることができた。現在の障害者バドミントンクラブに入り、20年以上活動を継続。現在は週に1回クラブの練習に参加し、コロナ禍以後は、年4回程度大会に出場している(全国ろうあ者体育大会や日本デフバドミントン選手権、各地域のクラブ主催の交流大会等)。	高等部時代に本格的に陸上競技に取り組み、大学には陸上部がなかったため、一年かけて活動拠点を作り、複数のマラソンクラブにも所属し、ほぼ毎日練習。就職後、国際大会に出場し、東京2020パラリンピック出場を目指すも叶わず、同年に引退。今後は、趣味として、走りたい時に走ることができればと考え、現役時代のガイドランナーとは今でも一緒にジョギングをしている。
支援	勤務先/公的機関		なし
将来ビジョン	自分のチームを立ち上げた時からブラインドサッカーの普及や選手育成に関わりたいと考えていた。トップ選手になるためには小さい時から競技を知り、親しみ、技術を身につけることが必要。そのためにもブラインドサッカーに関する情報に触れる機会、競技できる場が必要だと考えている。	バドミントンは激しいスポーツなので、無理をすることなく健康第一でできる範囲で続けていきたいと思っている。来年日本でデフリンピックが開催予定となっており、これからデフリンピックを目指す、もしくはバドミントンを頑張っていきたい人のサポートをしていきたいと考えている。	旅行やアウトドアの活動が好きだが、視覚障害がありなかなか外出ができない、趣味の活動が楽しめないという人たちに、環境づくりや情報発信をしていきたいと考えている。
その他特記事項	体を動かすことが好きだったこと、ブラインドサッカーの情報を得たこと、高校時にブラインドスポーツの部活があったことがスポーツキャリアに影響を及ぼしていると考えられる。日本ブラインドサッカー協会は、パラスポーツ競技団体のマネジメントに関して日本でトップの競技団体であり、競技団体の着実な発展と成長が選手の境遇や競技強化に影響を与えている。	小学校時代はバスケットボールに取り組み、中学校・高校は軟式テニス部で活動していた。バドミントンだけでなく、バレーボールや卓球等、聴覚障害のある人のスポーツ参加が少なくなっており、どうすれば参加してもらえるのか、これから考えていきたいと思っている。他競技の関係者と相談をして、複数種目を同時に体験できるような機会を作りたいと考えている。	子どものころから体を動かすことが好きだったが、水泳が苦手だったことが後に陸上を始めたくっかけとして影響。地方の学校では指導できる先生がおらず、生徒数が少ないため部活動自体がないという状況があるが、部活動の指導者がいて、一緒に走る仲間がいるという環境がとても大きかった。スポーツのためには、健常者のサポートが必要であり、スポーツをしたい視覚障害者とサポートしたい健常者をつなぐシステムがあればよいと思う。

項目	24-P	24-Q	24-R
調査年度	24	24	24
識別記号	92	93	94
生まれた年	1983	1973	2002
性別	女	男	女
居住地域	関東	北海道・東北	東海
調査時身分 ※1	一般雇用	一般雇用	その他
障害発生年齢	5	29	1歳半
障害内容	視覚	視覚	聴覚
障害程度	重度	重度	中度
学校種別	普通	普通	特支
スポーツキャリアパターン ※2	B5	B5	A1
主実施競技 ※3	社交ダンス、ブラインドダンス	視覚障害者マラソン	水泳(バタフライ)
パラスポーツ開始年齢	33	33	5
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくれた友達、一緒に体験に参加した全盲の方、ブラインドダンスサークル代表M氏	トライアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理学科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	地元Sスイミングの店長、母親、姉、妹
パラスポーツ開始場所	Hブラインドダンスサークル	盲学校のグラウンドや盲学校周辺の歩道	地元スイミングスクール
パラスポーツ情報提供者	視覚障害者の社交ダンスの存在を教えてくれた友達	トライアスロンをしていた寄宿舎指導員の女性教員、理学科教員養成施設時代の同級生でブラインドランナーのO選手	母親
パラスポーツ開始場所へのアクセス			母親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ポジティブ	ポジティブ	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	指導者のTさん、ペアのパートナーのNさん	ブラインドランナーのOさん、日常的に一緒に練習しているHクラブのランナー	Sスイミングの選手コースを教える立場のI先生、母親、聴覚障害に理解のあったKスイミングのNコーチ、長いスパンで目標設定してくれた有料の個人コーチA氏
パラスポーツ継続状況	偶然近くにブラインドダンスのサークルがあり、体験に行き入会した。ダンスを始めて半年ぐらいで大会に初めて出て以降、ブラインドの大会には継続して出場している。サークルが「自由練習」として部屋を確保してくれている枠があり、その時に行って練習している。ほかに、先生の教室に週2回くらい通っている。レッスン自体は1時間弱で、トータル3時間程度の練習をしているが、ちょうどいい。	34歳のころ、視覚障害者のランニングチームに参加するようになり、同年初めてフルマラソンの大会に出場した。2010年にはブラインドマラソンの強化指定選手となり、強化合宿の費用がかからなくなった。2011年ころ一般のランニングクラブに入り、室内の400mトラックで練習し、走力の高い人に伴走をお願いもした。2023年の引退後も引き続きランニングを楽しんでいる。	小学部6年で日本デフ水泳選手権大会に初めて出場。中学2年生の時に自宅から近いスイミングに移籍してから多くの大会に出場。中学3年生の時に障害者チームに入り、様々な障害を持った人たちと一緒に練習を始めた。高2の時にKスイミングに移籍、障害者のスイミングクラブも並行して在籍。現在、大学の水泳部メインで活動。有料の個人コーチA氏の指導は、大学3年の春まで。
支援		公的機関	
将来ビジョン	社交ダンスにはクラス分けもないので、全盲と弱視の人が一緒に戦わなくてはならない。パートナーが見つからないと大会に出ることができないので、晴眼者に視覚障害者でもダンスができるということを知ってもらうために晴眼者の大会にも出て戦っていこうと考えている。	トップ選手としては引退した今、今後は楽しくランニングを続けていきたいと考えている。盲学校の生徒や視覚障害の人、若い世代にスポーツをする楽しさや、目標に向かって努力することの大切さを伝えたい。	大学卒業後は地元の県内に残りプールで練習しようと思う。アスリート雇用で企業に就職して引き続き選手を続けて、東京デフリンピック、3年後の世界大会、4年後のアジア大会、5年後の次のデフリンピックに出場したいと考えている。
その他特記事項	幼児期から弱視であり、学齢期には体育やスポーツでよい思い出がなかったが、大学で視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかっただけで、そんなに極端に運動神経が悪いわけでもなかった」と思えるようになり、自分も意外とできると感じられたことがスポーツへの誘いとなった。	視覚障害者となり、一人で様々なことができなくなった時にマラソンと出会い、少しずつ記録がよくなることで自己肯定感が高まった。その点でスポーツの存在が大きな意味を持っていた。インタビューの少し前に、マラソンへのきっかけを作ってくれた女性が現在住んでいるオーストラリアのゴールドコーストのマラソン大会に出場し、トップ選手時代には味わえなかったマラソンの楽しさを味わってきた。	幼少時には顔に水がかかるとも苦手だったが、父親に海に何度となく連れていってもらい泳げるようになりたいと考えたようになった。5歳のころ、スイミングスクールに入るにあたっては障害に対する理解のなさから3か所で断られるが、理解のあるクラブに入れた。高等部の時にKスイミングのNコーチに出会って初めて聴覚障害のことを理解して教えてもらった。

項目	24-S	24-T	24-U
調査年度	24	24	24
識別記号	95	96	97
生まれた年	1987	1992	1989
性別	男	男	男
居住地域	関東	関東	関東
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	選手雇用
障害発生年齢	15	0	16
障害内容	視覚	聴覚	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	普通	普通
スポーツキャリアパターン ※2	B2	A3	B4
主実施競技 ※3	ローイング、クロスカントリースキー	デフラグビー	パラ水泳、ブラインドダンス
パラスポーツ開始年齢	29、31	高校3年合宿	23、27
主実施競技の競技レベル ※3	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	視覚障害者柔道:大学のクラスメートの柔道選手/ローイング:大学院進学先の大学ボストクの知人	デフラグビー発起人のOさん	パラ水泳:SNSを通じて知り合い、パラ水泳のクラブなどを教えてくれた人/ブラインドダンス:ブラインドダンスパーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所	柔道:T1大学/ローイング:東京都パラリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー:全国合宿	水泳:T障害者スポーツセンター/ブラインドダンス:ライオンズクラブのパーティー
パラスポーツ情報提供者	視覚障害者柔道:大学のクラスメートの柔道選手/ローイング:東京都パラリンピック選手発掘プログラム	デフラグビー発起人のOさん	水泳:SNSを通じて知り合いパラ水泳のクラブを教えてくれた人/ブラインドダンス:パーティーに誘ってくれた視覚障害者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	本人	本人	
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	ネガティブ	ポジティブ	ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	ローイング:よきライバルであった視覚障害者があるローイング選手/クロスカントリースキー:選手兼コーチのガイドの方	現在働いている法人W	近くで活動しているパラ水泳のクラブにいたAさん、オリンピックレベルの指導者N1さん、N大学のN2先生、Fさんなどのコーチ陣とタッパーのKさん
パラスポーツ継続状況	20歳のころ、視覚障害者柔道を始めて7～8年継続。28歳で東京都の選手発掘プログラムに参加し、ローイング競技から声をかけられ本格的に開始。最初は仕事をしながら深夜練習をしていたが1年くらい続けて東京パラに向けて仕事を辞し、アスリート雇用で現在の企業で競技を続けている。ボートの単一動作の反復だけでなくクロストレーニングの重要性を知り、冬季はクロスカントリースキーのトレーニングを始めた。	ラグビーの強豪大学でトップレベルのラグビーと向き合い公式戦出場を果たした。大学4年間で「ラグビーはやり切った」と思い、第一線から離れ趣味程度で楽しもうと思った。卒業後に一時休止していたデフラグビーでの活動を再開、世界大会で日本代表キャプテンを務め、普及や強化活動に取り組んでいる。現在はW法人に所属し、子どもたちにラグビーの指導もしている。	2015年に、選手雇用で転職。2017年に都内大学院に進学し、奨学金や各種補助金で金銭的に楽になる。コロナ禍は、地元に戻り高校時代の仲間の伝手でプールを使ったり、自宅の庭に小型プールを設置して練習した。東京パラ後、スペインに練習拠点を移す。日本とのスポーツに対する価値観の違いに刺激された。パリ大会が近づき、タッピングの連携のこともあり、練習拠点を国内に戻した。
支援	勤務先		公的機関
将来ビジョン	ローイングと並行してトレーニングとして始めたクロスカントリースキーを現在メインとしている。ローイングはロサンゼルス大会で新クラスができチャンスがあればという意識でいる。スキーと重ならないところで練習や合宿に参加し、競技活動は続けているが、スキーをメインでやる上で、フィジカルトレーニングの一環という位置づけで継続していく。	強化の面では、世界大会優勝か優勝ができなくてもそこに挑む姿を多くの人に見せること。育成世代には、デフラグビーで頑張っている姿が刺激になる、明るい未来があることを伝えたい。デフラグビーを何をもって広めたことになるのかと考えた時、最も難しい課題である「デフラグビーのアジア大会を開催すること」、これが最大の目標である。	トップ選手としていつまでやれるかわからないが、2026年アジアパラ大会までは競技選手としてやりたい。今後、ブラインドダンスの競技会に出るなどしてもう一度ダンスを本格的にエンターテイメントとしてやってみよう。ライフワークとして「非認知教育」に取り組みたい。頑張ること自体楽しいというマインドセットを普及させたい。
その他特記事項	代表になるチャンスがあることを知り、本気で競技スポーツと向き合うことができ、障害をプラスに捉えることができたという意味でパラリンピック、パラスポーツとの出会いは障害受容への大きなきっかけであった。研究職としての専門性が競技継続に影響している。自ら調べてクロストレーニングの一環としてローイングとクロスカントリースキーを行うことや、目標値を計算し具体的な計画のもとで実践することでモチベーションを高く保っている。	自らが積極的に切り拓く姿勢があった。これは両親や姉の影響が大きい。父や姉から勧められた『三国志』『キャプテン翼』『シュート!』などの漫画は、日常で得られない「見える会話」を学ぶことも多く言葉の獲得や競争心を高めるのに大きな影響を受けた。大学の監督から「ユーモアがない」「わかったふりをしない」と助言を受け、字幕付きでお笑いのテレビ、ナイツやサンドウィッチマンを見てユーモアを学び、監督からは人生哲学を学んだ。	水泳、競技ダンスともパラ競技として取り組む前に本格的に行い、その後パラスポーツとして実施している。世界トップクラスの成績を持つが、勝利がすべてではなく、努力することを楽しむというマインドを持っている。パラリンピックを目指す期間と日本のパラスポーツ環境が激変する期間が重なっており、NTCイーストの完成や各種制度や補助金の恩恵に与れている。将来的には、他競技にもう一度シフトしていきたいという展望を持っている。

項目	24-V	24-W	24-X
調査年度	24	24	24
識別記号	98	99	100
生まれた年	1983	1991	1992
性別	女	男	男
居住地域	関東	関西	関西
調査時身分 ※1	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	0
障害内容	肢体・視覚	聴覚	聴覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	特支	特支→普通	特支→普通
スポーツキャリアパターン ※2	A2	A3	A2
主実施競技 ※3	水泳、陸上、パワーリフティング	バドミントン	デフバレー、デフビーチバレー
パラスポーツ開始年齢	13、15、39	大学1年	12、20
主実施競技の競技レベル ※3	国際出場	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	陸上：学校の先輩(車いすマラソンに出場)、マラソンに出場していた年長の車いす利用者／パワーリフティング：公共施設のジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー：中学部の担任であった体育の先生／デフビーチバレー：友人(2014年時)
パラスポーツ開始場所	陸上：障害者スポーツセンター／パワーリフティング：公共施設とレンタルジム	大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンクラブ	デフバレー：O市立聾学校中学部／デフビーチバレー：桜ノ宮ビーチ
パラスポーツ情報提供者	陸上：学校の先輩、マラソンに出場していた年長者／パワーリフティング：ジムに同行したガイドヘルパー	聴覚障害のある大学の先輩	デフバレー：中学部の担任であった体育の先生、デフ日本代表監督
パラスポーツ開始場所へのアクセス	ガイドヘルパー		
パラスポーツ開始前のスポーツの影響 ※4	なし	なし	なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	パラ陸上：障害児のスポーツクラブの代表者(パラリンピアン)／パラ・パワーリフティング：ガイドヘルパーとパラ・パワーリフティング連盟のコーチを兼務している指導者	家族、競技活動を支えてくれている人々	デフビーチバレー：妻(元デフバレーボール日本代表)、デフビーチバレーボール協会の理事長であるU氏
パラスポーツ継続状況	13歳から水泳大会に中高と出場。陸上は15歳から。車いすマラソンから始めたが視覚障害の影響で困難を感じ、徐々に距離の短い種目を選択、視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け全国大会に出場。パワーリフティングは39歳から。徐々に重いバーベルを上げられるようになった。連盟の関係者が運営するジムに入会し、アジア・オセアニア大会にも出場して自己記録を更新。	大学1年時に初めてデフバドミントンの大会に出場。大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンのクラブに月に2回程度参加した。2年からは日本代表になり、国際大会に出場した。大学を卒業してから6年ほどは、仕事の後ほぼ毎日、複数の社会人クラブで練習した。結婚を機に関東から関西へ引っ越し、仕事と子育てを両立しつつ週1、2回2つの社会人クラブ、2つの大学を拠点として競技を継続。	聾学校中学部でバレーボールを始め、B高等学校進学後は関西のデフバレーボールチームSに所属、高校、大学と2度のデフリンピック参加を果たす。大学卒業後はO市役所に勤務しバレーボールとビーチバレーボールを並行して行っていたが、2018年にT株式会社へ転職後はビーチバレーに専念し、ビーチバレー大阪代表として、またデフビーチバレー日本代表として活躍している。
支援	勤務先	勤務先／公的機関	勤務先
将来ビジョン	定年までパラ・パワーリフティング選手としてパラリンピックを目指して活動していきたい。	競技を続ける中、選手そして人として成長させてくれた家族や仲間との大切さに気づく。2025年のデフリンピックに集大成として出場し、メダルを獲得することで、応援してくれた人に感謝の気持ちを伝えたいと思っている。デフリンピック後のことは現時点で明確になっていないが、次世代の選手を育成していきたいと考えている。	公務員と民間両方を経験した教師はなかなかいないと思うので、教師になるのも選択肢の一つ。さらに上を目指すために、競技と向き合う時間をより確保できるアスリート社員も射程である。デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。現役の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえるよう頑張っていきたい。
その他特記事項	肢体および視覚の重複障害であるが、単一障害のクラス分けに合わせて大会に出場するため、不利になる。肢体不自由、視覚障害のどちらの障害特性も理解している指導者は少ない。肢体不自由者のスポーツ指導の経験はあるが、視覚障害には知識がなかった指導者が、視覚障害についても勉強して知識を得てくれたため、効果的な技術力向上につながり、パワーリフティングをやる際の不安が解消された。	聴覚障害のある人がもっとスポーツを楽しむためには、コミュニケーションのサポートが一番大事であると思う。バドミントンの練習時に、手話通訳等がなければ、具体的な技術、それに関わる動きが理解できない。指導者の動きを真似するだけでは技術向上につながらず、楽しさを感じることができない。活動時に情報保障がなされることで、いろいろなスポーツにもっと多くの聴覚障害者がアクセスできると思う。	ビーチバレーボールは砂の上で動くため、高い身体能力が必要であり、コミュニケーション能力や人間力も備わっていないとチーム作りもうまくいかない。様々な要素が求められるので簡単ではないが、ビーチバレーボールでの学びが自身の成長を助長しているのは間違いないと感じている。

## ■図表1-1 注釈

※1 調査時の雇用形態を示している。過去に選手雇用があった場合も含む。

※2 スポーツキャリアパターンは下記のとおりとしている。

先天的 障害者	A1		② パラスポーツを始める		現在	A1
	A2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A2
	A3	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	A3
	A4	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A4
	A5	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うパラスポーツを始める		現在	A5
	A6	① 一般スポーツとして始める (複数の場合もあり)	② ①と違うパラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	A6
後天的 障害者	B1		② パラスポーツを始める		現在	B1
	B2		② パラスポーツを始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B2
	B3	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B3
	B4	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と同じスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B4
	B5	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める		現在	B5
	B6	① 一般スポーツを始める (複数の場合もあり)	② ①と違うスポーツをパラスポーツとして始める	③ ②と違うパラスポーツを始める (複数の場合もあり)	現在	B6

### A1、A2

A1 は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。

A2 は先天的障害者で、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後ほかのスポーツを行うようになり現在に至っている人である。

### A3、A4

A3、A4 は先天的障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4 はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。

### A5、A6

A5、A6 は先天的障害があるが、A3、A4 と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5 は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6 はその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。

## B1、B2

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で、B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。

## B3、B4

B3、B4 も後天的障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。

## B5、B6

B5、B6 は後天的障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。

※3 現在を含めパラスポーツとして主として取り組んできたもので、現在実施している競技と異なる場合もある。

※4 先天的障害者の場合は「なし」としている。

氏名 24-Aさん

インタビュー実施日時 2024年1月27日 10:00~11:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1999年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:脳性麻痺 1種2級
略歴	早産により障害が残り、3歳の時に障害者手帳を取得した。ハムストリング、股関節および腸の手術を経験している。手術後は数か月学校を休んだりしたが、水泳の継続には大きな影響はなかった。小・中・高等学校は普通学校に通学。スポーツ推薦で大学に進学した。大学4年間は水泳部に所属(スピードの違いからほかの学生とは違う時間帯で練習)。大学進学時にH県から関東地区に転居した。東京パラリンピックの選考会を最後に水泳は引退し、現在、証券会社に勤務している。
競技基本情報	競技:水泳 クラス分け:S7 競技成績:国際大会(ユース)入賞 競技開始年齢:3歳から水泳を始め、パラ水泳は小学校5年時から。
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・両親とも水泳をしていた。父親がスイミングクラブのコーチをしていたこともあり、3歳からスイミングスクールに通い始めた。障害児コースではなく一般のコースで練習した。目に見えてわかる障害だったことなどからほかの子どもたちとよい関係を築くには至らなかった。 ・小・中学校の体育は支援員のサポートのもと、できることはみんなと同じように、できないことは別メニューで参加した。高校からは支援員はいなかったが、可能な限りみんなと同じように参加した。 ・小・中と週3回のペースでスイミングスクールに通った。行きは母親が送ってくれ、帰りは父親と一緒に帰った。  始めた場所: ・父親がコーチを務めるスイミングスクールのプール  重要な他者: ・父親(水泳の日本代表にもなった経験がある)
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・父親がスイミングスクールのコーチであったこと。

受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校 5 年の時にパラ水泳競技連盟の方と出会い、その後積極的にパラ水泳の大会等に参加するようになった。</li> <li>・高校でも父親が勤務するスイミングスクールのプールで、高校の水泳部員(父親が監督)たちと一緒に練習した。これらの点で父親の影響や支援は大きかった。</li> <li>・高校時代は水泳部に所属した。ほかの選手と一緒に練習できたことは刺激にもなり、よかった。</li> <li>・大学では水泳部に入ったが、ほかの部員と同じ時間帯の練習ではないことが多く、同じく障害のある水泳部員の N さんとよく練習をした。</li> <li>・大学生の時に Y スポーツ振興財団から助成してもらい、そのお金で、低酸素室でのトレーニングなどを行った。</li> <li>・障害のある選手にも障害のない選手と同じように大学から支援(練習時間帯やプール使用、コーチ帯同など)があればモチベーションに好影響があったかもしれないと感じている。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(小学校)父親</li> <li>・(中学校)父親、自分に一目置いてくれていた後輩たち</li> <li>・(高校)父親、ほかの部員と同じ時間帯に練習できたので水泳部の部員から刺激を受けた</li> <li>・(大学)障害があつて水泳部に所属していた N さん(よく一緒に練習をした)</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・父親がパラ水泳の日本代表チームの監督となったこと。</li> <li>・父親が同じ大学、同じ水泳部の卒業生でもあつたことで大学において目に見えないものを含めて支援があつた。</li> <li>・勤務する会社がパラ水泳のスポンサーになっていたことが就職活動の中でプラスになった。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今すぐにとはいかないかもしれないが、10 年後、20 年後スポーツに関われる部署で仕事ができればと考えている。またそういうことができないか模索している。</li> </ul>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・先天性障害で、3歳から水泳を始めた。両親が水泳をやっていたこと、父親がスイミングスクールの指導者であったことなどから水泳を始めた。</li><li>・小学校 5 年の時にパラ水泳関係者と出会い、それからパラ水泳の大会に出場するようになった。</li><li>・高校の時はほかの水泳部員と一緒に練習ができたことでモチベーションが高くなったり、また、様々な刺激を受けていた。</li><li>・大学時代はほかの部員と一緒に練習ができず、一人で練習したり、同じ障害のある選手と二人で練習することが多くなり、モチベーションの維持に苦勞していた。</li><li>・将来的にはスポーツに関わる部署でスポーツに関わる仕事をしたいと考えている。</li></ul>
-----	--

(作成者名)藤田紀昭

氏名24-Bさん

インタビュー実施日時 2024年3月5日 10:30~12:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1977年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:骨形成不全症 1種1級
略歴	幼稚園・小・中学校は普通学校に通学。高校は受け入れが可能な定時制高校に進学。短大に進学の後、4年制H大学に編入した。大学卒業後、福祉関連の施設に就職。2年後(26歳)に結婚し、28歳で男児を出産した。33歳で実銃の免許を取得した。このころK市内にあった職場からM市の職場に転職。練習はやりやすくなった。2017年にアスリート雇用で転職した。現在、ロサンゼルスパラリンピック出場を目指してトレーニングしている。
競技基本情報	競技:射撃 クラス分け:SH1(銃を自分で保持することができるクラス)の伏射が専門 競技成績:国内大会優勝、国際大会出場 競技開始年齢:21歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・幼稚園・小・中・高校と公立の普通学校に通学。大学も同様。 ・障害(骨形成不全症)がわかったのが3歳のころ。幼少期はバギーで過ごすことが多いが、歩ける時は歩いていた。 ・みんなと同じように遊んだり、運動したりすることが多く、その後は年に1~2回の骨折を繰り返す。 ・小学校2、3年のころから車いすを使用。 ・体育の授業は最初のころはみんなと一緒にやっていたが、体力面で差が出てきたころから支援員の方1人と一緒に別メニューで参加した。運動会はダンスなど参加可能なものは参加。その他はレースで走る距離を短くするなどの配慮のもとに参加していた。 ・小・中と骨折が怖く、スポーツに関心はなかった。中学は演劇部だった。 ・中1で交通事故に遭い、入退院、リハビリの繰り返しで中学校にはあまり通えず、その影響もあり、高校は定時制に進学した。高校はほかにも車いすの人がおり、バリアフリーだった。高校の体育の時間は参加可能な卓球や軽運動をした。 ・4年制大学に編入後、かなり強い誘いを受け、気が進まないながらも車いすバスケットボール部に入部したが、障害の関係でプレーは難しかった。 ・自動車免許証の更新(20歳で取得)に障害者対応のあるK市の運転免許試験場に行った。担当の人が車いすで、その人に車いすバスケットをやめたいと相談、その人が射撃をしていることを知り、関心を持ち(車いすでもできるのか? どのようにや

	<p>っているのか?)、その人の練習を見に行き、(ビームライフルを)体験もした(10 点満点が出せ、自分にもできると楽しく感じた)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これを契機に、M市のIスポーツセンター(自宅から車で1時間程度)で開催される障害者対象ビームライフル教室に誘ってもらい参加した。その後H大学在学中、不定期ではあるが教室に参加するようになり、年に一度の大会を目指すようになった。最初に出た試合で優勝し、さらに楽しくなった。</li> <li>通っていたスポーツセンター閉館の危機に際し、「スポーツセンターを守る会」会長に就任。存続が決定し、スポーツセンター利用者やその家族など様々な人から応援され、パラリンピック(実銃の免許が必要)を目指そうと考えるようになり、実銃(エアライフル)の免許を2010年(33歳の時)に取得した。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(射撃)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>障害者対象のビームライフル教室を開講しているIスポーツセンター</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>射撃(ビームライフル)を紹介してくれた運転免許試験場のスタッフ(自身も射撃選手)</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>Iスポーツセンターが障害者の利用も可能で、障害者対象のビームライフルの教室を実施していたこと。</li> <li>障害者対応の運転免許試験場があり、そこに車いすの射撃の選手がいたこと。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>先天性障害のため記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>実銃の資格取得後はNライフル射撃場で練習するようになった。当初は仕事と育児で月に1回練習できたらよい方だった。</li> <li>2013年に初めて国際大会(アジアパラ大会)に出場した。</li> <li>その後40歳前後でライフル銃の免許も取得した。</li> <li>2017年にアスリート雇用でV社に転職し、練習時間を就業時間とみなしてもらったり、遠征費など補助してもらったりできるようになり練習にうちこめる環境になった。</li> <li>現在週3日は射場で一日練習し、そのほかの日は自宅でシミュレーションの機械を</li> </ul>

	<p>使って練習している。メンタルトレーニングのコーチもあり、オンライン等で指導を受けている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パリパラリンピック出場は厳しいので、ロサンゼルス大会を目指している。</li> <li>・パラリンピック出場のためにはMQSという最低基準点(弾を撃つ的に当たった得点)を2回以上クリアし、さらにランキング上位に入ることが必要である。</li> <li>・現在は健常者の試合にも出るようになり(以前から制度的には出られたが自分がそのレベルに達していないと考えていた)、昨年は12回大会に出場した。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・S選手(大会でよく優勝していて、憧れの遠い存在)。</li> <li>・両親と家族、コーチ、会社の人たちの応援。夫は大会等に帯同してくれている。</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害者アスリートのための転職サイトの開設</li> <li>・障害者選手のアスリート雇用制度の存在</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<p>・パラリンピックに出場することと、長く競技を続けることが目標である。年齢とともに体力は落ちてくる、しかし競技レベルは下げたくないし、かといって障害のこともあり体に大きな負担はかけたくない。そうした中でいかに続けていくかが課題となっている。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・骨が折れやすいなどの障害の特徴から、大学に入学するまで体育の授業で体を動かす程度でほとんど運動やスポーツには縁のない生活だった。しかし、ビームライフル射撃を知ったことでスポーツを行うようになった。子どものころからスポーツに関心があったり、親しんでいたという選手が多い中でレアなケースといえる。</li> <li>・骨形成不全症という病気の特徴から身体接触のない射撃などターゲット系の競技と出会えたことが、競技生活への入り口となっていた。</li> <li>・スポーツ実施のきっかけが、運転免許証更新時の担当者からの情報提供という偶然、通える範囲に障害者を対象としたビームライフル教室を開講しているスポーツセンターがあったという偶然が作用していると考えられる。</li> <li>・パラリンピック等の国際大会に出場するためには実銃所持の免許が必要となるため、その点をクリアする必要があった。</li> <li>・国際レベルでの競技継続には経済的な支援が必要であるが、障害者のアスリート雇用制度が近年一般化されつつあることの恩恵を受けることができていた。</li> <li>・年齢的に長く継続できる競技特性があり、長く競技を続けることが今後の目標となっている点も特徴的といえる。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Cさん

インタビュー実施日時 2024年3月7日 14:00~16:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1970年 性別:男性 障害発生年齢:先天性(3歳時に確認) 障害内容:小児麻痺(脳性麻痺) 3級 下肢および上肢(右)に障害あり。 リハビリ期間 幼少期不定期的にマッサージなどに行っていた。
略歴	日常生活では車いすを使わず、外出時や長い移動などの時は車いすを使う。普通幼稚園、小・中・高校、大学に通学。
競技基本情報	競技:射撃 クラス分け:P1 SH1 競技成績:国際大会出場 競技開始年齢:47歳
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	経緯 ・幼稚園のころはほかの子どもたちと一緒に遊んでいた。 ・小学校までは体育や運動会など障害のない子と同じようにしていた。できない種目はしていなかった。体育以外のスポーツはしていなかった。足を引きずっていたがいじめなどはなかった。 ・中学校の体育には参加せず、教室で課題に取り組む。小学校のころ徒競走など嫌だったので参加しなくてすむのは気が楽だった。部活動にも入っていなかった。 ・高校ではほかに自分より重度の生徒がいたのでその人と一緒に筋肉トレーニングなどをやっていた。これは楽しいと感じた。部活動等には入らず、もともと鉄砲が好きでBB弾サバイバルゲームに没頭した。サバイバルゲームが流行し始めて友人とチームを組んで参加した。映画『ダーティ・ハリー』を見て鉄砲が好きになった。 ・大学に進学後弓道部に入ったが幽霊部員だった。学生時代はマージャンに明け暮れ、その後中退した。 ・大学在学中に車の国内A級ライセンスを取得。カートの運転をしたが、エンジンを押しがけすることなどが大変だった。カートレーサーは結局断念した。 ・その後、簿記の専門学校に進み、A級ライセンスを持っていたことが縁で卒業後、K県で民間企業に就職、2年間勤めた。その後27歳でK県庁に障害者枠で転職。 ・県庁に入職後、従弟にナイターゴルフに誘われゴルフを始め、毎週末ゴルフ場をまわるほど没頭した。障害があるけどたまに勝てたり、ほかの人と対等に戦えたりするところが魅力だった。ゴルフ場を歩くのは(障害の関係で)大変だったが、おかげで脚力がついた。 ・30代のころ障害者ゴルフの大会にも出場した。障害のない人と一緒にやっていたので障害者に負けることはないと思っていたらボロボロに負けた。

	<p>・その後ゴルフは、朝がきつかったり、18 ホールをまわるのに疲れるようになった。また肩を痛めたことなどもあり、42、3 歳でゴルフをやめた。</p> <p>・高校の時にBB弾を撃っていたことを体が覚えていて、いつかは実弾を撃ちたいと思っていた。ゴルフをやめてクレー射撃をしようと考え、警察に相談に行き、免許が必要なことを知り、免許を取った。</p> <p>・その後しばらく何もしなかったが免許の期間(3 年間)が切れる前に銃を所持しなくてはならなかったのでエアライフル銃を購入し、所持許可が警察からおりた。いろいろと調べる中でパラリンピックにエアピストルやエアライフルという種目があることを知り、パラリンピックに出る方法を調べた。</p> <p>・その結果いずれかの組織に所属しなくてはならないことがわかり、インターネット等で調べたり、日本障害者射撃連盟(当時)に連絡をとったりした。ようやく K 県内の組織を見つけ 47 歳くらいで所属した。</p> <p>・S 県で行われた全日本大会を見に行き、そこで様々な情報が得られ、自分が所持しているエアライフルは練習場で撃てないことや、持ち運びや競技のための車いす改造も大変なことがわかりすぐにピストルに切り替えた。</p> <p>・ピストルは障害のない人も含めて全国で 500 人しか持つことができないため所持の条件が非常に厳しい。現在、障害者で所持しているのは 5 名のみ。射撃の段級制度があり、決められた期間内にそれをクリアしていく必要がある。それからは射撃三昧。現在は 4 段。</p> <p>・ピストルは一つのクラスで、10m先の的を 60 発撃ち、600 点満点で競う。パラリンピックに出るような人は 570 点以上は出す。自分は 555 点がベスト。</p> <p>・ピストルを所持して最初に撃ったのがランクリスト大会だった。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・K 県内のゴルフ場</li> <li>・K 県の I 射撃場(射撃)</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・従弟(ゴルフ)</li> <li>・M さん。大会を初めて見に行って、様々な情報をくれた人</li> </ul>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・射撃関連の免許、銃の所持資格制度や所持を維持する段級制度の存在。</li> <li>・射撃場や射撃に関する情報が少ないこと。</li> </ul>

<p>受傷前スポーツ 経験が障害者 スポーツ開始に 与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
<p>障害者スポーツ 継続に関する状 況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在も K 県の射撃場で練習をしている。最初のころは週に 1 回は行っていたが、最近ではそこまで行けていない。</li> <li>・射撃場に行って撃つのも練習だが、現在は疲労が蓄積することもあり、撃つ練習は月に一度くらいに減らし、自宅でできる練習を行っている。</li> <li>・自宅ではインナーマッスルを強化する練習や引き金をスムーズに引く練習を週に一度程度実施している。</li> <li>・現在年に 6 回程度は様々な大会に出場している。</li> <li>・競技にかかる費用は銃を購入すれば、あとは遠征費などで、それほど多くはかからない。海外遠征に行くと費用は大きくなる。1 回の遠征で 50 万円程度はかかってしまう。選手雇用でない自分には厳しい。</li> <li>・選手雇用も考えなくはないが今の安定した生活も捨てがたく、踏み切れない。</li> <li>・障害者でピストルをやっている人は非常に少ない。一緒にやっている仲間はお互いに切磋琢磨して、やっている。</li> <li>・ピストルは非常にメンタルな競技であることから、ゴルフをとことんやっていた経験は、最後まで諦めない気持ちの面で大きく役立っている。</li> <li>・公務員ではあるが、遠征などに対してある程度は理解してもらっている。</li> <li>・射撃場のバリアフリー化はあまり進んでいない。自分でも階段を上るときなどに怖い思いをすることがある。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒にピストルをやっている仲間</li> </ul>
<p>スポーツ継続に 影響を与えた社 会的状況・環 境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・射撃関連の免許、銃の所持資格制度や所持を維持する段級制度の存在。</li> <li>・ピストル所持の枠が 5 名という実態。</li> </ul>
<p>今後のスポーツ 実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロサンゼルスパラリンピックを目指す。そのためにも、5 段(564 点)をクリアしたい。当面は全日本パラ射撃選手権で 3 連覇をしたい。</li> <li>・競技の普及も考えているが、わずか 5 人なのでどうしていいのかわからないのが正直なところである。</li> </ul>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・幼稚園から中学校まではほとんどスポーツには縁のない生活を送っていた。</li><li>・高校でBB弾の鉄砲を使ってのサバイバルゲームにのめりこんだ。</li><li>・大学では弓道部に入ったがほとんど活動らしいことはしなかった。</li><li>・就職後ゴルフにのめりこんだが、疲れやすくなったことや肩の痛みなどがあり、足が遠のいた。</li><li>・その後、昔から銃に関心があったことから情報を積極的に仕入れ、パラ射撃を始めた。</li><li>・銃所持に関する様々な条件があり、それらをクリアすることで、銃の保持を維持し、選手を継続できている。</li><li>・脳性麻痺という障害の特徴から体の動きに制限があることが疲れやすさや各種スポーツ、学校体育への参加に制限を加えていた。</li></ul>
-----	--

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Dさん

インタビュー実施日時 2024年3月12日 15:20~16:20 場所 T大学

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:2001年 性別:男性 障害発生年齢:3歳ごろ 障害内容:伝音性難聴 2種6級(平均70dB)
略歴	Y高等学校でハンドボールを始める。TG大学3年生(21歳)でデフハンドボール日本代表チーム設立を目指してハンドボールを再開、現在メンバーが20名となり、2024年度の東京都社会人ハンドボールリーグに「デフハンドボールクラブ」として加盟、チームの強化を図り、東京2025デフリンピックでプレーすることを目指している。
競技基本情報	競技:デフハンドボール クラス分け:Deaf(良耳55dB以上) 競技成績:まだない 競技開始年齢:ハンドボール15歳/デフハンドボール21歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・3歳のころに両親が呼びかけに反応しないことに気づき受診、難聴の診断を受けた。T聴覚特別支援学校(分校)において幼稚部から小学部3年生まで特別支援教育を受け、小学校4年生で地域の小学校にインテグレーションした。聴覚特別支援学校在学中から定期的に小学校とは居住地域交流があったことから、友人もあり、転入後も特に不安なく学校生活を送れた。 ・中学校ではサッカー部に入り、顧問の指導のもとに楽しいサッカーを経験したことから、高等学校でもサッカーを継続すべく受験するが、第二志望の高校に進学することとなった。この高校はサッカー強豪校であったため、別の部活動を探していたところ、中学校のサッカー部の先輩が「ハンドボール部」で活動している姿を見て、ハンドボール部に入部した。当時のハンドボール部は部員が7名と試合登録メンバーギリギリであり、3年間試合に出場したが勝利はなかった。ただ、顧問の先生はハンドボール経験者で、ずっと指導してくれ、ハンドボールが楽しかった。 始めた場所:Y高等学校ハンドボール部 重要な他者: ・ハンドボール開始期:中学校のサッカー部の先輩 ・高等学校期:顧問教員
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・2025年のデフリンピック東京開催が決定した。日本はまだ一度もハンドボールでデフリンピック出場を果たしていないが、東京開催を契機に「ハンドボール日本代表チームを結成する」機運が高まった。 ・TG大学に進学したことで、デフスポーツとの接点が生まれ、顧問として仲介役を担ってくれたデフスポーツに詳しいN1教授とT大学ハンドボール部OGで元TG大

	学助教であったN2氏との連携で日本ハンドボール協会の中にデフハンドボール専門委員会が立ち上がった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校のサッカークラブでの経験が競技スポーツへの誘いとなっている。さらに高等学校ではハンドボール部で3年間プレーをし、勝利の経験はないもののハンドボールの楽しさを享受したことで、競技スポーツへの興味・関心が高まった。</li> <li>・また、身体的特徴として小学校6年生ですでに160cmを超え、中学校で180cm、現在は192cmという体格に恵まれたことも、競技スポーツへのモチベーションにつながったようである。</li> <li>・父親の勧めでTG大学進学を決め、デフスポーツと出会い、日本代表としてプレーする姿を描くことにつながっていく。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高等学校卒業後、I県にあるTG大学に進学したが、ちょうど新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言時期と重複し、1年間はT県で自宅待機となった。オンライン授業となりほとんど外出しない生活が続き、全くスポーツから遠ざかっていた。2年目によりやく大学キャンパスに来ることができ寮生活を始めたが、同期とのつながりは薄かった。最初にサッカーサークルに入り地域リーグでプレーをしたが、競技というよりも楽しむプレーの雰囲気であった。</li> <li>・大学の講義で「デフリンピック」や「デフスポーツ」を知った。日本開催のデフリンピックにハンドボールで出場するという目標ができ「デフ日本代表になれる」というN1教授の誘い文句が決め手となり、3年の終わりに「デフハンドボール体験会」を企画した。インスタグラムやチラシなどにメールアドレスを添えて広報を始めたところ、ろう者でハンドボール経験者であるMさんをはじめとする数名が連絡をしてきた。さらに、未経験者であるが興味があるという人からも問い合わせがあり、デフハンドボールのチーム設立に向けて動き出せる見込みが立ってきた。その時に積極的に動いてくれたのがT大学ハンドボール部出身のN2氏であり、日本ハンドボール協会の中に、デフハンドボール専門委員会を立ち上げる原動力となったキーパーソンである。</li> </ul> <p>主な実施場所：TG大学ハンドボールサークル</p> <p>重要な他者：N1氏(TG大学教授)、N2氏(T大学女子ハンドボール部OG、日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会委員長)、M氏(デフハンドボール選手・GK)、T氏(選手・レジェンド的存在)</p>

<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・「デフハンドボール体験会」を企画、Instagramやチラシなどにメールアドレスを添えて広報を始めたところ、ろう者でハンドボール経験者である M 氏(GK)、T 氏(選手・レジェンド的存在)をはじめとする数名が連絡をしてきた。さらに、未経験であるが興味を持ったろう者が集まり、現在 20 名で定期的に練習ができるようになった。</p> <p>・また、N2氏のつながりで、S 県の高等学校教師で元 T 大学ハンドボール部であった K 氏が指導者として参画、T 氏の関係でハンドボール経験がある手話通訳者が複数名帯同してくれている。月に 1 回の合同練習と週に 1 回の T 地区での練習を継続してきたが、練習拠点となる場所がまだない。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>・大学卒業後 2024 年 4 月より都内の補聴器関連会社に就職するため、練習拠点は都内になる。さらに東京都社会人ハンドボールリーグの 4 部に「デフハンドボールクラブ」として加盟し試合経験を重ねることを目指して準備を進めているが、経済的な支援が不足しているため、スポンサー等についても探していく必要がある。</p>
<p>まとめ</p>	<p>・東京 2025 デフリンピック開催決定を契機に、日本代表でプレーという具体的な目標ができたことから、24-D 選手のデフハンドボールプレーヤーとしての挑戦が始まった。</p> <p>・そこに至るまでには、中学校でのサッカークラブでの競技スポーツへの誘い、高等学校ではハンドボール部で 3 年間プレーをし、勝利の経験はないもののハンドボールの楽しさを享受したことで、競技スポーツへの興味・関心が高まった。</p> <p>・また、小学校 6 年生ですでに160cm を超え、中学校で180cm、現在は192cm という体格に恵まれたことも、競技スポーツへのモチベーションにつながった。TG 大学進学でデフスポーツと出会い、日本代表としてプレーする姿を描くことにつながっていく。</p> <p>・デフスポーツを継続するためには、国内に潜在しているデフプレーヤーと指導者、専門競技に精通した手話通訳者、支援者などが有機的に連携していくことが必要である。</p>

(作成者名)齊藤まゆみ

氏名 24-Eさん

インタビュー実施日時 2024年3月19日 17:15~18:15 場所 Y市立ろう特別支援学校

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1986年 性別:男性 障害発生年齢:不詳(先天性) 障害内容:聴覚障害 1種2級
略歴	幼児期に難聴であることがわかり、幼稚部から高等部までろう学校・専攻科を1年経てO大学卒業、教員免許を取得し保健体育教諭として勤務している。ろう学校ではバレー部のキャプテン、中学部の時に地域のクラブで器械運動を始め、2003年(17歳)から棒高跳びを専門競技とする。2009年台北大会から3大会連続デフリンピックに出場し、2017年に引退した。ろう学校の教え子もデフリンピックで活躍するなど指導者としても活躍した。2018年からはデフサーフィン選手として、聴者の大会にも出場している。
競技基本情報	競技:棒高跳び クラス分け:聴覚障害 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:17歳  競技:サーフィン 主な戦績:全日本サーフィン選手権/出場 競技開始年齢:31歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・幼少期から体を動かすことが大好きで、ろう学校中学部ではバレー部でキャプテンを務めていた。身体能力が高く、そのころにはバク宙ができたことから、器械運動を習い始めた。床運動が得意で2回宙返りもできた。高等部では陸上部に入部、当初は脚力を活かした幅跳びと短距離(100m)を専門としていたが、高1の冬に恩師H氏の誘いで近隣の高等学校にて練習した時に棒高跳びと出会う。空中姿勢や跳躍が活かそうだと思い、本格的に取り組むことにした。ろう学校専攻科の時にはその恩師から棒高跳びの専門の指導を受けることもできた。すぐに才能が開花、記録も伸びて2008年には国際大会に日本代表として初出場、優勝した。  始めた場所:I高等ろう学校 重要な他者:恩師H氏
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・最初からデフリンピックを目指していたわけではなく、棒高跳びがデフリンピック種目だったということで、デフリンピックにも出場した。 ・棒高跳びの競技特性に、短距離走や跳躍と器械運動で培った空中姿勢や空間把握能力が適合した。

<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>・幼少期から体を動かすことが大好きで、高い身体能力を発揮していたことから、聴覚障害の有無に関わらず、スポーツでの多様な選択肢があった。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・O 大学に進学し、陸上部にて聴者と一緒に練習をした。大学の陸上部棒高跳びには専門の指導者がいなかったため、普段の練習では友人とビデオを撮ったり相互にアドバイスする形で技術を磨き、それ以外は基礎トレーニングを中心に活動していた。棒高跳びの技術に関しては、O 大学の先輩である K さん(現職中学教員)から指導を受け、困ったらアドバイスを求めることができ、台北デフリンピックにも帯同してくれた。</li> <li>・デフスポーツは競技選手が少なく、競い合う環境が不足している。聴者との練習や大会にも出場することで競技力向上につながった。</li> <li>・大学卒業後はろう学校に勤務した。競技継続を迷っていたが、教え子の指導のために一緒に練習することを通じて競技への意欲が再び高まり、ともにデフリンピックを目指すこととした。2013 年国際大会に出場、教え子が銀メダル、自身も銅メダルを獲得した。「生徒を超えられない先生(笑)」であった。</li> <li>・2017 年国際大会入賞後、棒高跳び選手は引退した。</li> </ul> <p>主な実施場所: O 大学、Y 大学、Y ろう学校</p> <p>重要な他者: K さん、H さん</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・大学卒業時に教員採用試験を受け、K 県の中学校に保健体育教員として赴任することが決まったが、競技を継続するかどうかは迷っていた。しかし、生徒が棒高跳びをやりたいと言ってきたことから、自分も一緒に練習をすることにした。ろう学校は棒高跳びを行う環境がなかったため、生徒を連れて近隣の総合高校に練習に出向いた。また、Y 大学の指導者である H さんのアドバイスで、ろう学校でもマットなどを手作りし、走路のタータンも敷くなど競技環境を整えながら練習を継続しているうちに、もう一度競技への意欲が湧いてきた。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2017 年に陸上競技選手を引退、その後 2018 年には幼少期に経験があったサーフィン始めた。デフサーファーとして、2021 年には聴者の大会にも出場している。検定で 2 級を取得したいと思っている。</li> <li>・波がある時は、早朝に波に乗ってから出勤するという生活をしているが、当面はサーフィンを極めるために継続したいと思っている。</li> <li>・指導者として、ろうの子どもたちのスポーツ環境を整えたいと思っている。NPO 法</li> </ul>

	<p>人の立ち上げ構想を持っており、きょうだい児やデフファミリーなども含めたメンバーで SDG's の視点を持った活動として進めていきたいと思っている。現在は資金持ち出しなので、助成金の獲得ができればいい。</p> <p>・子どものころから常にスポーツをしている自分がいた。スポーツのない人生は考えられない。これからも一生涯、何らかのスポーツをしていると思う。その、スポーツの楽しさをろうの子どもたちに伝えて経験してもらえるような存在になればいい。チャレンジした経験が今の自分を作っている。</p> <p>・教師という仕事と競技やスポーツライフとの両立という点で、社会で厳しい見方をする人がいるのも事実、デフリンピック東京開催が決まって、都内や選手の競技環境は変わったかもしれないが、デフリンピック種目ではないスポーツや、デフスポーツを取り巻く環境はあまり変わっていないように思う。</p>
まとめ	<p>・幼少期から体を動かすことが大好きで、身近な環境としてスポーツがあったことや高い身体能力での成功体験が競技スポーツへの誘いとなっていた。器械運動と陸上競技の特性を活かした棒高跳びは、聴者との練習環境のもとで競技力を高め、デフスポーツでのメダリストへとつながっていった。同時に指導者としても力を発揮し、教え子とともに練習する中でチャレンジすること、成功体験の大切さを再認識し、ろうの子どもたちに伝えていくことにも使命感を持っている。</p> <p>・特定のスポーツにこだわるのではなく、新たなことにチャレンジすることにも楽しみを見出しており、スポーツのない人生は考えられないという本人の言葉どおり、生涯スポーツとして常に傍にスポーツがある。</p>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Fさん

インタビュー実施日時 2024年5月14日 17:00~18:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1980年 性別:男 障害発生年齢:先天性 障害内容:二分脊椎症(脊髄髄膜瘤・水頭症)、下肢障害、膀胱・直腸機能障害 2種3級
略歴	先天性二分脊椎症で下肢に不自由があり生まれた。10歳の時、埼玉県戸田市にあるカヌークラブに見学に行ったことをきっかけに健常者と一緒にかヌーを始める。当時、カヌーには障害者部門がなく、健常者と一緒の大会に出場し、高校時代には健常者に勝って県代表として国民体育大会(かながわ・ゆめ国体)に出場した。カヌーのスポーツ推薦で強豪校である都内の私立大学に進学し、全日本学生選手権(インカレ)にも出場した。大学3年時に体調を崩し、選手は引退しマネージャーとして部を支えつつ、学生連盟の役員としての業務も担った。大学卒業後、都内の大手通信会社で正社員として働き、現在に至る。既婚。大学卒業時にカヌーから引退したが、2010年にリオパラリンピックの実施競技にかヌーが加わる可能性が高まり、パラカヌーを始めた。
競技基本情報	競技 カヌー(1991年~2000年)、パラカヌー(2010年~) 競技成績 【カヌー】国体出場(1998年)、大学時代には、インカレにも出場した。 【パラカヌー】全国大会複数回優勝 国際大会入賞(日本人初出場含む) 競技開始年齢 カヌー(10歳~)パラカヌー(29歳~)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	【カヌー】 経緯:両親が下肢に障害があってもスポーツをやらせたいと知人に相談したことでカヌーを紹介された。近所のカヌー少年団に入団すると、健常者しかいなかったが、指導者やチームメイトに快く迎えてもらった。 始めた場所:埼玉県戸田漕艇場 重要な他者:両親。障害があってもできるスポーツはないかと探して、知人を通じて、戸田漕艇場のカヌークラブの見学に連れて行ってくれた。カヌーをやる際にも、会場までの送迎や舟を運んだりしてもらった。 【パラカヌー】 経緯:日本カヌー連盟の知人から、リオ2016パラリンピックでカヌーが競技に追加されることを聞いた。日本からも選手を派遣したいので、予選会に出場してほしいとの打診があり、パラカヌーを始めた。 始めた場所:戸田漕艇場

	重要な他者：日本カヌー連盟の知人。カヌー教室などを開催した際に、中学時代から健常者に交じてカヌーをやっていたことを覚えていてくれた。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	これまで障害者部門のなかったカヌーが、リオ 2016 パラリンピックの正式競技に追加されることが決定した。競争相手が健常者から障害者へ変わったことにより、過去に健常者に交じて国体出場、インカレに出場した経験を活かし、一気にパラカヌーの日本代表になった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	先天性のため、特になし
障害者スポーツ継続に関する状況	【パラカヌー】 継続状況：2027 年に延期されたワールドマスターズゲームズ関西への出場を目標に競技を継続している。大学時代のカヌーからの競技引退が不本意な形だったので、パラカヌーはモチベーションが続く限り継続していく。 主な実施場所：戸田漕艇場、ラクスマリナー、旧中川 重要な他者：兄と妻。舟を水面まで運んでくれて、移動のサポートをしてくれている。舟が沈没した時、独力での脱出が難しい場合の救助を想定して、水上での支援をお願いしている。水上支援は、カヌーを漕ぐ能力が必要となる。兄はカヌースプリントの経験者、妻は水上支援するためにカヌーを漕げるように訓練してくれた。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	当初、2026 年に開催される第 5 回アジアパラ競技大会の出場を目標にしていたが、カヌーが競技から外れた。一方で、2021 年に開催予定だったワールドマスターズゲームズ関西が 2027 年に延期になったので、当面の目標を、ワールドマスターズゲームズ関西出場に定めた。
今後のスポーツ実施	自分が納得できるまでパラカヌーができれば競技は引退して、指導者として活動していきたいと考えている。パラカヌーでは、障害者が障害者をコーチングするスキームができていないので、自分がその道を作っていきたい。

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・先天性の障害であるが、10 歳から健常者に交じってカヌーを始め、高校では県代表としての国体出場、大学ではインカレ出場と、下肢障害がある中でも、全国レベルで競技に取り組んだ。</li><li>・大学では病気が重なり、不本意な形で競技を引退することになった。</li><li>・リオ 2016 パラリンピックでカヌーが競技に追加されることが決まってから、パラカヌーの日本代表選手になる機会を獲得した。</li><li>・カヌーからは不本意な形で引退することになったが、パラカヌーは自分が納得できるまで継続すると決意している。2027 年のワールドマスターズゲームズ関西への出場を目標としている。</li><li>・競技引退後は、障害者が障害者に指導する道が整備されていないので、自身がパラカヌーの指導者として道を切り拓いていく予定である。</li></ul>
-----	--

(作成者名)小淵和也

氏名 24-Gさん

インタビュー実施日時 2024年5月17日 13:45~15:00 場所 T大学

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1964年 性別:女性 障害発生年齢:10歳 障害内容:右上腕欠損 身体障害2種2級 リハビリ期間:通院を含めて1年ほど
略歴	10歳の時の事故により、右上腕欠損となる。以降はスポーツとは無縁の生活を送っていたが、結婚・子育てが一段落した44歳で乗馬を始めた。47歳から競技としてのパラ馬術の大会に出場し、2016年日本障がい者乗馬協会(JRAD)の強化選手に選ばれ、2018(平成30)年度東京アスリート認定選手、パラリンピック出場を目指した。2017年よりS社に契約社員として入社した。
競技基本情報	競技:パラ馬術 クラス分け:肢体不自由(立位)グレードV 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:47歳
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	経緯: ・10歳の夏休みに事故により右上腕から切断、2か月の入院を経て小学校に戻った。リハビリで利き手交換をし、装飾用の義手を使用。受傷部位は意図的に隠していた。幻肢痛は今もある。体育の授業は小学校、中学校ともにほぼ見学。高校ではマラソンのみ参加したが、「体育はできないもの」と思っていた。卒業後、キャリアスクールに進み、1年間パソコンなど学んだ後、H社に就職、7年間勤務した。スポーツは、特に関心もなく、たまに同僚とスキーに行くくらいであった。 ・結婚後は専業主婦、スキー、アイススケートを少し、子の関係でボーイスカウトの活動でハイキングや野外活動、体を動かすことは嫌いではなかった。息子を通してでき上がったコミュニティで動いていた。 ・乗馬のきっかけは、旅先で馬に乗ってハイキングをする「外乗」があり、興味があったが片手では乗れないと諦めていた。子育てが一段落したころ、夫からの「障害者でも馬に乗れるらしいよ」という一言で、自分も馬に乗れると知った。また、夫が「いい」と言ってくれたことが契機となった。 ・障害者を受け入れる乗馬クラブがあるかが第一関門であった。乗馬クラブKに問い合わせをしたところ、体験から受け入れてくれた。 ・体験乗馬は20分。馬に初めて乗り目線の高さが違うので、それは感動的だった。片手でも騎乗できることになり入会、その後週1回のグループレッスンを受けた。続けていくうち「ハンディがある中でも何か目標を見つけたい」と思い、大きな目標としてパラリンピック出場選手を目指すことに。その当時は日本に1人か2人しか選手

	<p>がいなかったのので、パラリンピックに行けるかもしれない。これが競技へのモチベーションとなった。</p> <p>始めた場所:乗馬クラブ K</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・乗馬開始期:夫の一言</li> <li>・パラ馬術:ソフィー・ウェルズ選手</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>「外乗」をしているのを見て「やってみたい」と思ったことがきっかけであるが、子育てが一段落したというライフイベントが新たなチャレンジへの契機になった。家族の理解、特に夫の後押しで障害者でも乗馬ができることを知り、障害者を受け入れてくれる乗馬クラブとの出会いも重要であった。さらに馬術がパラリンピック種目であったこと、日本ではまだ数名しかパラ馬術の代表選手がいなかったことも競技への誘いとなった。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>子どものころから活発で、外遊びが好きで元気な子だった。受傷後も近所にスケート場があり、ローラースケートをよくやっていた。特にサポートは必要なかった。なるべく、仲間と同じことがしたいと思っていた。乗馬においても健常者と同じレッスンができています。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・所属会社とは契約社員として月に1回の出勤。週3日から4日は乗馬クラブでのトレーニング。ほかに、ビデオ分析や馬学、コンディショニングトレーニング。</li> <li>・パリパラリンピックを目指すため、オランダでの強化レッスンに昨年9月から月に1回行き、12月に国際大会に参加した。上位にならず、パリパラリンピックは断念した。</li> <li>・上腕欠損で障害の程度は軽度の判定でグレード5。これは例えば指の切断だけの人も同じグレードとなっている。不利な位置にいる。騎乗時のバランスを考慮すると片手で操作するよりも少しでも使える部位があれば活かせる。試しに義手に手綱を持たせてみたが、義手が引っ張られて持っていかれてしまうので使えず、片手で乗るしかない。</li> <li>・パラ馬術は、サポートがあつて継続できている。場所によっては片手で乗るのは怖いというクラブもあるので、受け入れてくれる乗馬クラブでないといけない。</li> <li>・馬術は、経費が高額である。所属先の会社の支援体制があるから継続できている。ほかに日本障がい者乗馬協会、東京都障害者スポーツ協会からの補助金など、大変助かっている。</li> </ul> <p>主な実施場所:S乗馬クラブ</p> <p>重要な他者:所属先 株式会社 S</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・現在所属している株式会社 S とは、日本障がい者乗馬協会の強化選手の時に、JOC アスナビのマッチングで契約した。障害者雇用を充足することも加味されている。</p>
今後のスポーツ実施	<p>・目標にはまだ遠いので、近づくように努力したい。通常レッスンは継続し、半年に 1 回はオランダでの強化レッスンや遠征の予定。応援してくれている関係者の皆さんへ恩返しの気持ちが強くある。</p> <p>・ホースセラピーや障害者乗馬のサポートをしている。いろいろな人に馬に乗ってほしいと思っている。</p> <p>・馬術によりスポーツの楽しさを知り、馬術以外にもスポーツを探したいと思う。</p>
まとめ	<p>・24-Gさんにとっての障害は、受傷部位を隠したいもの、見られたくないものとして存在した。特に着替えが阻害要因となって、学校における「体育」は、する対象ではないと捉えられてきた。しかし本来体を動かすことは嫌いではなく、環境を整えば、趣味として、さらには競技としてスポーツができることを体現している。</p> <p>・パラ馬術という競技特性は、単に受け入れ体制があっても馬が自分の技術とマッチしていること、そしてそれをちゃんと体現してくれる馬との出会いが欠かせない。そこに馬術の難しさと奥深さがある。</p>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Hさん

インタビュー実施日時 2024年5月20日 17:00~18:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1995年 性別:男 障害発生年齢:先天性 障害内容:脳性麻痺による両下肢麻痺 1種2級
略歴	脳性麻痺で生まれ、両下肢に麻痺がある。幼稚園から小学校、中学校、高校、大学と一般校に通う。体育の授業も特別な支援はなく、障害のない人と参加する。両下肢に麻痺はあるが、補助具や車いすなどは使用していない。大学3年時にオーストラリアに1年間留学、パラ馬術で東京2020パラリンピックに出場することを決意して、本格的に競技に取り組み始めた。現在、都内の企業にアスリート雇用されている。
競技基本情報	競技:パラ馬術(2017年~) 競技成績: 【パラ馬術】 世界馬術選手権大会出場、パラリンピック入賞 競技開始年齢:パラ馬術(20歳~)
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	【ホースセラピー】 経緯:中学受験が終わった時に、母がホースセラピーの一環で自宅から通える乗馬クラブに連れていった。 始めた場所:近所の乗馬クラブ。 重要な他者:母。本人の希望ではなく、自宅から通える乗馬クラブが新聞に掲載されており、中学受験が終わったタイミングで、何かのきっかけになればと連れていった。 【パラ馬術】 経緯:大学3年時にオーストラリア留学。今後の人生でやりたいことについて真剣に考えていた。他人と異なる挑戦をしないと、東京2020パラリンピックへの参加を考え、ホースセラピーで少し関わっていた乗馬でパラリンピックを目指そうと決意する。 始めた場所:S乗馬クラブ 重要な他者:アスリート雇用で採用してくれた企業。パラ馬術を本格的に開始する前だったが、オーストラリア留学中のオンライン面談で熱意を伝えて、実績ゼロの状態でのアスリート雇用が決定した。

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>パラリンピックの東京開催決定がきっかけになった。</p> <p>東京大会の決定に合わせて、障害者のアスリート雇用をする企業が増えていた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・バスケットボールやサッカー、徒競走など、自分のペースでクラスメートと一緒にやっていた。できる限り一緒に行きたいと考えていたし、クラスメートも一緒にできるように協力的だったため、スポーツには楽しい思い出が多い。</p> <p>・小学校では少年野球チームに入って、障害のない人たちと一緒に野球をやっていた。徐々にチームメートと同じ練習ができなくなったり、プレースピードについていけなくなったので、自身の障害がそれほど影響を受けないスポーツを考え始めた。</p> <p>・ホースセラピーを体験していたことで乗馬への抵抗感がなくなっていた。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>【パラ馬術】</p> <p>継続状況：障害者の乗馬を競技志向で本格的に受け入れている乗馬クラブは少ない。東京パラリンピックを決意してから大会まで2年と残された時間は少なく、最もパラリンピック出場の可能性が大きくなる方法として、パラ馬術のパラリンピアンに教えを乞うのが一番の近道だと考えた。その条件を満たしたのがS乗馬クラブだった。</p> <p>主な実施場所：S乗馬クラブ</p> <p>重要な他者：S乗馬クラブの指導者（パラリンピアン、自身は脊椎損傷で車いす利用者）。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>自宅からは距離があるため、S乗馬クラブの指導者宅に住まわせてもらい、指導者との共同生活を始めた。乗馬指導に加えて、食事の提供、車による移動支援も受けている。</p>
今後のスポーツ実施	<p>パラ馬術の競技特性上、乗っている馬を複数選手で共有することがある。ジュニアの選手と共有する機会も多く、英語が堪能なことから、海外の大会では選手兼通訳をすることもあり、競技者であると同時に、サポート役を務めることが年々増えてきている。今後、年齢を重ねていく中で、自身が選手として競技会に出場する割合と、ほかの選手の支援に回る割合が変わってくる可能性がある。自身がホースセラピーを体験したことでパラ馬術に興味を持ったように、まずはホースセラピーを体験できる機会を増やして裾野を広げる活動にも携わっていこうと考えている。</p>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・野球、サッカー、バスケットボール、徒競走と、障害のない人と一緒にスポーツをやっている中で、自分のやりたいことが表現できるスポーツとして乗馬に辿り着いた。</li><li>・以前、ホースセラピーを体験していたことで乗馬への抵抗感がなくなっていた。</li><li>・パラ馬術に挑戦しようと思ったタイミングと、東京 2020 パラリンピックに向けてアスリートを支援する企業が増え、実績ゼロの状態でのアスリート雇用契約を結ぶことができた。</li><li>・パラリンピックを目指すと決意してから、パラ馬術のパラリンピアンとの指導者と出会い、さらには指導者宅に住み込みで指導を受ける機会を得られたため、効率的な技術習得が可能となった。</li><li>・自身がパラリンピックを目指すと決意してから、多くの人から様々なサポートをもらった。今後は、選手を継続しつつも、自身も後輩への支援をしていきながら、裾野拡大にも貢献していく予定である。</li></ul>
-----	---

(作成者名)小淵和也

氏名 24-Iさん

インタビュー実施日時 2024年5月27日 18:00~19:30 場所 T 駅前会議室

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1981年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 3~4歳のころ夜盲症が判明した。中学校のころから視力が落ち始め、障害者手帳取得は20歳ごろ。 障害内容:視覚障害(網膜色素変性症) 1種1級
略歴	・保育園、小学校、中学校、高校と普通学校へ。就職した後に視力低下が著しくなり、盲学校に進学した。あん摩マッサージ指圧師の資格を取り、整形外科病院でアルバイトとして29歳くらいまで勤務した。 ・その後、社会福祉法人に就職し、現在に至る。 ・小学校のころから柔道を始め、33~34歳くらいまで行った。国際大会で入賞したこともあり、パラリンピックにも出場した。 ・中学校の時はバレーボール部に所属していた。高校では柔道部に所属。 ・パラリンピックに出場後、柔道の一線を退き、そのころからグランドソフトボールを始め、現在もプレーしている。
競技基本情報	競技:視覚障害者柔道 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:11歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・保育園、小学校、中学校、高校と普通学校へ通学した。 ・小学校のころは放課後に野球をしたり、サッカーをしたり、町内のソフトボール大会に出たり、ほかの子どもたちと一緒にやっていた。 ・1992年、11歳、小学校5年生の時、バルセロナオリンピックの古賀稔彦選手を見て柔道をやろうと思った。この時も柔道は障害には関係なく普通に行っていた。 ・中学校ではバレーボール部に入部した。体育館の光の関係でボールが見にくい時はあった。体育の授業等は特に支障なく行っていた。柔道の町道場には引き続き通っていた。 ・視力は中学のころから落ち始め黒板が見えにくくなったりして、勉強をあまりしなくなった。 ・高校には柔道部があったので入部し、黒帯を取得した。高校の部活が毎日あったので町道場はやめた。高校の部活動は厳しかった。 ・試合には小学校のころから(町道場で)出ていたが、成績はたまに入賞することがあるくらいだった。 ・高校卒業後引っ越し会社に就職した。しかし視力の低下で仕事にも支障が出てき

	<p>て退職した。この間は柔道はやっていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・21歳で盲学校に入学した。あん摩マッサージ指圧師の資格を取得した。</li> <li>・盲学校で自分にはやる気はなかったのだが、柔道の専門の先生がいて何度も誘われしぶしぶ視覚障害者柔道大会に出た。柔道部があったわけではなかった。盲学校ではグランドソフトボール、フロアバレー、陸上、サウンドテーブルテニスなど経験した(人数が少ないのでどんな競技でも試合に駆り出される状況だった)。</li> <li>・21～22歳くらいの時に初めて出た視覚障害者の柔道大会で準優勝したが、決勝で負けて、悔しくてきちんと練習をしようと思えるようになった。</li> <li>・25歳くらいの時に整形外科でアルバイトとして働き始めた。アルバイトとして働いていたので時間の都合をつけて、柔道をしていた。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(柔道)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・町道場</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古賀稔彦選手</li> </ul> <p>最初にスポーツ(視覚障害者柔道)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校の体育館</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校の柔道が専門の先生</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町道場の存在</li> <li>・盲学校への進学</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚障害者柔道を始める前から柔道を行っていた。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・整形外科でアルバイトとして働きながら柔道をしていたが、そのころは母校の高校で練習したり、町道場(子どものころ通っていたところとは違う自宅に近い道場)や刑務所の中の道場で練習したりしていた。週3～5回、時には練習場所を移動して2部練のようなこともしていた。</li> <li>・22～23歳の時初めて国際大会(カナダ・ケベック)に出場した。この時は2回戦負</li> </ul>

けくらいの成績だった。

- ・当時は 2004 年のアテネ大会に出場できず、パラリンピックに出場したいということがモチベーションとなり柔道を継続していた。
- ・当時は今ほど選手の経済的状況がよかったわけではなかったので、アルバイトのほかに講演をしたり、寄付金を募ったりして費用を賄っていた。
- ・視覚障害者柔道として柔道をしていた時も一般の柔道関係者とのつながりはあり、その人たちに寄付をお願いしたりもした。
- ・2007 年に国内大会で優勝し、サンパウロで行われた世界選手権に出場し、3 位になった。
- ・2008 年の北京パラリンピック出場後は大きな大会には出場せず、遊び程度で続いていた。
- ・29 歳のころは 1 年間遊んで暮らし、30 歳のころ現在勤めている特別養護老人ホームに就職し、その後結婚した。
- ・32~33 歳のころ、また大会に出場したが、柔道を仕事としてやっている人たちもあり、よい成績は残せず引退した。
- ・その後柔道はやらず、現在は子どもが通っている柔道場(以前自分が練習していた)に行き稽古を見学している。
- ・30~31 歳のころ(柔道の一線を退いたころ)グランドソフトボールをやっていた盲学校時代の友達に誘われてグランドソフトボールをプレーするようになった。柔道は年齢的に厳しいところがあるが、グランドソフトボールは年配の人もやっていて自分もできるのではないかと思った。
- ・途中 4~5 年やっていない期間もあったが、現在は週 1 回日曜日に練習をしている。
- ・岐阜、岩手、鹿児島の全国障害者スポーツ大会に出場した。
- ・体を動かす機会が少なくなってきているので体が動く間は続けたい。普通に生活している中では体を動かしたり、試合で緊張したり、ドキドキわくわくする経験は味わえない。そうした緊張感を味わうことが自分は好きである。

視覚障害者柔道継続の重要な他者

- ・盲学校の柔道専門の S 先生、町道場の先生、練習仲間、練習場への移動を担ってくれた親、特に父親

グランドソフトボール開始の重要な他者

- ・盲学校の時の友達(誘ってくれた)、最初にやった場所は盲学校や県の身体障害者福祉センター

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町の柔道場があり、子どものころから通っていたことで、視覚障害者柔道をするようになっても理解が得られやすかったと考えられる。</li> <li>・障害のない柔道関係者に知り合いが多くいたこと。</li> <li>・練習に行く移動支援を父親が担ってくれたこと。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・柔道も体が動くならもう一度やってみたいと思うこともあるが、難しいと思う。</li> <li>・グランドソフトボールは体が動く限り、続けていきたい。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校時代は視覚障害の影響は少なく野球やサッカー、ソフトボールなどのスポーツを経験した。11歳の時にバルセロナオリンピックで古賀稔彦選手の試合を見て柔道を始めた。</li> <li>・中学校ではバレーボール部に所属し、柔道も続けたが、徐々に視力が低下し始めた。それでも体育の授業には支障がなく、柔道の町道場に通い続けた。高校では柔道部に入部し、黒帯を取得した。</li> <li>・高校卒業後、就職したが、視力の低下が進み、仕事にも支障が出て退職。</li> <li>・21歳で盲学校に入学し、あん摩マッサージ指圧師の資格を取得した。</li> <li>・盲学校では、柔道の専門の先生に誘われて視覚障害者の柔道大会に出場し、初参加で準優勝を果たすが、決勝で負けたことから、真剣に柔道の練習に取り組むようになり、パラリンピック出場を果たす。</li> <li>・その後、柔道の一線を退き、グランドソフトボールを始め、現在も週1回の練習を続け、全国障害者スポーツ大会にも出場した。</li> <li>・視覚障害が進む前に柔道を始め、そのころから障害のない柔道関係者と接していたことが視覚障害者柔道として柔道を行う時の理解が得やすくスムーズな移行ができたと考えられる。</li> <li>・視覚障害者柔道、グランドソフトボールとも盲学校を起点としたスポーツの取り組みであり、視覚障害者のスポーツ実施にとって盲学校は大きな影響を及ぼしている。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Jさん

インタビュー実施日時 2024年5月27日 19:30~21:00 場所 T 駅前会議室

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1976年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:視覚障害(先天性緑内障)6級(右失明、左弱視矯正で0.5程度)
略歴	先天性の視覚障害。保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と普通校に通う。一度就職したが、視力低下により退職し盲学校に通う。盲学校卒業後盲学校時代の先生に声をかけられグランドソフトボールを始めた。現在、毎週日曜日に練習し、年間7回程度大会に出場している。
競技基本情報	競技:グランドソフトボール(視覚障害者野球) クラス分け:弱視 競技成績:国内大会入賞 競技開始年齢:34歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・小学校の時、サッカー(3日程度)、ミニバスケット(小学6年の時2~3か月)をやったほか、特にスポーツはやっていない。外で遊んだりするのは好きだった。遠近感がわかりにくいこともあり、あまり続かなかった。 ・「運動会で自分がリレーに選ばれた時障害があるのに何であの子が選ばれるの」と人が話していたことを母親から聞いたこともあり、障害のことを知られたくないという思いから、体育などでは積極的に前に出ないようにした。 ・中学校では、全員部活動に入らなくてはいけなかったことから、それほど厳しくなかった卓球部に入った。最初はほとんど幽霊部員だった。同級生が部長などになったころ(2年の後半)からある意味強制的に友達から参加させられたが、やはり遠近感がわからないことが課題であった。 ・高校は中学時代の友達が卓球部に入ったこともあり、一緒に卓球部に入った。 ・大学時代は様々なスポーツを楽しむ「スポーツ同好会」というサークルに所属した。球技では遠近感がわかりにくいことや遺伝性の高血圧の影響で疲れやすかったことからスポーツをするのは得意ではなかったが、スポーツ同好会は楽しくやるという雰囲気だったし、同じゼミの友人に誘われたこともあり入会した。 ・大学卒業後、介護職で施設に就職したが、7年弱のところで視力が落ち、見えにくくなってきたのでやめた。この間はスポーツはやっていなかった。 ・その時に盲学校に関する情報を得て、30歳で盲学校に入学し、あんま、鍼、灸の資格を取った。 ・盲学校では人数も少ないことからグランドソフトボールや柔道、陸上競技など様々な競技をやらされ、大会にも出た。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校卒業後、2011年(34歳)、盲学校1年の時の担任の教師にグランドソフトボールを見学に来ないかと誘われ見学に行った。その帰りに靴とユニフォームを一緒に買いに行き、そこからグランドソフトボールに関わるようになった。</li> <li>・その年の全国障害者スポーツ大会に出場し優勝した。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(グランドソフトボール)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校のグラウンド</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校1年生の時の担任教師(見学に誘われ、始めるに至った)</li> </ul>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校の存在。</li> <li>・グランドソフトボールが全国障害者スポーツ大会の採用競技であったこと。</li> <li>・在住している県にチームがあったこと。</li> </ul>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠近感がわかりにくいことがあるが、卓球やそのほかのスポーツを経験していたことで、そのことにどう対処すればいいのかということは身についたと考えている。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、週に一度、日曜日に休憩時間も含めて6時間くらい、ほぼ県の障害者福祉センターのグラウンドで練習をしている。</li> <li>・グランドソフトボールを始めたころは毎年のように指の骨を折っていた。ボールの遠近感がわからないことが影響している。</li> <li>・2013年にチームのマネージャーをしている女性と結婚した。妻は友人の一人がグランドソフトボールのチームメンバーだったことからチームに関わるようになった。</li> <li>・日曜日に練習がないと何をしたいのかわからなくなる。妻もチームに関わっていることもあり、すっかり日常の中に入り込んでいる。</li> <li>・現在、年に7回くらいの大会に出場している。</li> <li>・大会で様々な場所に行ったり、様々なチームと対戦したりするのが楽しい。</li> <li>・大会遠征はどの大会も県から補助が出るので経済的な負担は大きくない。特に住んでいる県で国体・全スポが予定されていたので強化費等がたくさん出た。</li> <li>・大会が職場の休日と重ならない時は有休をとって出場している。</li> <li>・現在、学生のグランドソフトボールの大会がなくなったこともあり、選手数が減少し</li> </ul>

	<p>ている(盲学校へ行く生徒が少なくなったことも影響している)。</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チームの仲間。みんな同じ職種で話やすく情報も得やすい。</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県からの経済的な補助</li> <li>・住んでいる県で国体・全国障害者スポーツ大会が予定されていたこと</li> <li>・県の障害者スポーツ拠点施設の存在</li> <li>・グランドソフトボールがパラリンピック競技に入っていないこと</li> <li>・選手の減少</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体が動く限りはグランドソフトボールを続けていきたいと考えている。競技が残っていればという前提だが。</li> <li>・指導者になろうということは考えていない。みんなとわいわいやれればいい。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グランドソフトボールを始めたのは 34 歳の時。学齢期には卓球などやったが、遠近感がつかみにくいことなどから、打ち込めるほどにはプレーしなかった。</li> <li>・最初に就職した後、視力が落ちてきたことなどからそこを退職し、盲学校に通学してあんま・鍼・灸の資格を取得し現在の仕事に活かしている。</li> <li>・盲学校で視覚障害者スポーツを体験したが、その後継続することはなかった。</li> <li>・2011 年に盲学校の時の先生に声をかけられ、グランドソフトボールを始め、その年に出場した全国障害者スポーツ大会で優勝した。</li> <li>・その後は、週に一度日曜日に練習をし、年間 7 回前後の大会に出場している。</li> <li>・グランドソフトボールが日常の一部として組み込まれている。</li> <li>・できるだけ長く続けたいが、盲学校に行く生徒が少なくなり、選手数が減少してきており、競技が存続するかが一つの課題となっている。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Kさん

インタビュー実施日時 2024年6月6日 19:00~20:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:2003年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:二分脊椎症、水頭症 1種1級 リハビリ期間:1歳くらいのころから年に一度、長下肢装具を作るために大阪に通い、そこでリハビリをしていた。上肢強化のためのリハビリなどは特にしていない。その後も定期的に関リハビリを実施している。
略歴	幼稚園から大学(インタビュー時大学3年生)まで普通学校に通学。小学1年時にバリアフリーの東京の学校に転校した。小学校入学前から車いすテニスなど様々なスポーツにチャレンジしてきた。現在大学3年生。車いすバスケットボール、カヌー、陸上競技をやっているが、現在はバスケットボール中心である。現在日本車いすバスケットボール連盟強化指定選手(女子次世代カテゴリー)である。将来的にはパラリンピックに出場したいという目標がある。
競技基本情報	競技:車いすバスケットボール、カヌー、陸上競技 クラス分け:陸上競技はT53、カヌーはKL3、車いすバスケットボールは持ち点2.5ポイント 競技成績:陸上競技:国内大会入賞 車いすバスケットボール:国内大会入賞、国際大会:2023 IWBF 女子 U25 世界選手権(タイ・バンコク)女子 U25 日本代表 8位 競技開始年齢 ※競技として ・車いすバスケットボール…大学1年生 ・パラカヌー…小学5年生秋ごろ ・陸上…中学1年生
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・幼稚園のころから車いすを利用して通学していた。幼稚園ではみんなと一緒に遊んだりしていた。いじめなどはなかった。 ・小さいころから体を動かすのは好きだった。ほかの人と同じようにはできないけれど、別のやり方で一緒にできるところが好きだった。 ・障害については小学校入学前は、どうして自分だけ歩けないのかと思っていたこともあったが、入学後はできないことはできない、できることはできると割り切って様々なスポーツにもチャレンジした。 ・幼稚園の時に知り合いの同世代で同じような車いすの子どもの父親が車いすテニスサークルを始めた。 ・小学校はC県の公立学校に1学期間だけ通ったが、バリアフリーでなかったことと、

学校の校長先生と市の教育委員会の対応に問題があると感じたため、K区に新しくできた小学校に転校するために東京に引っ越しをした。転校先の学校は23区内で校舎が建て替えてあるか、新設校(バリアフリー)であるかと、通学の道路が整備されて(歩道が広い)土地の起伏がないという条件で探した。

- ・幼稚園、小学校のころ、様々なスポーツ体験会やイベントに参加していた。その中に車いすマラソンのイベント(日産カップ追浜チャンピオンシップ)で入賞して、レーサーで競技をやりたい人にはレーサー(競技用車いす)をプレゼントするというのがあり、小学校6年の時に優勝してレーサーをもらった。陸上競技はその後(中学校)から本格的に始め、ジャパンパラ競技大会や各種マラソン大会などに出場するようになった。
- ・小学校2年生の時、モーターショーに行った際にチェアスキーの元選手に声をかけられたのがきっかけでチェアスキーも始めた。チェアスキーは趣味・娯楽のような形でやっている。
- ・小学校の体育はやれることは一緒にやれるようにしていた。自分でやり方なども工夫した。違うやり方で参加するのは最初、抵抗があったが、それよりほかの子どもたちと一緒にできることの喜びが勝った。
- ・父親は障害者スポーツに関する情報をインターネットやメールマガジン、障害者スポーツセンターの掲示などから得ていた。東京でのオリ・パラ開催決定以降そうした情報や体験イベントも増えていた。
- ・車いすテニスは、水頭症がある関係で球の空間認知が難しくだんだんと遠のいていった。
- ・小・中学校と部活動には入っていなかった。
- ・中学校の時は陸上とカヌー、水泳(週に1~2回)が中心だった。
- ・小学校5年生の秋、K区主催のオリ・パラ成功のためのアイデアを提案するイベントがあり、その時に、区長Y氏から声をかけられたことがきっかけでカヌーを始めた。大会にも出るようになった。
- ・カヌーは漕いでいて、風が気持ちよく、水上なので、ちょっと違った雰囲気味わえるというところが魅力である。ただ、障害の一番軽いクラスに入っていて競技的に厳しいことやバスケットボールの練習日と重なるようになって今はバスケットボール中心になっている。
- ・中・高一貫の私立学校に行った。体育は学校に車いすテニス用の車いすを置いておき、バドミントンやバスケット、テニスなど参加できるものには参加していた。
- ・車いすバスケットボールは小学3年生の時(第64回東京みなと祭(晴海ふ頭)の東京オリ・パラ招致活動での車いすバスケ体験ブース)、体験会でNさん(元パラリン

	<p>ピック日本代表キャプテン)に出会い、初めて体験した。その後もいろいろなイベントで車いすバスケの体験はしていたが、チームに所属したり競技としてはやっていなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校 2 年生ごろ自宅近くの簡易コートで選手が練習していることを知り、参加させてもらった。練習しているうちにちゃんと車いすバスケをやってみたくなり、チームに登録するようになった。今はバスケットが中心でそのトレーニングとして陸上競技をやっている。</li> <li>・大学は障害者スポーツに理解があり、授業も受けやすく、車いすバスケの選手が先輩にいたこともあり、Y 大学に進学した。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(車いすテニス)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・TTC(千葉県柏市のテニススクール)</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすテニス:両親</li> <li>・陸上:両親</li> <li>・カヌー:K区長、K区職員でパラカヌーの選手</li> <li>・車いすバスケ:元車いすバスケ選手 N さん</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京オリ・パラ開催が決定していたこと(体験会や情報の増加)。</li> <li>・K 区(カヌー会場がある)がパラスポーツに力を入れていたこと</li> <li>・インターネット等の発達により情報が得やすくなっていたこと。</li> <li>・父母による送り迎えが可能であったこと。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>(現状について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在車いすバスケットボールの練習を週に 4 回程度、お台場にあるパラアリーナや各地の体育館で、陸上競技の練習を週に 1 回程度、自宅でローラーを使ったり、E 区の陸上競技場に行ったりして実施している。</li> <li>・(インタビュー時現在)運転免許証は取得しておらず、大学から練習場への移動は両親に送ってもらっており、早く運転免許証をとりたいと考えている。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都からスポーツ実施のための助成金(東京都ゆかりのアスリート事業)が出ている。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両親</li> <li>・元車いすバスケットボール選手 N さん</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京パラリンピックの開催に合わせてできた東京都の助成金制度。</li> <li>・車いすアスリートの受け入れが整った大学の存在。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いすバスケットボールに関しては現在、次世代カテゴリーにいるが、その上のハイパフォーマンスカテゴリーに入り、パラリンピックに出場したいと考えている。これが現在スポーツを続ける上での大きなモチベーションになっている。</li> <li>・将来的にはパラスポーツを続けながら仕事ができる環境があればいいと思う。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・父母の後押しもあり、小さいころから障害のない兄弟や友達とできるだけ一緒にスポーツなどをやろうとしていた。</li> <li>・車いすテニスに始まり、陸上やチェアスキー、カヌーや車いすバスケットボールなどを経験してきている。</li> <li>・東京でパラリンピックが開かれることが決まってから、パラスポーツに関する様々な情報が増えたり、体験会が増えたり、カヌー会場が近かったりしたことがポジティブに影響している。またパラリンピック開催を機に設けられた助成金制度の対象にもなっている。</li> <li>・両親の強力なサポートがスポーツ実施の後押しとなっている。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Lさん

インタビュー実施日時 2024年6月18日 17:20~18:30 場所 T大学

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1974年 性別:女性 障害発生年齢:先天性 障害内容:聴覚障害 1種2級
略歴	・先天性の難聴があり、学齢期はスポーツとは無縁であった。25歳で水泳を始めると夢中になり、競泳選手として大会に出場するようになる。2007年にはろう者の日本代表として国際大会でメダリストに、その後も障害者の大会だけでなく通常の競技会であるマスターズ大会等にも出場を続けている。
競技基本情報	競技:水泳 クラス分け:聴覚障害 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:25歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・先天性の難聴があり、人前で話をするのが苦手であった。学齢期はスポーツに興味・関心がなかったが、25歳の時にたまたま地元のスポーツセンターに掲示されている各種サークル紹介のポスターを見ていた時に、そのうちの1枚だけに記されていた「障害者募集中」という文字が目にとまり、障害のある自分にもできることがあると感じて強い興味を湧いた。それが水泳ポスターであった。全く泳げない状態で入会し、障害者水泳クラブの仲間に教えてもらいながら水泳の楽しさを知ることになる。メンバーは車いす(肢体不自由)の仲間が多く、そのうちの一人から「あなたは聴者と一緒に練習した方がいい」とアドバイスされ、半年後には、Aスイミングスクールのマスターズコースに入会した。週に3回、1回1時間の練習をするようになり、県の障害者スポーツ大会 25m 自由形で大会初出場を果たす。以降、障害者の大会とマスターズの大会の両方に定期的に参加し、水泳ができる楽しさと記録が伸びる楽しさを味わうことで、ますます水泳にのめり込んでいった。  始めた場所:S市民スポーツセンター  重要な他者: ・水泳開始期:ポスターにあった「障害者募集中」の文字、障害者水泳クラブの仲間

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	居住地近くにある市民スポーツセンターをたまたま気晴らしに散策していた。もともと美術系に興味があったので、壁に掲示されているポスターを、美術系の視点で眺めていたところ、そのうちの1枚にだけあった「障害者募集中」の文字が飛び込んできた。学齢期から聴覚障害があることで壁を感じる経験をしてきたので、「障害者の私でもいいんだ！」と思えたことがきっかけである。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	先天性の聴覚障害であり、3年生でK聾学校から小学校にインテグレーションしてからは、コミュニケーションで苦労したし、一緒に遊ぶ時もコミュニケーションで疲れてしまう経験をしてきた。体育の授業はやっていたが、スポーツに興味はなかった。中学校は必修クラブだったため、卓球部で活動したが、先輩後輩などの上下関係も厳しく、コミュニケーションの難しさもあって義務感で参加していた。つまらなかったし、友達とも全く話さなかった。高校と専門学校は美術系に進学した。いわゆる帰宅部であり、スポーツとは無縁であった。
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水泳を始めたら、泳げるようになることとタイムがよくなるのが楽しくて水泳にのめり込んでいった。もっと早く水泳に出会いたかった。よりレベルの高い障害者スポーツ大会を目指すために、車で1時間以上かかるJアスレティッククラブに入会し、仕事が終わると運転して練習に行く毎日を送っていた。疲れて練習後に立ち寄ったコンビニで寝込んでしまうこともあったくらいだが、水泳ができることの喜びの方が大きくて継続できた。</li> <li>・Jアスレティッククラブではマスターズコースに入ったが、そのメンバーたちもマスターズ大会を目指して切磋琢磨しており、一緒に練習していて充実感があった。</li> <li>・特に印象的な選手がいて、障害者クラブに入って1年目にろうのスイマーと出会った。彼女は小さいころから水泳をやっていて、とても速かった。当時、彼女は高校生だったが、水泳を始めたばかりの自分にいろいろ教えてくれて、水泳を続ける上で大きく影響を受けた。</li> <li>・障害者水泳クラブである、Iスイミングクラブにも登録していたので、障害者の水泳活動を通して、多くのろう者と知り合うことができた。また、障害者の大会情報ももらったので、障害者の大会とマスターズのどちらか、月に1回は何らかの大会に出場していた。</li> </ul> <p>主な実施場所：Jアスレティッククラブ 重要な他者：Jアスレティッククラブの仲間、ろう者スイマー Yさん、Iスイミングクラブ</p>
スポーツ継続に影響を与えた	・所属したスイミングクラブの仲間の存在が大きい。とにかくマスターズ大会に向けて貪欲で、練習に対しても熱い。お互いに意識を高め合うことで、よりよいモチベーシ

社会的状況・環境・条件	<p>ヨンの向上につながっていった。練習に通うには自宅から遠く、眠さとの闘いもあったが、それを凌駕する練習環境と仲間が存在が継続の原動力であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本代表として国際大会で入賞した。初めての代表で緊張していたが、仲間存在でメドレーリレーではメダル獲得、個人種目でも入賞するなど結果を残せた。</li> <li>・障害者の水泳活動を通して、多くのろう者と知り合うことができた。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<p>6年前に結婚し、生活環境が変わったことから、仕事の時間を調整し、昼間の時間帯に J アスレティッククラブのマスターズ同好会メンバーと一緒に練習している。同好会なので特定のコーチはいないが、メンバーで練習メニューを立てて実施している。現在は1回あたり2000m前後の練習量なので、練習時間と頻度をもう少し確保できればと感じている。現在はマスターズの大会一本に絞って大会に出場している。自分にとって水泳は欠かせない存在であり、マスターズ登録(100歳登録)をしているので、環境が許せばいつまでも泳ぎ続けたいと思っている。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・24-Lさんが水泳と出会うのは社会人になってから、25歳の時である。たまたま出かけた地元のスポーツセンターに掲示されているポスターを見ていた時に、運命的な出会いがあった。それは数あるポスターのうち1枚だけに記されていた「障害者募集中」という文字である。コミュニケーションの壁によって学齢期にスポーツとは無縁、興味・関心がない時間を過ごしていた中で、「障害者募集中」という文字は、障害のある自分でもいいんだと感じられる瞬間だった。本当に運命的な出会いである。誘う他者、声をかけられたわけでもなく、まさにセレンディピティ(偶然の出会い)である。その後はメキメキ力を発揮し、ろう者日本代表まで競技力を高めていく。水泳を通してろう者の仲間ともつながることができ、その後も、障害者スイマーとして、またマスターズスイマーとして生涯現役で水泳を続けると語っている。水泳を通して人生のパートナーとも知り合うこととなり、生活環境は変わったが、これからも水泳人生は続いていく。</li> </ul>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Mさん

インタビュー実施日時 2024年6月20日 16:00~17:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1991年 性別:男性 障害発生年齢:1歳3か月の時に病気を発症 障害内容:全盲(網膜芽細胞腫)1種1級
略歴	・幼稚園・小学校・中学校・高校・専攻科と視覚障害特別支援学校に通学。 ・小学校5年でブラインドサッカーを始め、中学3年で日本代表入り。 ・高校の時に部活でゴールボール部とフロアバレーボール部に入り、土日はブラインドサッカーをやっていた。 ・高校3年(2009年)の時にゴールボールの日本代表チームに入り、以降2014年までゴールボールに専念。 ・2015年にブラインドサッカーに戻り、2022年に日本代表チームに復帰。2023年にパリパラリンピック出場権を得た。
競技基本情報	競技:ブラインドサッカー・ゴールボール クラス分け:なし 競技成績 ブラインドサッカー:国際大会出場 ゴールボール:国際大会入賞 競技開始年齢 ブラインドサッカー:小学校5年 ゴールボール:高校1年
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・3歳から都内の盲学校の幼稚部に電車を通う。 ・このころから体を動かすことは好きで、ほかの子どもたち(障害のない子どもを含む)と自転車乗り、サッカー、鬼ごっこ、かくれんぼなどして一緒に遊んでいた。 ・小学校の時の体育については記憶があまりないが、走ったりはしていたように思う。部活はなかった。 ・小学校5年の時にブラインドサッカーを始めた。運動好きであることを知った担任の先生がブラインドサッカーというものを見つけてきてくれて紹介してくれた。M市のチームに所属した。最初は紹介してくれた担任の先生、父母がついてきてくれた。そしてチームメンバーと一緒に練習した。 ・その後、週に1回のペースで練習に参加した。最初のころは親がついてきてくれたが、途中からは一人で参加するようになった。 ・中学でもチーム練習は週1回、そのほかは常にボールと戯れていたような感じであった。

	<p>最初にスポーツ(ブラインドサッカー)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・M市の小学校のグラウンド</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラインドサッカーを紹介してくれた小学校5年時の担任の先生</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援学校に通学しており、ブラインドスポーツの情報(担任の先生)が得やすかったこと。</li> <li>・ブラインドサッカーチームが存在していたこと。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほぼ先天性障害(1歳3か月)に近いことから、この項は記載なし。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校1年のころ、初めて公式戦(日本選手権)に参加した。これ以降の試合を日本代表チームの監督が見るなどして選考会に呼んでくれた。</li> <li>・中学2年の時(2005年)にアルゼンチンで行われる世界選手権のための選考会があり、そこで日本代表チームに選抜された。</li> <li>・アルゼンチンの世界選手権にも出場したが、ほかの代表メンバーとは年齢が離れていたことから孤独感も感じていた。</li> <li>・中学校も部活はなかったが、運動好きな子たちが集まって放課後に何かしらの方法で体を動かしていた。体育では走ったり、フロアバレー、ダンス、フライングディスクなどをした。</li> <li>・高校はT大学付属高校に進学した。高校進学時にチームを移籍した。</li> <li>・土日にブラインドサッカーチームの練習をやり、部活動でゴールボール部とフロアバレー部に入って活動した。ゴールボールは監督の先生に勧められたのがきっかけだった。</li> <li>・高校時代は火水木にフロアバレー部で練習、月水金にゴールボールの練習、水曜日はフロアバレーをやって、夕食を食べた後ゴールボールの練習をした。そして、土日はブラインドサッカーの練習という毎日だった。</li> <li>・高校時代の体育の授業では、フロアバレー、ゴールボール、トランポリン、グランドソフトボール、マラソンなどいろいろとやった。</li> <li>・2008年までブラインドサッカーの日本代表チームに所属していたが、高校3年</li> </ul>

	<p>(2009年)にゴールボールの日本代表になり、ブラインドサッカーの方は辞退した。これ以降、2014年のゴールボールアジアパシフィック選手権まではゴールボールに専念した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴールボールでは「攻撃的なセンター」になれるよう努力していた。この目標を達成するのが一つのモチベーションになっていた。</li> <li>・高校卒業後は高校と同じ敷地内にある鍼灸手技療法科に進み資格を取得した。</li> <li>・資格取得後、IT企業で、社員に治療したりするヘルスキーパーの職に就いた。</li> <li>・仕事が終わってから夜に母校に行きゴールボールの練習をしていた。</li> <li>・この間、国際大会としてはアジアユースパラゲーム(2009年)、アジアカップ(2014年)、世界選手権(フィンランド)、アジアパシフィック選手権大会に出場した。アジアパシフィック選手権でメダルを取ったことで一区切りをつけてゴールボールからもう一度サッカーの元いたチームに戻った。</li> <li>・2015年に自分たちのチームを作った。日本ブラインドサッカー協会でインターンをしていたYさんが母校(高校)に保健体育の教員として赴任されたのがきっかけである。その後、日本選手権で優勝するまでになった。</li> <li>・2019年に現職のS社に転職した。会社の仕事を午前中にやり、午後練習という日が週に3日、あとは一日休養あるいは一日仕事という日がある。</li> <li>・2022年2月にブラインドサッカーの日本代表チームに復帰した。</li> <li>・2023年11月にパリパラリンピック自力出場を決めた。</li> <li>・今はパリパラリンピックでメダルを取ることが目標となっている。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・監督やチームのメンバーには世話になったが、特に影響を受けた人はいない。ただただサッカーが好きで、楽しくて続けた。</li> <li>・当時、ブラインドサッカーの同じチームで、代表チームに入っていたT選手にはチームを移籍する時や憧れの人という感じで影響を受けた。</li> <li>・家族はいろいろな意味で支えてくれている。</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校に各種ブラインドスポーツの部活があったこと</li> <li>・日本ブラインドサッカー協会の存在</li> <li>・東京パラリンピック開催による諸制度の整備</li> <li>・支援企業が存在</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選手を継続するが、いつか引退という時が来る。</li> <li>・自分のチームを立ち上げた時からブラインドサッカーの普及や選手育成に関わりたいと考えている。</li> <li>・トップ選手になるためにはできるだけ小さい時から競技を知り、親しみ、技術を身に</li> </ul>

	つけることが必要だと考えている。そのためにもブラインドサッカーに関する情報に触れる機会、競技できる場が必要だと考えている。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1歳3か月で眼球を摘出し、全盲になったが、体を動かすのが好きで様々な遊びや運動に参加していた。障害のない子どもと遊ぶこともしばしばだった。</li> <li>・幼稚園から視覚障害特別支援学校に通っていたことから体育等でも障害に配慮された教材が使われていたものと推測され、体を動かす機会は多かったと思われる。</li> <li>・小学校5年時に担任教諭から得たブラインドサッカーの情報がきっかけでチームに入った。</li> <li>・高校で、各種ブラインドスポーツの部活があり、実施競技の幅が広がる。</li> <li>・ゴールボールでは日本代表になり、その後、ブラインドサッカーに戻った。</li> <li>・体を動かすことが好きだったこと、ブラインドサッカーの情報を得たこと、高校時にブラインドスポーツの部活があったことがスポーツキャリアに影響を及ぼしていると考えられる。</li> <li>・とにかくスポーツをすることが好きで、そのこと自体がスポーツ継続の大きな動機付けとなっている。</li> <li>・日本ブラインドサッカー協会は、パラスポーツ競技団体のマネジメントに関して日本でトップの競技団体であり、競技団体の着実な発展と成長が選手の境遇や競技強化に影響を与えていることが理解できた。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Nさん

インタビュー実施日時 2024年6月23日 13:00~14:30 場所 N市総合福祉センター会議室

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1975年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:聴覚障害 1種2級
略歴	中学校、高校時代は部活動で軟式テニスに取り組み、ろう学校専攻科を卒業後、幼馴染みの誘いで近隣の障害者バドミントンクラブに入会し、バドミントンを始めた。現在も同クラブで活動を継続している。
競技基本情報	競技:バドミントン 競技成績:近畿大会2位 競技開始年齢:21歳ごろ
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・(母親から聞いた話では)2歳ごろまで耳が聞こえていないことに気づかず、ある時病院で調べてもらったところ、生まれつき耳が聞こえていないことがわかった。 ・小学校、中学校は難聴学級に在籍し、国語、数学、社会のみ難聴学級で授業を受けていたが、それ以外の科目に関しては普通学級で受講していた。 ・小学校5年生からバスケットボールをしていたが、周りの音やチームメートの声が聞こえず、自分が前に走るとボールの位置が全くわからず、団体競技の難しさを感じた。 ・中学校では(上記の小学校時代のバスケットボール経験を踏まえて)個人競技をやりたいと考えて軟式テニス部に入部した。中学2年生までは、基本練習やボール拾い、先輩の応援ばかりであったが、3年生からレギュラーに選ばれて、そこから楽しく活動することができた。 ・高校では別のスポーツをしたいと考えていたが、1学年上の中学校時代の先輩に誘われて軟式テニスを続けることにした。部内の人間関係でいろいろとありやめたいと思ったが、クラブの顧問がやめさせてくれず泣く泣く頑張り、最終的には県でベスト16に入ることができた。 ・ろう学校専攻科入学後、軟式テニスが続けたかったが、学内にクラブがなく、何かスポーツをしたいと考えていたところ、幼馴染みから、「できたばかりの障害者バドミントンクラブがあるから一緒にやらないか」と声をかけられて体験に行った。聴覚障害のある人だけではなく、いろいろな障害のあるメンバーがいて、上手な人が多く、初めて体験に行った時にはまた参加したいなと感じた。 ・ろう学校専攻科在学中はほとんどクラブの練習に参加していなかったが、交際していたパートナー(専攻科の後輩)がバドミントン経験者で、活動できるクラブを探していたことから、以前体験に行ったクラブを紹介し、専攻科卒業後から一緒に参加す

	<p>るようになった。</p> <p>始めた場所：近隣市の障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者：幼馴染み、交際しているパートナー</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼馴染みからの声かけがあり、交際していたパートナー(専攻科の後輩)がたまたまバドミントン経験者であったことからバドミントンを始めることができた。</li> <li>・聴覚障害のある人がスポーツをするにあたっては、どこでどのような活動ができるのかといった情報を入手することが難しく、仲間集めは口コミが中心となっている。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職後、現在の障害者バドミントンクラブに入り、20年以上活動を継続している。所属クラブは、十数年前は40人ほどのメンバーがおり、そのうち30人ほどが聴覚障害のあるメンバーであったが、年々参加者が減少しており、現在は20名ほどの登録で、練習の参加人数は6名弱となっている。</li> <li>・テニスをやっていた友人に誘われて、2001年にイタリアで開催されたデフリンピックを観戦し、自分もバドミントンでデフリンピックに出場したいと思い、2005年のオーストラリア大会の出場を目指したが、年下に実力のある選手がおり出場することはできなかった。</li> <li>・デフリンピックを断念してからもこれまでバドミントンを続けてこられたのは、パートナー(デフリンピック2回出場)の存在が大きかった。</li> <li>・以前は予約なしで3時間ほど体育館を優先利用することができたが、コロナ禍以後、予約制となり現在は準備・片づけを含めて90分の利用となり、物足りないなど感じることもある。</li> <li>・現在は週に1回クラブの練習に参加し、コロナ禍以後は、年4回程度大会に出場している(全国ろうあ者体育大会や日本ろう者バドミントン選手権、各地域のクラブ主催の交流大会等)。</li> </ul> <p>主な実施場所：近隣市の障害者スポーツセンター</p> <p>重要な他者：交際しているパートナー</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身はデフリンピックに出場することはできなかったが、パートナーがデフリンピックに出場し、頑張っている姿を見てバドミントンを続けてくることができた。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バドミントンは激しいスポーツなので、無理をすることなく健康第一でできる範囲で続けていきたいと思っている。</li> <li>・来年日本でデフリンピックが開催予定となっており、これからデフリンピックを目指す、もしくはバドミントンを頑張っていきたい人のサポートをしていきたいと考えている。</li> <li>・バドミントンだけでなく、バレーボールや卓球等、聴覚障害のある人のスポーツ参加が少なくなっており、どうすれば参加してもらえるのか、これから考えていきたいと思っている。</li> <li>・他競技の関係者と相談して、複数種目を同時に体験できるような機会を作りたいと考えている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校時代はバスケットボールに取り組み、中学校・高校は軟式テニス部で活動していた。</li> <li>・ろう学校専攻科入学後、幼馴染みから障害者バドミントンのクラブに誘われ、就職後から本格的にバドミントンを始めた。</li> <li>・デフリンピックに出場することはできなかったが、現在もクラブでバドミントンを続けており、今後は無理せず活動を続け、ともに活動する仲間を増やしていきたいと考えている。</li> </ul>

(作成者名)河西正博

氏名 24-Oさん

インタビュー実施日時 2024年6月27日 13:00~14:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1990年 性別:男性 障害発生年齢:2歳 障害内容:視覚障害 1種1級
略歴	地元の視覚支援学校小学部卒業後、関東の視覚支援学校中学部に進学し、陸上を始めた。高等部時代に後にパラリンピアンとなる先輩と出会ったことから国際大会を目指すようになり、世界選手権、アジアパラ競技大会等に出場した。2021年開催の東京パラリンピック出場を目指すも出場できず、同年に引退した。
競技基本情報	競技:陸上競技 競技成績:2018年国際大会入賞 5000m 競技開始年齢:中学校入学後
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	経緯: ・2歳の時に網膜腫瘍を発症し全盲となり、地元の視覚支援学校小学部に進学した。 ・子どものころから体を動かすことが好きで、体育ではゴールボール、フロアバレーボール、マット運動等、様々な種目に取り組んでいたが、水泳は苦手で、後に陸上を始めたきっかけとして泳ぐことが苦手であったことも影響していた。 ・小学部の担任の先生が関東の視覚支援学校を強く勧めてくれて、地元を離れて他県の中学部に進学することにした。 ・地方の視覚支援学校は児童生徒数が非常に少なくなっているが、進学先の学校は全国から生徒が集まっており比較的人数が多く、友人関係や人間関係を作っていくという意味でも貴重な経験ができた。 ・中学部に進学後、陸上部に入部したが、毎日練習するようなレベルではなく、週に2回ほど部活動がある時のみ走っていた。 ・高等部に進学後、後にパラリンピアンとなる先輩と出会い、本格的に競技として陸上に取り組むようになり、週に4日から5日ほど練習していた。 ・高等部時代は、部活動のコーチや弱視の先輩に練習時のガイドをしてもらい、試合の時には顧問が大学の陸上部に掛け合ってくれ、ガイドランナーの手配をしてれていた。  始めた場所:在学していた視覚支援学校 重要な他者:視覚支援学校の陸上部の先輩

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学部から入学した視覚支援学校の部活動の環境が大きかった。地方の学校では指導できる先生がおらず、生徒数が少ないため部活動自体がないという状況がある。部活動の指導者がいて、一緒に走る仲間がいるという環境がとても大きかった。</li> <li>・視覚障害者がスポーツをする上では、程度の差はあれ健常者のサポートが必要であり、スポーツをしたい視覚障害者とサポートしたい健常者をマッチングするシステムがあればよいと思う。</li> <li>・大阪や東京でブラインドランナーを対象とした講習会が開催されており、健常者にも周知しホームページなどでも情報発信しているが、自分から情報を入手しようと思わないと、活動の場がなかなか見つからない状況である。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害(2歳)に近いことから、記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚支援学校高等部卒業後、近畿圏の大学に進学し実家から2時間ほどかけて通学していた。</li> <li>・練習拠点が関東から関西に移ると同時に、大学に陸上部がなく、一から競技環境を整えていかなければならなかったが、高等部時代にお世話になっていた教員が関西の関係者とのつながりがあり、1年ほどかけて活動拠点を作っていき、その後はほぼ毎日練習していた。</li> <li>・複数のマラソンクラブに所属し、10人弱の小規模なチームから、50人か100人程度の大規模なチームもある。</li> <li>・大阪のチームはブラインドランナーがメインで30名ほど活動していたが、ほかのチームは2名ほどで視覚障害のあるランナーは少数であった。</li> <li>・大学卒業後、イベント会社に就職し、大学時代と同様の活動拠点で競技を継続していた。</li> <li>・就職をするにあたり、アスリート雇用も検討していたが、競技だけでなく仕事の経験値も積んでいきたいと考えて、現在の所属先に正社員として就職した。</li> <li>・入社時に所属先にパラリンピックを目指すことを伝えており、金銭的な支援はなかったが、練習と両立できるように一部時短勤務が認められていた。</li> <li>・初の国際大会として、2013年の世界大会に出場し、1500m、5000m、マラソンすべて入賞となり、満足できる結果であったが、記録を考えると2016年のリオパラリンピックを目指すのではなく、2020年の東京パラリンピックを目指すことが現実的</li> </ul>

	<p>であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その後、2014年のアジアパラ大会、2015年のIBSA世界選手権、2018年のアジアパラ大会等に出場し、東京パラリンピックを目指していたが、出場が叶わず2021年に引退した。</li> <li>・自分の競技としての陸上人生は東京パラリンピックまでと以前から決めており、「やりきった」という思いがあり、パラリンピック後に競技を継続する気持ちはなかった。</li> </ul> <p>主な実施場所:所属するランニングクラブ</p> <p>重要な他者:ガイドランナー、妻</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・競技を続けるにあたって、メインとなる4~5名ほどのガイドランナーの存在が大きかった。関東地方在住のガイドランナーもいたが、月に1回から2回ほどの強化合宿時に来てもらい、練習を積み重ねることができた。</li> <li>・ガイドランナーとの日程調整が非常に難しく、荒天時や日程変更があった場合に、すぐに別の人のお願いするということができず、ブラインドランナーが活動を継続していく上でバリアとなるものである。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後は趣味程度に、時間が空いて自分が走りたいと思った時に走ることができればと考えている。現役時代にお世話になっていたガイドランナーとは今でもつながりがあり、一緒にジョギングをしたりしている。</li> <li>・旅行やアウトドアの活動が好きだが、視覚障害がありなかなか外出ができない、趣味の活動が楽しめないという人たち向けに、環境づくりや情報発信をしていきたいと考えている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進学先の視覚支援学校中学部で陸上を始めて、高等部から後にパラリンピックに出場する先輩のサポートを受けて競技的に取り組み始めた。</li> <li>・大学入学後は関西を拠点に複数のランニングクラブで活動を続けた。</li> <li>・複数の国際大会に出場し、東京パラリンピックを目指したが、出場が叶わず2021年に現役を引退した。</li> <li>・今後は視覚障害のある人の旅行やアウトドアに関わる環境づくりや情報発信をしていきたいと考えている。</li> </ul>

(作成者名)河西正博

氏名 24-Pさん

インタビュー実施日時 2024年6月30日 10:20~11:40 場所 H市貸し会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1983年 性別:女性 障害発生年齢:5歳 障害内容:視覚障害 1種1級
略歴	5歳の時にぶどう膜炎に罹患し弱視となり、小学2年生で急激に見えにくくなった。高校までは通常校、大学は視覚障害者を対象としたT大学に進学、22歳で理学療法士の資格を取得し病院勤務をするが、その後視力が低下し同大学に再入学、鍼灸師・あんま・マッサージ・指圧師の資格を取得した。32歳で結婚し少し時間に余裕ができたことからブラインドダンスを始め、大会に出場するようになる。現在は訪問マッサージの仕事をしながらか、競技者としてブラインドダンスに取り組んでいる。
競技基本情報	競技:社交ダンス・ブラインドダンス 競技成績:ブラインドダンス国際大会入賞 競技開始年齢:33歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・5歳の時にぶどう膜炎に罹患し弱視となり、小学2年生で急激に見えにくくなった。小学校から高等学校まで普通校に通ったが、体育は困り事が多く、特に球技は怖い思い出しかなく大嫌いだった。しかし、T大学で視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかっただけで、そんなに極端に運動神経が悪いつてもなかった」と思えるようになり、それ以降、体育がすごく楽しくなった。 ・中学の体育授業でバレーボールが顔面に当たり、メガネが壊れた経験がある。でも大学で経験したフロアバレーや卓球は「こんなやり方がある」と気づかせてくれるもので、自分も意外とできると感じられたことが大きい。それ以降、健康のためにも体を動かさなければと思ったので、マラソン大会に出場したり、クライミングにも挑戦してみた。当時マラソンの伴走をしてくれたのが大学時代の友人(弱視)で、現在の夫である。 ・20代前半でまだ見えていたころに、テレビで見た芸能人の社交ダンスを見て魅了され、自分もやりたいと思ったが、当時は仕事が忙しく、習い事をしている時間もなかった。 ・結婚後に少し時間に余裕ができて「そうだ、ダンスやりたかったんだよね」というようなことを友達に話すと、「視覚障害者の社交ダンスがあるらしいよ」と教えてくれて、そこでブラインドダンスの存在を知った。H市にたまたまサークルがあって体験に行き、それで始めた。

	<p>始めた場所:H ブラインドダンスサークル</p> <p>重要な他者:M 氏(ブラインドダンスサークル代表)</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・テレビで「ウリナリ芸能人社交ダンス部」という番組を見たことがきっかけで、踊る姿に憧れ、やってみたいと思ったこと。</p> <p>・やってみたい思いはあったものの仕事が忙しく時間的な余裕がなかったが、結婚して少し時間的な余裕ができたこと。</p> <p>・たまたま近くにブラインドダンスのサークルがあったことで、体験に行けたこと、一緒に体験に参加した全盲の方も面白くて入会したこと。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかっただけで、そんなに極端に運動神経が悪いってわけでもなかった」と思えるようになり、自分も意外とできると感じられたこと。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <p>大会に初めて出たのは、ダンスを始めて半年ぐらいである。やるなら目標があった方が身になるかと思い、大会に出るようになった。それ以降、ブラインドの大会には継続して出場している。出場するたびに自分たちの踊りが成長している感覚がある。</p> <p>通常開講しているサークルの日は仕事があるため、現在はサークルには行っていないが、サークルが「自由練習」として部屋を確保してくれている枠があるので、その時に行って練習している。あとは、先生の教室に週2回くらい通っている。レッスン自体は1時間弱で、トータル3時間程度の練習をしているが、ちょうどいい。</p> <p>主な実施場所:H 市ホール、Y ダンススタジオ、T ダンススクール</p> <p>重要な他者: T さん(指導者)</p> <p style="text-align: center;">N さん(ペアのパートナー)</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・今ペアを組んでいる晴眼者のパートナーの存在が大きい。パートナーが見つからないと大会に出ることができないが、働き盛りの30代や40代の晴眼男性は競技をする余裕がないことが多いので環境的には厳しい。自分は今のパートナーとは5年くらいずっと一緒にやっているが、自営でかつ私と出会ってから「ガイドヘルパー」という資格もとられたので、比較的時間が自由になる。こういう条件が揃わないと競技を続けるのも難しいかもしれない。</p> <p>・理学療法士、鍼灸師・マッサージ等の有資格者ということで、ほかの人よりも骨格や筋として解剖学的に捉えることができるのかもしれない。動きを理解することに関しては、見えなくても頭の中に骨格モデルが動くイメージがある。</p>

今後のスポーツ 実施	<p>・社交ダンスにはクラス分けもないので、全盲と弱視の人が一緒に戦わなくてはならない。もう少しブラインドの競技人口が増えれば変わってくるかもしれないけれど、現在は晴眼者の大会の中にブラインドの大会も組み込まれている。このことが、晴眼者に視覚障害者でもダンスができるということを見てわかってもらえている。知ってもらわないと私たちのパートナーになってくれる晴眼者の人が見つからないので、晴眼者の大会にも出て戦っていこうと考えている。</p>
まとめ	<p>幼児期から弱視であり、学齢期には体育やスポーツでよい思いがなかったが、大学で視覚障害者向けのスポーツを経験したことにより「見えなかったからできなかっただけで、そんなに極端に運動神経が悪いってわけでもなかった」と思えるようになり、自分も意外とできると感じられたことがスポーツへの誘いとなった。人生のパートナーとなる人ともこの大学で出会った。競技を始めるきっかけはテレビの企画を見ての憧れであるが、結婚を機に時間的な余裕ができたこと、そのタイミングで身近な環境で「ブラインドダンスサークル」が存在していたこと、そこにつながったことが24-Pさんの競技者としてのスタートとなった。現在のペアパートナーとの出会いも継続要因として必要不可欠なものであった。二人で踊るので、息が合った時に一番よいパフォーマンスになるが、それがすごく微妙な加減である。社交ダンスなので男性がリードして女性がそれにフォローして、さらに男性がリフォローをするという感じで踊るが、そのちょっとした加減でできたりできなかったり、それが難しい。だが、できた感覚は二人で味わえるので、それを追求していくのが面白い。今も、大会出場ごとにパフォーマンスが上がっていることを実感している。</p>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Qさん

インタビュー実施日時 2024年7月29日 17:30~19:20 場所 オンライン

個人基本情報	居住:北海道・東北地区 生年月日:1973年 性別:男性 障害発生年齢:29歳 障害内容:視覚障害 指数弁・手動弁 1種1級レベルだが手帳は1種2級
略歴	・高校まで普通学校に通い、中・高では卓球部に所属していた。卒業後、Gで働く。 ・29歳の時に障害発生。Hの盲学校、その後、T大学理療科教員養成施設に通い、理療科の教員資格を得た。Hの盲学校時代にジョギングをしているのを教員が見てマラソンを勧められたのがきっかけで大会に出るようになった。 ・世界選手権やワールドカップにも出場、同じランニングクラブのメンバーが大会時の伴走などをしてくれた。 ・現在、H視覚特別支援学校教諭。あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の免許取得を目指す学生に座学と実技を教えている。
競技基本情報	競技:視覚障害者マラソン クラス分け:T12 競技成績:国内ブラインドマラソンK大会優勝、国際大会出場 競技開始年齢:33歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・中学時代、体を動かすことは好きだったが、運動神経がいい方ではなく、体力的にも自信がなかった。2歳上の実力のあった先輩に憧れ、また体力がそれほどなくてもできそうな卓球を選んで入部した。中・高の卓球部では平凡な選手。全道大会に一度出場した。 ・卒業後Gで働き、最低限の体力錬成はやった。 ・就職後、趣味でスノーボードをやった。スキーはクロスカンリースキーをGで行った。 ・29歳の時、視力が落ちて新しいコンタクトレンズを作りに行ったが、度数を上げてても視力が上がらなかった。精密検査を受け、レーベル病と診断され、ゆくゆくは両眼とも悪くなることを告げられた。半年後には0.01になった。 ・この先仕事はどうなるのか、子どもが2人いたこともあり、仕事や生活のことなど不安だった。 ・視覚障害になった人が過去にもいるだろうと調べたところ、バイアスロンのチームに全盲でトレーナーをしていた方がいることを知った。そこで、30歳の時に退職しH高等盲学校に入学した。 ・退職中は職場に時々状況報告に行った。最終的には復職は難しいということにな

	<p>り、マッサージ・鍼灸師として働かざるを得なくなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校 3 年の時に先生からは今の成績であれば盲学校の教員になることも可能だというアドバイスを受けた。</li> <li>・教員資格を取るためにはT大学理療科教員養成施設に行く必要があり、ここに入り、さらに 2 年間学び、教員の資格を得て地元に戻り、現在の仕事に就いた。</li> <li>・当初、Hの盲学校は休職して通っていたため部活動などせず、勉強に専念していたが、気分転換と、復職した後のことや体形を保たなければならないと考えたこともあり、早朝にジョギングをしていた。</li> <li>・盲学校専攻科 2 年の時に、ジョギングする姿を見ていた寄宿舍指導員の女性教員（この教員はトライアスロンをしていた）に北海道のマラソン大会への参加を勧められ、ハーフマラソンに出場した。この時マラソンを競技としてやろうという意識はなかった。</li> <li>・T大学理療科教員養成施設に入ってから、朝ジョギングをしていた。その時に同級生で、後にパラリンピック視覚障害者マラソンで銅メダルを取ったO選手が同級生にいた。その人と出会ったのが競技として走る大きなきっかけとなった。Oさんと話をする中で、自分もブラインドマラソンに真剣に取り組むようになった。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(卓球)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の体育館</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の先輩</li> </ul> <p>最初にパラスポーツ(マラソン)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盲学校のグラウンドや盲学校周辺の歩道</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・トライアスロンをしていた寄宿舍指導員の女性教員</li> <li>・T大学理療科教員養成施設時代の同級生O選手(ブラインドランナー)</li> </ul>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・T大学理療科教員養成施設の存在。</li> </ul>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前職場で良くも悪くもメンタルは鍛えられた。マラソンは我慢が大事で、特に 35 キロあたりからは我慢しなくてはならない部分が多い。そういった我慢する力は、前職場で培われたところがあると思う。</li> </ul>

<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京には日本で一番大きな視覚障害者のためのランニングチームがあり、34歳のころOさんから誘いを受け、毎週土曜日代々木公園での練習会に参加するようになった。木曜日には織田フィールドで一般のランナーと一緒に練習をした。このほかの日はT附属盲学校のグラウンドで朝や夕方練習していた。都内の障害者スポーツセンターのトラックでも練習した。</li> <li>・34歳の時、夏休みに地元に戻ってきて初めてフルマラソンの大会に出場した。この時はHの盲学校の寄宿舎指導員の方が紹介してくれた男性ランナー2人がガイドランナーをしてくれた。</li> <li>・大学卒業後、地元に戻り、現在の学校の教員になった。H県では最初に参加したマラソン大会でガイドランナーをしてくれた人が入っていたランニングクラブ(一般のランニングクラブ)に入ったが、練習回数が少なかったこともあり、現在も所属している一般のランニングクラブHに2011年ごろ入った。このクラブは室内の400mトラックで練習しており、ロードに比べると安全である。ここには走力の高い人もたくさんおり、伴走をしてもらう必要がある時にはそうした人をお願いした。普段の練習では同じくらいの走力の人の後をひたすら追いかけるようにして走っている。この方が一緒に走っている人の迷惑にならない。</li> <li>・地元にはBというクラブがあり、自分も所属しているが、走力がやや劣り、自分の走力にあったガイドランナーはなかなか見つけられなかった。</li> <li>・Hクラブは視覚障害があっても、受け入れてくれた。お互いに意見を出し合っているいい方法を見つけていったので練習で困ったことはほとんどない。</li> <li>・それ以外ではトレッドミル(ランニングマシン)を使って走ったり、学校の体育館でシャトルランをしたりして週5日から6日練習した。</li> <li>・サイクリングロードが近くにあるが、自転車と正面衝突して肋骨を折ったことが2回あり、トラウマもあり、夜に走るのは非常に怖い。</li> <li>・2010年にはブラインドマラソンの強化指定選手となった。年間20回ほどある強化練習(合宿)の費用がガイドランナー2人分も含めかからなくなる。合宿にはすべて出るのではなく、冬場雪がある時を中心に千葉に行って練習した。</li> <li>・コロナ感染が広がった時期には職業柄感染してはいけないことから、全く練習はできなかった。</li> <li>・2023年3月にトップ選手としては引退したが、引き続きランニングを楽しんでいる。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラインドランナーのOさん:自分から見れば雲の上の人だが、影響は受けた。</li> </ul>
------------------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的に一緒に練習しているHクラブのランナーさん。合宿や世界選手権などの大会の時に帯同してくれる。長い遠征の時にはブラインドマラソン協会から派遣依頼を出してもらって帯同してもらおう。公務員の方が多い。</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本ブラインドマラソン協会の存在</li> <li>・自分の走力にあったガイドランナーとなってくれる人がいるランニングチームがあったこと</li> <li>・教員という仕事</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トップ選手としては引退した今、今後は楽しくランニングを続けていきたいと考えている。</li> <li>・盲学校の生徒や視覚障害の人、若い世代にスポーツをする楽しさや、目標に向かって努力することの大切さを伝えたい。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・29歳で視覚障害となり、はり、灸、マッサージの資格を取る中で次の仕事の見通しが持てると同時に、世界的なブラインドランナーと知り合うことでブラインドマラソンの世界へと入った。</li> <li>・日常的な練習は正眼者で行い、できるだけ迷惑がかからないような方法をランニングチームのメンバーと話し合っって練習をしている。大会の時などは同じランニングチームメンバーに帯同してもらっていた。</li> <li>・視覚障害となり、一人ではいろいろなことができなくなった時に視覚障害でもできるマラソンと出会い、それに集中し、少しずつ記録が上がってくる中で、自己肯定感が高まっていったそうである。その点でスポーツの存在が大きな意味を持っていたといえる。</li> <li>・インタビューの少し前に、マラソンへのきっかけを作ってくれた女性が現在住んでいるオーストラリアのゴールドコーストのマラソン大会に出場し、トップ選手時代には味わえなかったマラソンの楽しさを味わってきたそうである。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名:24-Rさん

インタビュー実施日時 2024年9月17日 14:00~15:30 場所 N大学会議室

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:2002年 性別:女性 障害発生年齢:0歳(1歳半の時、聞こえていないことがわかる) 障害内容:聴覚障害(感音性難聴) 1種3級
略歴	幼稚園部、小学部、中学部、高等部と聴覚障害特別支援学校に通学する。大学は水泳部に所属。5歳のころからスイミングスクールに通う。水泳は続けつつ、中学部の時は卓球部をメインに、陸上部、バレー部などで活動し、大会にも出場した。高校では陸上競技部に入り全国聾学校陸上競技大会に出場、3位入賞した。
競技基本情報	競技:水泳(バタフライ) クラス分け:S15 競技成績 国際大会入賞 競技開始年齢 5歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・1歳半よりろう学校に通い、ろう学校にいる時は聴覚障害の友達と遊ぶ。地元では遊ぶ人がおらず姉や妹や父と遊んだ。公園に行って遊具や芝生で走ったり、縄跳び、ボール投げ、野球をしたりした。 ・小学部の時の体育では水泳、かけっこ、跳び箱、鉄棒、体操、ドッジボール、ソフトボール、ダンスなどをやっていた。ろう学校だったので困ったことはない。体育は好きだったし、楽しかった。 ・中学部の体育では陸上、水泳、剣道、バレー、サッカー、ダンス、跳び箱、ソフトボールなどをやった。ろう学校だったので困ったことはない。 ・全国大会に行った高等部の先輩がいてすごいと思い、卓球部に入る。夏の期間は、臨時に陸上部に入り大会に出場した。冬の期間は、人数が足りないため臨時にバレー部に入って大会に出場した。 ・高等部の体育では水泳、サッカー、陸上、バレー、バドミントン、バスケ、テニス、組体操、卓球などをやった。ろう学校だったので困ったことはない。 ・全国聾学校陸上競技大会に行きたかったことから陸上部に入る。高1と高2の時、全国聾学校陸上競技大会に出場。高2で走り幅跳び3位入賞した。高3はコロナの影響で大会が中止になった。 【水泳】 ・幼少時にはシャワーの水がかかるとも苦手なくらい水が嫌いだった。沖縄出身で海が大好きな父親の影響で何度も海を訪れるうちに「泳げるようになりたい」と思うようになり、5歳のころ近所のスイミングスクールに通い始めた。 ・5歳の時、地元のスイミングスクールを探した際、3か所で聴覚障害者は前例がな

	<p>いと断られた。Sスイミングの店長が耳が聞こえない人とダイビングをしたことがあり、「耳の聞こえは関係ないから一緒に頑張りましょう」と言ってくれた。週 1 回だけ同じコーチのみで入会が許される。配慮は特になかったが、姉が手話で教えてくれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スイミングスクールに姉と一緒に入る。その後、妹も入った。顔に水がかかるのが苦手で最初の級を合格するまで、1 年間かかった。妹と同じペースで進級していたため、二人で頑張って練習していた。週 1 回程度、母親が車で送り迎えしてくれた。</li> <li>・SスイミングのS先生は最初の赤帽子(一番下の級)のコーチで 1 年間、進級するまで根気よく教えてくれた。個人的に手話の勉強をしてくれていたが、転勤で移籍した。</li> <li>・最初に大会に出たのは小学部 6 年生の時、日本デフ水泳選手権大会だった。</li> </ul> <p>最初にスポーツ(水泳)を始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元スイミングスクール S</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元Sスイミングの店長。その店長に受け入れてもらえなかったら、スイミングスクールには入れなかった。</li> <li>・母親、姉、妹の存在</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元スイミングスクールでの理解と行動力</li> <li>・時代とともに、スイミングスクールの障害者の受け入れが緩和されてきた。24-Rさんの年齢の時代は全く理解がなく、断られるしかなかった。配慮については、特になく、まだまだ改善の必要はあると思う。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部 6 年で初めて出場した日本デフ水泳選手権大会で、デフリンピックの選手に会い、「大きく鍛えた体がかっこいい」と憧れた。それから「自分も世界を」と夢を描くようになった。</li> <li>・自宅から近いIスイミングに中 2 の時に移籍してから練習量が増え、多くの大会に出場した。しかし、人数が多く、全く指導してもらえなかったことに悩み、しばらく練</li> </ul>

	<p>習に行けず休会状態であった。中学部 3 年生の時に、A 県で開かれた全国障害者スポーツ大会に出場しそこで出会った障害者チームに入り、様々な障害を持った人たちと一緒に練習を始めた。週 3 回程度自宅から 1 時間半以上、電車を乗り継いで通い、1 回 2 時間くらいの練習に参加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部 2 年の時にKスイミングに移籍し、徒歩で通う。週 6 回、ほぼ毎日練習に没頭した。ボードに練習メニューを書いてもらったり、フォームを身振り手振りで教えてもらうなどのサポートを受けながら実力を伸ばした。この時、障害者のスイミングクラブにも並行して入っていた。高等部のころからは指導者が UD トークというアプリを使って指導してくれた。実際、IスイミングもKスイミングも 5 歳の時に前例がないと断られたスイミングであるが、4 泳法を泳げたため移籍が可能になった。</li> <li>・現在、大学の水泳部メインで活動している。大学の水泳部では指導者は聴覚障害に対する配慮はあるが、十分ではなく、ほかの部員とのコミュニケーションがうまく取れないことがある。勉強が苦手なこともあり、困っている部分がある。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部の時:SスイミングのI先生に出会って「24-Rさんは絶対速くなる、世界に行ける」と言われた。I先生はSスイミング内でも全国の選手コースを教える立場の先生であり、自分はウソは絶対に言わないと断言されていた。その言葉をずっと心に秘めて母親が頑張ってくれた。</li> <li>・中学部の時:いない</li> <li>・高等部の時:KスイミングのNコーチに出会って初めて聴覚障害のことを理解して教えてもらった。</li> <li>・Aコーチ(有料の個人コーチ)は、もっと深く24-Rさんを理解して、東京デフリンピック出場を目標とした場合、どうしていけばよいか、長いスパンで目標設定をしてくれたが、大学 3 年春からは、指導を受けていない。</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デフリンピック東京大会の開催決定</li> <li>・第 10 回アジア太平洋ろう者競技大会(2024 年 10 月)の出場は決定したが、中東の戦争など治安の悪さなどで、日本の出場は中止となった。</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学卒業後は地元A県に残りプールで練習しようと思う。</li> <li>・アスリート雇用で企業に就職して引き続き選手を続けて、東京デフリンピック、3 年後の世界大会、4 年後のアジア大会、5 年後の次のデフリンピックに出場したいと考えている。</li> </ul>

まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・小さな時から体を動かすことが好きだった。水泳は苦手だったが父親に海に何度となく連れていってもらったことから泳げるようになりたいと考えるようになった。</li><li>・スイミングスクールに入るにあたっては障害に対する理解のなさから 3 か所で断られるが、理解のあるクラブに入れた。</li><li>・中学・高等部では卓球、陸上部など水泳以外のスポーツ部に入部して活動した。高校の時には走り幅跳びで全国大会に 3 位入賞している。</li><li>・現在は 2025 年のデフリンピックや 2027 年の世界デフ水泳選手権大会、2028 年のアジア太平洋ろう者競技大会を目指している。</li><li>・大学卒業後もアスリート雇用で競技を続けたいと考えている。</li><li>・自分自身の時はスイミングに前例がないと障害者の受け入れをしてもらえなかった。聞こえないことでコーチの指示が聞こえず、手に負えないと思われる。「聴覚障害」の理解ができてないため、理解をしてもらうことが必要。聴覚障害者は見て理解はできるので、絵や文字、写真を活用して練習ができる環境を作る、コーチにも聴覚障害者の特性を理解してもらい、コーチもコーチの意思が伝わらないから面倒であると思わないなど、歩み寄りの姿勢を持てる環境があれば、スポーツが好きな聴覚障害者はたくさんいるので今以上にスポーツをする人は増えると考えている。</li></ul>
-----	---

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Sさん

インタビュー実施日時 2024年9月18日 12:00~13:00 場所 都内貸し会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1987年 性別:男性 障害発生年齢:15歳 障害内容:黄斑ジストロフィーによる視覚障害 1種2級
略歴	15歳の時に黄斑ジストロフィーによる視覚障害となる。T1 大学で視覚障害者柔道選手と出会い 20歳で柔道を始めた。理学療法士の資格取得後、T2 大学研究員を経てK大学大学院に進学、実験助手としても勤務する。2016年にパラリンピック東京大会出場を目指し、東京都パラリンピック選手発掘プログラムを経てローイング選手としてトレーニングを開始、着実に力をつけ2021年東京パラリンピック混合舵手つきフォアに出場した。同時にクロスカントリースキー選手として、2021 ジャパンカップ札幌大会、2022 北京パラリンピックへの出場を果たし、夏・冬両大会に出場するパラリンピアンとして現在もトレーニングを続けている。妻と2歳の子どもの3人家族。
競技基本情報	競技:パラローイング クラス分け:B2(PR3) 競技成績:パラリンピック出場/その他国際大会入賞 競技開始年齢:29歳  競技:パラクロスカントリースキー クラス分け:未確定(NS3 または NS2) 競技成績:国内大会優勝/パラリンピック入賞 男子 20km クラシカル(視覚障害)、男子スプリント、男子 12.5km 競技開始年齢:31歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校から高等学校まで普通校に通うが、小学校高学年で見えづらさを感じ始め、15歳の時に黄斑ジストロフィーによる視覚障害となる。当時はまだ視覚障害であることを受け入れておらず、運動部にも入っていなかった。 ・20歳のころ、T1 大学で初めて同世代の視覚障害者と出会った。そこに視覚障害者柔道選手がいて、その人に教えてもらって柔道を始めた。柔道は7~8年続したが日本代表にはなれなかった。 ・東京パラリンピック開催が決定したタイミングで本格的に代表を目指したいと思い、28歳で東京都の選手発掘プログラムに参加した。いくつかの競技体験と体力測定をした中でローイング競技から声をかけられ本格的に競技を開始した。いくつか体験し、自分でも競技特性と選手の体格、どういう身体特性が優位かを調べた中で、

	<p>自分のリーチを活かせる競技を選んでいく中でちょうどマッチしたのがボート(ローイング)だった。決め手は、ローイングマシンで基準のタイムをクリアすれば育成指定に入れてもらえるというルールになっていたため、とりあえずマシンでタイムをクリアすればよいというシンプルなところである。</p> <p>始めた場所:T1大学(柔道)、東京都パラリンピック選手発掘プログラム(ローイング)</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚障害者柔道:大学のクラスメートの柔道選手</li> <li>・ローイング開始期:K大学ポスドクの知人</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同世代の視覚障害者の友達ができ、その人が柔道選手であり、競技スポーツとして視覚障害者柔道に触れることができたこと。</li> <li>・パラリンピック東京開催が決定したことで、それまでは趣味程度であったものが、日本代表を目指したいという気持ちに変わり、東京都パラリンピック選手発掘プログラムにチャレンジしたこと。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・小学生のころは習い事の範囲で週1、2回程度地域のサッカークラブ、テニスクラブやスイミングスクールにも行っていたので、スポーツをすることに抵抗があったわけではない。中学生になって見えづらくなるとそのままなんとなくスポーツから距離を置くようになった感じで、体育もあまり積極的ではなかった。スポーツをする上で視覚障害は、自分の中ではマイナスなものであり、ネガティブなイメージがあった。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は仕事をしながら夕方から自分の大学院の研究をし、夜にボート部の部室でマシンを借りて深夜練習して帰るという生活をしてきた。1年くらい続けて何とかタイムをクリアし、競技生活が軌道に乗りそうな感触を得たので、東京パラに向けて仕事を辞し、アスリート雇用での就職活動をして、現在の企業で競技を続けている。</li> <li>・クロストレーニングとして開始したクロスカントリースキーのトレーニングだが、ローラースキーにひたすら乗り続け、スキー選手みたいな生活をずっと送っていた。コロナ禍で1年遅れで東京大会が開催されることが決まり、「ボートにまだ可能性がある」と感じ、世界最終予選に出場を意思を示し、ボートで何とか拾ってもらえたので東京大会の代表が決まった。最終予選から3か月ぐらいはまたボート選手に戻ってみんなで合宿してひたすらパラリンピック東京大会を目指した。</li> </ul> <p>主な実施場所:相模湖</p> <p>重要な他者:よきライバルであった視覚障害があるローイング選手</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アスリート雇用となり、日中トレーニングをする時間ができるようになると、ボートの単一動作の反復だけでなくクロストレーニングの重要性を知った。海外のスポーツ</li> </ul>

	<p>選手には冬季にクロスカントリースキーをする人がいたり、日本のオリンピックチームでも冬場のポート合宿にノルディッククロスカントリースキーが組まれていたりした。パラでやっている選手はいなかったが、やってみようと思った。やれる環境を探し回っていく中で、今ガイドをしている選手と知り合うことができたので、クロストレーニングとしてやってみたくと指導を依頼してクロスカントリースキーを始めた。以降は定期的にスキーの練習をしつつ基本はポートメインという形でやっていた。</p> <p>・コロナ禍を経て、自分は北京(冬季パラリンピック)を目指すつもりにはなっていたので、東京大会が終わって選手村を出た次の日にもう北海道へ移動していた。</p> <p>主な実施場所:北海道 重要な他者:選手兼コーチのガイドの方</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・たまたま自分と同じクラスでは、ベテランが引退したこともあり、同じタイミングで競技を始めた人たちが多かった。みんなでゼロからやっていくという感じで、その中でちょうど同じ視覚障害のある選手もほとんど同じぐらいのタイミングで始めており、その人と競いながらやってきた。</p> <p>・2020年のコロナ禍で、パラリンピックに向けた最終予選が延期になりパラリンピック自体も開催するかどうか分からないというような状況になった。さらに集合練習がダメと言われて、自分たちのクラスは5人乗りだが、5人で集まった練習ができなくなった。個人で練習といっても視覚障害者一人では水の上に出ることはできないので、実質ポートの水上練習ができない期間が半年近くあり、やれることといえばクロスカントリースキーの練習だった。一応ガイドはいるが二人で距離もあり屋外なので、クロスカントリースキーの練習を続けていた。東京大会が開催されるかもわからず、転職してまで競技にかけた思いを次の冬季パラに向けるようになっていた。</p> <p>・競技環境、私生活との両立という意味ではクロスカントリースキーのA選手の存在がある。彼女はちょうど出産・子育ての中で合宿参加をしており、自分も協会にお願いして強化合宿に子どもを連れて参加している。そのような体制を作っていく上では、A選手も一緒に子どもを連れてきてやれているというのはすごくありがたい状況である。</p> <p>・トレーニングという意味ではクロスカントリースキーのK選手という金メダリストが身近にいること。家も近く仲もよいので、よく二人でトレーニングをするが、金メダルを取るにはどのぐらいの水準になる必要があるかという目標値が目の前にあり、練習の目標として常に前を走ってくれているのですごく助かっている。</p>

今後のスポーツ実施	<p>・ローイングの競技をやりながらトレーニングとして始めたクロスカントリースキー競技、現在はそっちをメインでやらせてもらっているところがあり、ローイングはロサンゼルス大会で新しいクラスが増えて、もしチャンスがあればという意識でいる。スキーと重ならないところで練習や合宿に参加しながら競技活動は続けているが、位置づけとしてはスキーをメインでやる上で、フィジカルトレーニングの一環という位置づけでボートを継続していく。</p>
まとめ	<p>・視覚障害があることで、スポーツに積極的ではなかった学齢期を経て、大学で同世代の視覚障害者と出会い、パラスポーツと出会った。そこから自分がパラリンピックの日本代表になるチャンスがあることを知った時に、本気で競技スポーツと向き合うことができ、本質的に障害をプラスに捉えることができたという意味ではパラリンピック、パラスポーツとの出会いというのは障害受容への大きなきっかけであった。</p> <p>・過去のスポーツ経験よりも、研究職としての専門性が競技継続への影響としては大きい。自らトレーニング方法を調べ、クロストレーニングの一環としてローイングとクロスカントリースキーを行うことや、目標値を計算して具体的に目標を立てながら実践することでモチベーションを高く保つことにもつながっている。</p> <p>・コロナ禍で集団練習ができない環境であっても、自らできることを見つけて競技に向かう姿勢、また競技継続のためにアスリート雇用や家族(子育て)との時間も含めた競技環境のあり方などを開拓していくことで、2030年への目標に向かって着実に自己実現を果たしている。</p>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Tさん

インタビュー実施日時 2024年10月20日 10:10~11:30 場所 貸し会議室

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1992年 性別:男性 障害発生年齢:先天性 障害内容:感音性難聴 1種2級
略歴	・小学4年からタグラグビーを始め、中学から地域のクラブで本格的にラグビーに取り組んだ。高校ではキャプテンを務め、ラグビーの強豪であるT大学に進学しトップレベルのラグビーと向き合い、公式戦出場を果たした。大学4年間はラグビーに専念し、卒業後にデフラグビーでの活動を再開、2018年デフラグビー世界大会で日本代表キャプテンを務めた。現在はW法人所属、デフラグビーの普及、強化活動に取り組んでいる。
競技基本情報	競技:ラグビー・デフラグビー クラス分け:デフラグビー(聴覚障害) 競技成績:2009 高校ラグビーO県大会/2位、関東大学ラグビージュニア選手権/優勝、全国大学選手権/優勝、デフラグビー世界大会/出場(主将)、デフラグビー世界大会(7人制)/7位 競技開始年齢:9歳(デフラグビー開始前からタグラグビーを実施)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・先天性の難聴であるが、家庭の教育方針で一般(健聴)社会の中で適応できるように育てられた。幼少期から足が速く身体能力が抜群であったことから、学校の先生の目に留まり、そこからタグラグビー指導の第一人者であるTさんへとつながり、放課後の校庭でTさんからタグラグビーに誘われた。タグラグビーは学童クラブで実施した。当時はタグラグビーのほかに姉と一緒に地域クラブでサッカーにも参加していた。 ・中学に進学し学校では剣道部に、土日はラグビースクールに入った。ラグビースクールのきっかけは、小学6年生の時にタグラグビー県大会で優勝し九州大会に出場、決勝は1点差で敗退したが、その試合を見たラグビースクールのH監督から声をかけられた。H監督はろう学校での勤務経験があり、難聴であることへの理解があり、ラグビーだけでなく人との接し方も含め多くのことを学んだ。 ・ポジションはウイングもしくはフルバック、足が速い自分の特性を活かせることや全体が見えるので難聴であることを凌駕できた。 ・高校進学にあたって、自らの力でラグビー全国大会に出場したいと思い、全国大会常連校ではない学校を選んだ。しかし、チームは経験者が少なく、部員間でラグビーに対する思いや技量にも差があった。最終学年で主将を務めたが、決勝で敗れ全国大会出場は果たせなかった。 ・中学、高校ともに特に決まったプレーはなく、自由度の高いラグビーであったことか

	<p>ら、試合中のコミュニケーションでの苦労はあまりなかった。ラグビーは自らが切り開いていくタイプで、抜群の身体能力や高い技量があり、チーム内ではほかの選手から頼られる存在であったことから自己肯定感も高かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校3年生でデフラグビーから声をかけられ静岡での合宿に参加し、全員が聞こえない選手の中で行う体験に刺激を受けた。そこには高校ラグビーで全国大会出場を果たしたK選手も参加しチームを引っ張っていた。大学1年生の時にデフラグビーの活動で怪我をしまい、大学監督から主となる場所以外で怪我をするのはダメだと言われた。大学監督との信頼関係を取り戻すために大学ラグビーに専念する決意をし、デフラグビーとは関われなくなった。</li> </ul> <p>始めた場所:学童クラブ(タグラグビー)、 ラグビースクール(ラグビー) 全国合宿(デフラグビー)</p> <p>重要な他者:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タグラグビー開始期:Tさん(指導の第一人者)</li> <li>・ラグビー開始期:H監督(ろう学校の勤務経験があり難聴への理解ある)</li> <li>・デフラグビー開始期:デフラグビー発起人Oさん</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・抜群の身体能力、特に足が速いことで教師や指導者の目に留まりスカウトされた。</li> <li>・身近でラグビーのできる環境が整っていたこと、さらにその指導者がろう学校の勤務経験があり難聴であることへの理解があった。</li> <li>・自らが積極的に切り開いていくという姿勢があったこと、その背景には両親や姉の影響が大きく、父から勧められた『三国志』や姉が持っていた『キャプテン翼』『シュート!』などの漫画は、日常で得られない、「見える会話」として学ぶことも多く、言葉の獲得や競争心を高める上で大きな影響を受けた。</li> <li>・当時、国内でろう・難聴者だけでラグビーができる唯一の環境が、デフラグビーの全国合宿であった。高校ラグビーでの活躍でデフラグビー関係者の目に留まり招集された。</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校3年生の時に、デフラグビーの合宿に呼ばれ参加した。その後はよりレベルの高い環境でラグビーをするために自ら選んだT大学に進学、ラグビーに専念するためデフラグビーの活動は中断した。</li> <li>・大学でのラグビーは、強豪校からの進学者とそうでない部員間で体力的にも技術的にも差が大きく、身体的な疲労が強かった。さらに自分の難聴のことを知らない人(後輩等)とのコミュニケーションなどでの心理的ストレスも加わり、大学2年の時に一度ラグビーをやめようとしたことがある。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学のI監督から「ユーモアがない」「わかったふりをしない」との助言を受け、字幕付きでお笑いのテレビ、特にナイツの塙さんやサンドウィッチマンを見てユーモアを学び、歩く教科書として監督から人生哲学を学んだ。</li> <li>・大学の方が組織的な攻め方、守り方をするので、想定外のことが起きた場合の修正のコミュニケーションだったり、ターンオーバー、アタックからのディフェンスだったり、ディフェンスからアタックの変わり目の時に特にコミュニケーションが求められる。例えば、近くでターンオーバーが起きた時はみんな集中しているから自分のことを見る余裕がない。だから自分の判断でプレーしなければいけないが、その判断が結果的に違っていることもある。試合中だと満足のいく修正、コミュニケーションは難しく、試合後のミーティング・ビデオ等で修正しながら確認してズレを埋めていくことでレベルを高めていく。このような形で大学 4 年間はラグビーに専念し「やり切った」という思いを持った。</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学 4 年間で「ラグビーはやり切った」と思い、第一線から離れ趣味程度で楽しもうと思った。当時聴覚障害者を多く雇っている企業であるP社に総合職で入社した。聴覚障害者の労働環境をよくしたいという思いで入社したものの、大手企業ゆえに変革には時間がかかることも実感した。社会人 1 年目に赴任先の大阪でデフラグビーにもぼちぼち関わってみようと活動を再開した。</li> <li>・再開当初、デフラグビーの環境は自分が経験したラグビーと大きく違っていた。合宿はあるものの目的が明確ではなく、指導者もいない中での練習は、競技力向上を目指すには中途半端な姿勢としか映らず、デフラグビーに対しての意義が見出せずどのように関わっていいかが見えなかった。</li> <li>・W法人に転職し、子どもたちにラグビーの指導もするようになり、多くの人との出会いによってデフラグビーの存在価値をあらためて考えるようになった。手話でのコミュニケーションが必要なラグーマンもおり、デフラグビーはそのための居場所でもある。聞こえない人の普段の過ごし方をイメージできる自分だからこそ、聞こえる人の中で輝ける人もいれば、そうじゃない人もいることが理解できる。そうじゃない人がデフラグビーという場に行くことによってストレス発散だったり、自分の個性を輝かせたり、居場所の一つになってほしい。また、聞こえない子どもたちがラグビーをするということが選択肢の一つになってほしいという考えになっていった。</li> </ul> <p>主な実施場所：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・デフラグビー／日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟</li> <li>・W法人</li> </ul>

<p>スポーツ継続に 影響を与えた 社会的状況・環 境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業で働く中でやりたいことができない、デフの待遇を変えるために就職したがその達成には時間がかかる。また、大手企業だから自分がいなくなっても会社は回る、その中で自分の生きる意味は何かを考えるようになった。</li> <li>・自分が持っているスキルは何かと考えた時「ラグビーの知識」と「手話」があった。この2つを合わせたらデフラグビー、だからデフラグビーをより多くの人に知ってもらい、聞こえない人はデフラグビーをやるという選択肢を持つ、聞こえる人はデフラグビーそのものを知って聴覚障害に対する理解を深める、これを広めたり環境をよくするのは自分しかいないと考えるようになった。</li> </ul>
<p>今後のスポーツ 実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デフラグビーの強化の面では、世界大会優勝か世界大会優勝ができなくてもそこに挑む姿を世間の皆さんに見せたい。</li> <li>・育成世代には、デフラグビーで頑張っている姿が刺激になる、明るい未来があることを伝えたい。</li> <li>・普及では、聞こえない人と聞こえる人に対してそれぞれあるが、概してデフラグビー連盟は、世の中に聴覚障害に対する理解を広めることをビジョンとして掲げているので、聞こえる人には理解を広めること、聞こえない人には自分が輝けるようなシステムを作っていきたいが、自分が理事として関わる中で広め方や育成方法が難しいと感じている。聞こえない選手は全国各地にいるから集まりにくい。どのスポーツもそうだが、手話のできる指導者がすごく大切だと思う。</li> <li>・デフラグビーを広めること。何をもって広めたことになるのかと考えた時、最も難しい課題である「デフラグビーのアジア大会を開催すること」、これが最大の目標である。</li> </ul>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な環境で始めたラグビーが、本人の努力、高い身体能力と難聴に理解のある指導者との出会いで、より高いレベルでの競技へと誘い、ついに大学日本一の集団で自己実現を果たした。先天性の難聴があるものの、自ら切り開く向上心や折々に出会う指導者や友人との関わりによってコミュニケーションの本来の持つ意味をつかみながら、哲学を持ってラグビーと関わっていくようになった。ラグビーへのパッションが誰よりも強い大学4年間を経て、デフラグビーを再開したものの、そのギャップに戸惑いを覚えた。しかし手話とラグビーという自分の強みを活かせるデフラグビーにおいて自己の存在意義を見出していく。現在はW法人の一員として、またデフラグビー連盟の理事として強化と普及、さらには社会における聴覚障害者の理解を広めることがミッションである。</li> </ul>

(作成者名) 齊藤まゆみ

氏名 24-Uさん

インタビュー実施日時 2024年6月22日 16:00~18:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1989年 性別:男性 障害発生年齢:16歳 障害内容:視覚障害(網膜色素変性症)1種2級
略歴	小学校から大学、大学院まで普通校に通う。16歳で病気を発症し徐々に視力が衰え、現在はほとんど見えていない。3歳から水泳を始め、高校まで水泳に打ち込む。大学では競技ダンスに取り組む(東日本インカレ6~7位)。大学卒業後、障害の進行もありパラ水泳に本格的に取り組む。東京パラリンピック出場。東京パラリンピック後練習拠点をスペインに移す。現在、パリパラリンピック出場権を得、それに備えて国内で練習中。2016年くらいにブラインドダンスに出会い、断続的に続けている。
競技基本情報	競技:水泳、ダンススポーツ(ブラインドダンス) クラス分け:2017年までS13、それ以降S11 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:水泳3歳 パラ水泳としては23歳 :ダンス18歳 ブラインドダンスとしては27歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 ・3歳の時、姉が入っていたスイミングスクールと一緒に通うようになった。この時から高校卒業時まで水泳を継続した。スイミングスクールには小学校3年生まで通い、それ以降は学校の部活動が主な練習の場となった。他競技に関心を持った時期もあったが様々な事情から結局、水泳を続けることになった。 ・小学校の時は冬の練習としてバスケットボールをやっていた。中学、高校の時はほぼ水泳一本だったが、山登りや釣りなどを楽しむこともあった。視力が落ち始めても、急激に見えなくなるということではなかったため、そのまま水泳を続けた。高校の時はリレーの中心メンバーであったことも水泳をやめなかった理由の一つである。 ・病気の発覚と同時にぱったり何かをしなくなることはなく、徐々に不自由を感じながら、将来についても思い悩みながら、気持ちは悶々として過ごしていた。 ・高校の時は水泳で県大会6位、九州大会に出場した。 ・大学進学は目が悪くてもできる仕事(システムエンジニア)を考え、情報系の学科のある東京の大学に進学した。また、車の運転ができなくなることを想定し車を使わなくても暮らせる東京の大学を選んだ。 ・大学入学後、新歓行事で声をかけてくれた先輩が美人だったことから、飲み会に参加し、これを契機に競技ダンス部に入ってダンスを始めた。一人で踊るとぶつかったりするかもしれないけれど二人1組ならばできるかなと思った。

- ・ダンス部は 4 年間続けた。ラテンダンスのルンバが得意だった。男女が離れて踊らないように手をつなぐ振り付けを多くして、場合によってはパートナーが自分をリードできるような振り付けを考えた。ジャッジ(審判)に対して目線が送れないとか、パートナーを一瞬見失って挙動がおかしくなるとか、そういうところで勝ちにくく、苦しんだ。ダンスでは全日本インカレまで進んだ。東日本インカレで 6~7 位の成績を取めた。この間、競泳は全くやっていない。ダンスは大学卒業後 2 年間くらい続けた。
- ・大学 2 年生になるくらいまでは演劇もやっていた。しかし、台本の読み合わせとかバリ(舞台上のマーク)が見えなかったりして、続けるのは難しいと判断した。
- ・大学卒業後、システムエンジニアとして働くようになった。卒業後 2 年間はダンスと競泳の両方を行っていた。
- ・視覚障害の影響で、ダンスの世界で日本のトップクラスでやっていくのは難しい、苦しいと考えた。障害のある人の中でやる競技であればそうした苦しさはないと思い、高校までやっていた水泳を再開した。水泳を再開する前にいくつかのトライアウト的な事業(発掘事業)に参加し、最終的にパラ水泳を選んだ。
- ・東京パラリンピック開催が決まったものの、国内のパラ水泳の状況は、選手数も少なく、出場した試合ですぐに優勝できるレベルであった。そのため、東京大会を成功させるためにも自分が出て頑張らなくてはいけないと思った。
- ・目の見えない人たちの世界に自分が入っていった時、周りからの視線とか、いろんな理解されない不自由さを痛感し、パラリンピックはそれを変えるためにあると意識し、そのために自分ができることがあると思った。自分が見えない世界に入った、今度はそのことを使って自分にできる形で貢献したいと考えた。
- ・2016 年にダンスをブラインドダンスとして再開した。ダンスの現役を引退して以降、ダンスを避けていたが、視覚障害の人を招待して行うライオンズクラブのパーティーに誘われて参加した。ブラインドの仲間にダンスをやっていたことを言ったことはなかったなので、そのパーティーで「踊ってみたら」と勧められ、踊った。競技ダンスを真剣にやっていたことからかなり目立ってしまい、それ以降ブラインドダンスのサークルに関わるようになった。全国大会に出て 2 種目で優勝した。以降、時々大会などに出ている。

最初にスポーツを始めた場所

- ・水泳: スイミングスクールのプール
- ・ダンス: 大学
- ・パラ水泳: 多摩障害者スポーツセンター
- ・ブラインドダンス: ライオンズクラブのパーティー

	<p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水泳:近所の友人(先にスイミングスクールに入っていた)</li> <li>・水泳を続けるにあたってはその時々コーチの影響を受けた。</li> <li>・パラ水泳:SNS を通じて知り合い、パラ水泳のクラブなどを教えてくれた人</li> <li>・ダンス:勧誘してくれた先輩</li> <li>・ブラインドダンス:パーティーに誘ってくれた視覚障害者</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習、競技会双方で競技ダンスを継続することが困難であったこと</li> <li>・パラリンピック開催決定後、発掘事業などに参加して水泳を本格的に開始したこと</li> <li>・SNS の発達</li> <li>・近くでパラ水泳のクラブが活動していたこと</li> </ul>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>視覚障害を持つ前に水泳をやっていたことはパラ水泳を始める時の後押しとなっている。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くで活動しているパラ水泳のクラブにいた A さんが様々なプールや団体と調整をして、毎日泳げるような環境を作ってくれた。</li> <li>・2013 年にパラ水泳のクラブに入り、2014 年ごろまでは仕事の後、様々なプール(スイミングクラブ)に通って練習した。2014~2015 年はオリンピックレベルの指導者、N1 さんの指導を受けた。ここでもう一段レベルが上がったと思う。</li> <li>・2015 年に、外資系のコンサルタント会社にアスリート雇用で転職した。お金はなかったが、時間はできたので自由に練習できた。この時はまだ様々なプールを転々として練習していた。</li> <li>・2015 年に日本パラ水泳連盟の強化選手に選出された。</li> <li>・障害のことは水泳に打ち込むことで目をそらせていたところもあったが、SNS で水泳のことなど発信することで自然に自分のことを理解してもらえるようになった気がする。</li> <li>・そのころから N 大学の N2 先生に指導を受けるようになった。自分のほかに 2 人のパラリンピアンも指導を受けていた。</li> <li>・このころ、コーチ料やプールの使用料など支払うのが大変だった。2017 年に都内の大学院に進学し、奨学金が受けられるようになった。この奨学金や各種補助金で金銭的には楽になった。その後、この大学のコーチに指導を受けるようになった。大学院には 5 年間所属した。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2019 年ナショナルトレーニングセンター(NTC)・イーストが完成して以降はここでトレーニングするようになった。</li> <li>・コロナ禍の 2020 年には NTC が使えなかったため地元に戻り、高校時代の仲間の伝手でプールを使わせてもらったり、自宅の庭に小型プールを設置して練習した。</li> <li>・東京パラリンピック終了後、スペインに練習拠点を移す。スペインと日本のスポーツに対する価値観(勝つこと、速くなることをベースにして練習する日本と、人とつながったり、楽しんだり、頑張ったりすることに価値を置くスペイン)の違いに大いに刺激された。</li> <li>・パリパラリンピックが近づき、タッピングの連携のことなどもあり、練習拠点を国内に戻した。</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A さん、N1 さん、N2 さん、F さんなどのコーチ陣</li> <li>・タッパーの K さん(タップ棒で選手の頭などをたたき、ゴールが近いことを教える人)</li> <li>・タッパーの他、合宿の送り迎えなど多様なサポートを受けた。</li> </ul>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京パラリンピックの開催決定</li> <li>・日本財団パラリンピックサポートセンター(現パラスポーツサポートセンター)の存在(大学経由の奨学金)</li> <li>・各種補助金制度の確立</li> <li>・NTC イーストの完成</li> <li>・日本スポーツ振興センターの海外研鑽助成金制度</li> </ul>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トップ選手としていつまでやれるかわからないが、2026 年のアジアパラ大会までは皆さんの前で泳げるようにしたい。</li> <li>・今後、ブラインドダンスの競技会に出るなどしてもう一度ダンスを本格的にエンターテイメントとしてやってみたい。どのタイミングになるかはわからないがもう一度、真剣にやってみたい。</li> <li>・ブラインド同士のペアか車いすとブラインドのペアでやれたら面白いと思う。現在のところブラインドの方で本格的に踊れる人がなかなかいない。現在は片手間で、たまに競技会の前に練習して出るくらいである。できればマイノリティ性を持っているパートナーと何かを表現するような形にトライしたい。現在、競技として取り組むような段階(環境)ではないのでなかなか本格的には取り組めない。</li> <li>・もう一つライフワークとして「非認知教育」に取り組みたい。メダルとか成功とかそういったところにフォーカスしすぎても、みんなが苦しくなるだけで、なかなかみんながハッピーになれない。みんなが 1 番になれないような世の中、努力がそのまま報酬に</li> </ul>

	<p>つながりにくい状況の中で、毎日モチベーションを保っていくために、目標と結果のその関係性だけにフォーカスするのではなく、頑張ること自体楽しいというマインドセットを普及させたい。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水泳と競技ダンスの二刀流。いずれもパラスポーツとして取り組む前に本格的に行い、その後パラスポーツとしても実施している。</li> <li>・パラ水泳は世界トップクラスの成績を持つが、勝利がすべてということではなく努力することを楽しむというマインドを持っている。「金メダルがなくても困ることは何もない」という言葉が象徴的である。</li> <li>・水泳でパラリンピックを目指す期間と東京パラの招致決定後、日本のパラスポーツの環境が激変する期間が重なっており、新設された NTC イーストの完成や、各種制度や補助金の恩恵に与っていた。</li> <li>・将来的には、他競技(ブラインドダンス)にもう一度シフトしていきたいという展望を持っており、これまでの選手との違いが特徴的である。</li> <li>・非認知教育との関わりも含め、今後も注目していきたい選手の一人である。</li> </ul>

(作成者名)藤田紀昭

氏名 24-Vさん

インタビュー実施日時 2024年5月10日 17:00~18:30 場所 Tスポーツセンター

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1983年 性別:女性 障害発生年齢:先天性 障害内容:二分脊椎症による下肢機能障害 および膀胱直腸機能障害、水頭症 視覚障害(5歳~) 1種1級
略歴	先天性二分脊椎症で下肢に不自由があり生まれた。5歳の時に、合併症の水頭症治療のために体に使用したVPシャントの影響で視力に障害を負った。小学校、中学校、高校と肢体不自由の特別支援学校で過ごす。2005年に国立職業リハビリテーションセンターでの職業訓練課程を終え、企業で電話対応などのアルバイトをしていた。2011年に結婚。障害者団体連絡協議会の運営委員を務める。現在、都内の会社に障害者雇用枠で勤務している。夫もパラアスリート。
競技基本情報	競技 水泳(1996年~2001年)、パラ陸上(1998年~2009年)、トライアスロン(2003年)、パラ・パワーリフティング(2022年~) 競技成績 【水泳】東京都障害者総合スポーツセンターが開催する水泳大会に中学、高校と参加していた。 【パラ陸上】車いすマラソンから始めたが、視覚障害の影響で競技に難しさを感じ、徐々に距離の短い種目を選択、最終的には100m走に変更した。視覚障害がある中で肢体不自由のクラスで競技を続け、全国障害者スポーツ大会に加えて、ジャパンパラ競技大会、日本パラ陸上競技選手権大会にも出場した。 【トライアスロン】テレビ局の企画で4か月間取り組んだ。 【パラ・パワーリフティング】全日本パラ・パワーリフティング選手権大会優勝(2連覇)、国際大会(ワールドカップ、ワールドパラパワーリフティングチャンピオンシップ)出場 競技開始年齢 水泳(13歳~)パラ陸上(15歳~)、トライアスロン(19歳~)、パラ・パワーリフティング(39歳~)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	【パラ陸上】 経緯:東京都障害者総合スポーツセンターが主催する陸上教室に参加し、競技として取り組むことを勧めてくれた人からレーサーの乗り方を教わり、総合SCで継続的に実施するようになった。中学3年時に立川マラソンに初めて出場した。 始めた場所:東京都障害者総合スポーツセンター 重要な他者:①学校の先輩。先輩が車いすマラソンに出場するのを応援するために会場に行って興味を持った。 重要な他者:②マラソンに出場していた年長の車いす利用者。車いすマラソンへの勧

	<p>誘のため、資料を学校まで持ってきて説明してくれた。競技の指導からレースまで伴走してくれた。</p> <p>【パラ・パワーリフティング】</p> <p>経緯：同行援護（視覚障害で移動に困難がある人に対して、外出に同行するサービス）を行うガイドヘルパーに同行してもらい、引きこもり、運動不足、ストレス解消などの一環で、公共スポーツ施設のジムに通うようになった。後にガイドヘルパーの本業（障害者の運動支援を行うNPO 法人代表）を知り、食事指導や運動指導を受け、ダイエット目的に運動することになった。コロナ禍で、緊急事態宣言が繰り返され、公共スポーツ施設が閉鎖された時期に、レンタルジムに利用を切り替え、その際に勧められたベンチプレスに興味を持ち、徐々に重いバーベルを上げられるようになった。</p> <p>始めた場所：自宅近くの公共スポーツ施設のジムと予約制のレンタルジム</p> <p>重要な他者：公共スポーツ施設のジムに同行してくれたガイドヘルパー。障害者の運動支援を行っていたために、適切な支援が行われた。</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>コロナ禍で、公共スポーツ施設の営業日が不規則となり、感染防止の観点からプライベートで利用できるレンタルジムのサービスが広がりだした。個別指導の時間が得られたために、他人に気を遣うことなく、思う存分、ベンチプレスの効果的な使用方法を教えてもらった。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学、高校で水泳、中学3年から陸上。</li> <li>・19歳の時にテレビの企画でトライアスロンに挑戦して完走。</li> <li>・夫がパラアスリートで、39歳でのパワーリフティング挑戦にも理解があった。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>【パラ陸上】</p> <p>継続状況：伴走支援してくれていた人が、年齢的にこれ以上の併走が走力的に難しくなり、同じ施設を使用していたパラ陸上のパラリンピアン（障害児のスポーツクラブ代表）に指導を引き継いでもらった。技術的指導に加えて、練習しやすい環境を整えてもらい、所属クラブの選手を紹介してもらうなど、仲間の輪が広がっていった。</p> <p>主な実施場所：東京都障害者総合スポーツセンター</p> <p>重要な他者：障害児のスポーツクラブの代表者（パラリンピアン）</p> <p>【パラ・パワーリフティング】</p> <p>継続状況：日本パラ・パワーリフティング連盟の関係者が運営するジムに入会し、約1か月後の大会出場を決める。大会では自己記録を更新。徐々に記録が伸び始めて、その後、アジア・オセアニア大会にも出場して、さらに自己記録を更新。主に肢体不</p>

	<p>自由者に指導していた指導者が、同行援護従業者養成研修(視覚障害者の外出をサポートする同行援護について、食事などの介護や移動の支援方法を学習するための研修)を受講して、視覚障害の特性に理解のある指導を工夫してくれるようになった。</p> <p>主な実施場所: パワーリフティング等のパワー系競技のジム、日本財団パラアリーナ、東京都パラスポーツトレーニングセンター、公共スポーツ施設のジム</p> <p>重要な他者: ガイドヘルパーと日本パラ・パワーリフティング連盟のコーチを兼務している指導者。本人の障害特性に合わせた適切な指導で、短期間での自己記録更新に何度も貢献した。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	特になし
今後のスポーツ実施	定年までパラ・パワーリフティング選手としてパラリンピックを目指して活動していきたい。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肢体不自由と視覚障害の重複障害であるが、単一障害のクラス分けに合わせて競技会に参加するため、どうしても不利になってしまう。</li> <li>・肢体不自由、視覚障害のどちらの障害特性も理解している指導者は少ないため、競技力向上の点では、そのような指導者に出会える機会は決して多いとはいえない。</li> <li>・肢体不自由者のスポーツ指導の経験はあるが、視覚障害には知識がなかった指導者が、視覚障害についても勉強して知識を得てくれたおかげで、効果的な技術力向上につながり、パワーリフティングをやる上での不安も解消された。</li> </ul>

(作成者名)小淵和也

氏名 24-W さん

インタビュー実施日時 2024 年 10 月 31 日 17:30~19:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1991 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:聴覚障害 1 種 2 級
略歴	小学生の時にバドミントンを始め、大学入学後に、本格的にデフバドミントンの大会に出場し、その後日本代表に選出され、現在は地元のクラブチームおよび近隣の大学を練習拠点とし競技を継続している。
競技基本情報	競技:バドミントン 競技成績:国際大会入賞 競技開始年齢:小学校 5 年生ごろ(デフバドミントン:大学入学後)
障害発生から 障害者スポーツ 開始まで	経緯: ・ろう学校幼稚部に入学したが、小学校以降はすべて普通学校に進学した。 ・姉と一緒に外でバドミントンをしている様子を親が見ており、地元のバドミントンクラブを探してくれて、小学校 5 年生もしくは 6 年生ごろから週に 1 回参加するようになった。小規模のクラブで、子どもが 3 人、大人が 5 人程度参加していた。 ・ピアノやプールなど様々な習い事を経験したが、プールは補聴器を外してしまうと先生の声が聞けず、見よう見まねでやっており楽しさを感じなかったが、バドミントンは声を使わず打つことで勝ち負けが決まるもので、姉や友人と楽しくクラブでの活動を続けることができた。 ・小学生の時は手話の存在を知らず(家では家族と口話による会話をしていた)、先生や友達の会話を理解することが難しく、コミュニケーションで苦労していた。 ・進学した中学校にはバドミントン部がなく、パソコン部に入部し、小学校時代から通っていたクラブで活動を続けた。 ・高校入学後、迷わずバドミントン部に入部し、週に 4 回ほど練習していた。それほど強いチームではなかったが、試合に負けるたびに、「悔しくて部活だけでは物足りない」と思い、部活動と並行して地域の社会人クラブで週 2 回ほど練習していた。 ・高校 1 年生の時に、親から地元の福祉センターで障害者バドミントンの大会があると聞き、クラブの仲間と出場し優勝した。その際に出場していた選手から、障害者バドミントンの全国大会があると教えてもらい、翌年出場した。その当時は、「障害の有無に関わらずバドミントンをやりたい」と考えており、積極的に障害者バドミントンの大会に出場しようとは思わなかった。 ・(進学した大学のバドミントン部は強豪であり)、入部セレクション後に、部のコーチから、競技力には問題がないが、聴覚障害について懸念をもたれていると感じ、入部後のコミュニケーションや部内の上下関係が難しくなると思い、バドミントンサー

	<p>クルに入ることにした。サークルの活動は週に 1 回程度で、それ以外に複数の社会人クラブの練習に参加し、サークルと合わせて多い時には週に 5 回程度バドミントンをしていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学ではバドミントンサークルと合わせて手話サークルに入り、そこで初めて手話を学び始めた。</li> <li>・大学 1 年生の時に初めてデフバドミントンの大会に出場し、その時から、手話を学んで、デフの仲間を増やしてもっとデフバドミントンの活動を活発にしていきたいと考えるようになった。</li> <li>・大学の先輩がデフバドミントンのクラブを立ち上げて、1 年生の時から月に 2 回程度クラブの活動に参加するようになり、2 年生からはデフバドミントンの日本代表になり、国際大会に出場するようになった。</li> </ul> <p>始めた場所:大学の先輩が立ち上げたデフバドミントンクラブ 重要な他者:(聴覚障害のある)大学の先輩</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の先輩がバドミントンクラブを立ち上げたことで、初めてデフバドミントンの世界を知り、「ここで結果を出したい」「もっと(デフの)仲間を増やしたい」と考えるようになった。</li> <li>・聴覚障害のある人がもっとスポーツを楽しむためには、コミュニケーションのサポートが一番大事であると思う。バドミントンの練習時に、手話通訳等がなければ、具体的な技術、それに関わる動きが理解できず、指導者の動きを真似するだけでは技術向上につながらず、楽しさを感じることができない。活動時に情報保障がなされることで、いろいろなスポーツにもっと多くの聴覚障害者がアクセスできると思う。</li> </ul>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先天性障害のため記載なし</li> </ul>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学を卒業してから 6 年ほどは、仕事を終えてからほぼ毎日、複数の社会人クラブで練習していた。曜日によって参加するクラブは異なり、10 以上のクラブで活動していた。</li> <li>・クラブのメンバーは健聴者ばかりであったが、それほど積極的にコミュニケーションを取ろうとは思っておらず、競技レベルを誇示することで、クラブからまた来てもらいたいと思ってもらえればよいと考えていた。活動を続けることで、障害理解のある方から話しかけてもらい人脈が広がった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本代表の活動について、2015 年ごろまでは、国際大会前のみ合宿が行われていたが、現在は年に 1 回日本代表の選考が行われ、選出された選手たちを対象に定期的に強化合宿が行われている。</li> <li>・国際大会に関しては、アジア大会、世界選手権、アジア太平洋大会、デフリンピックがそれぞれ 4 年に 1 回開催されており、1 年に 1 回はいずれかの大会が開催される日程となっている。</li> <li>・結婚を機に関東から関西へ引っ越し、仕事と子育てを両立しながら、週 1 回から 2 回ほど、2 つの社会人クラブ、2 つの大学を拠点として競技を続けている。</li> <li>・2019 年の世界選手権でメダルを獲得してから、会社が支援してくれるようになり、週 5 日の勤務のうち、週 2 日は在宅勤務が認められるようになった。</li> <li>・デフバドミントンの活動は賞金がもらえるわけではなく、給与が上がるわけでもなく、自分が満足に競技できればよいと考えていたが、競技を続ける中で、人として選手として成長させてくれた家族や仲間との「つながり」の大切さに気づき、2025 年のデフリンピックを競技の集大成として出場し、メダルを獲得することで、応援してくれた方々に感謝の気持ちを伝えたいと思っている。</li> </ul> <p>主な実施場所: 2 つの社会人クラブ、2 つの大学</p> <p>重要な他者: 家族、競技活動を支えてくれている人々</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結婚を機に転居し、練習環境が大幅に変わったが、妻のバドミントン部時代の知り合いを通じて社会人クラブを紹介してもらい、すぐに活動を開始することができた。</li> <li>・アスリート雇用の規模を拡大してもらえれば、もっと多くの障害者アスリートが学校卒業後も競技を続けられると思う。</li> </ul> <p>* 自身はフルタイムで働きながら競技を継続している。</p>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2025 年の東京デフリンピックでのメダル獲得を目指している。</li> <li>・デフリンピック後のことは現時点で明確になっていないが、次世代の選手を育成していきたいと考えている。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校から地元のバドミントンクラブで活動を始めて、大学ではバドミントンサークルと社会人クラブで競技を継続していた。</li> <li>・大学入学後に本格的にデフバドミントンの活動を始め、大学 2 年生の時から日本代表として国際大会に出場している。</li> <li>・2021 年のデフリンピックでメダルを獲得し、来年開催のデフリンピックを集大成として再度メダル獲得を目指し、競技を継続している。</li> </ul>

(作成者名)河西正博

氏名 24-X さん

インタビュー実施日時 2025 年 1 月 20 日 9:15~10:20 場所 O 市内貸会議室

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1992 年 性別:男性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:聴覚障害 1 種 2 級
略歴	早期教育から中学部まで 15 年間ろう学校で教育を受ける。ろう学校中学部でバレーボールを始め、B 高等学校進学後は関西のデフバレーボールチーム S に所属、高校 2 年生(2009 年)の時に当時最年少で台北デフリンピックに出場、O 大学 3 年生(2013 年)でもソフィアデフリンピックに出場したが、2014 年に友人からビーチバレーボールの誘いを受け二足の草鞋を履くようになる。大学卒業後は O 市役所に勤務しバレーボールとビーチバレーボールを並行して行っていたが、2018 年に T 株式会社に転職後はビーチバレーに専念し、ビーチバレー大阪代表として、またデフビーチバレー日本代表として活躍している。
競技基本情報	競技:バレーボール/デフバレーボール クラス分け:男子/聴覚障害・男子 競技成績:デフリンピック入賞 競技開始年齢:12 歳  競技:ビーチバレーボール/デフビーチバレーボール クラス分け:男子/聴覚障害・男子 競技成績:デフリンピック出場、デフビーチバレー世界選手権入賞、全日本ビーチバレーボール男子選手権大会に府代表として出場 競技開始年齢:20 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・先天性の聴覚障害であり、デフファミリーとして 0 歳からろう(聴覚特別支援)学校に通い、早期教育から中学部までを過ごす。体を動かすことが大好きな子どもで、毎日体を使った遊びに夢中であった。小学部の時に父親の勧めで地域の軟式野球チームに所属、体格的に恵まれ、肩も強かったことから投手として活躍した。中学部で運動部に所属することになり、2 つしかない運動部からバレーボールを選択したところ野球とは違う楽しさがあり「はまった」。中 3 の時に、今までは中学校の地区大会で 1 勝しかできなかったのに 2 勝できたことが印象に残っている。 ・中学部の担任の先生が体育の先生で、運動がなんでもできて格好いい、憧れの存在であった。自分も将来体育の先生になって教えてみたいと思った。 ・高校は将来のことを考え地域の一般校に進学、ろう学校の先輩が 1 名在学していたことも学校選択理由の 1 つである。ただ男子バレー部がなかったため、ろう学校のク

	<p>ラブで週 1~2 回練習、土日は関西のデフバレーボールチームSにも所属し「ハイブリッドな環境」で多様な年齢層の中で競技をすることで自己の技術を高めていった。その中でデフ日本代表監督の目に留まり、高 2(2009)の時にデフリンピックに最年少で参加することとなった。</p> <p>始めた場所:〇市立聾学校</p> <p>重要な他者:中学部の担任であった体育の先生</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>・中学部から必ず部活動に参加することになるが、ろう学校特有の事情である選択肢の少なさ「限定された部活動」がバレーボールの開始に最も影響している。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>・先天性のため該当しない</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況:</p> <p>・教員免許を取得して大学を卒業した。教員になる選択肢もあったが、社会人経験がないまま教員になると、生徒の進路相談に乗ることができないと思い、就活を経て〇市職員に採用され 4 年間従事した。スポーツ環境としては、平日は勤務終了後に、また週末はクラブチームでの活動が主であったが、人として、また競技選手としてさらなる向上を目指し転職を決意した。</p> <p>・転職を契機に、ビーチバレーボールに専念することにした。平日はフルタイムで勤務しているので、仕事後に体カトレーニングを中心としたメニュー、週末はオンシーズン(3月~11月)は試合で全国各地へ遠征、オフシーズン(12月~2月)はウェイトトレーニングや基礎練習を中心に取り組んでいる。</p> <p>・もともと身体を動かすことは好きで、様々なスポーツをやっていく中で最終的にビーチバレーボールを選択した。ビーチバレーボールの魅力に惹かれたことが一番の要因である。それは、砂の上で動くため、高い身体能力が必要であり、コミュニケーション能力や人間力も備わっていないとチーム作りもうまくいかない。様々な要素が求められるので簡単ではないが、ビーチバレーボールでの学びが自身の成長を助長しているのは間違いないと感じている。そう思えるのはデフビーチバレー協会理事長U氏からの影響が大きい。</p>

	<p>・継続にあたっては妻の存在がある。彼女はデフバレーボール元日本代表で、前々回のデフリンピックで金メダルを獲得したチームのキャプテンを務めていた。日本代表チームを通して知り合い、大学時代から競技力のレベルアップだけでなくチームマネジメントも含め色々と苦労していた姿を見てきた。彼女の俯瞰的に物事を捉えて、下調べを怠らず無駄なく段取りするところを尊敬している。彼女とは性格は正反対だが価値観は似ており、自分とは異なる考えや発想が出てきて参考になることも多々あり、私が前のめりになった時のストッパーでもある。</p> <p>・ビーチバレーボールは声のコミュニケーションが重要となる競技なので、他の競技も同じだと思うが、聞こえないだけでかなり不利な状況になる。そこを工夫しながら克服して健常者と変わらないプレーをすることが健常者には魅力として映るのかもしれない。一般的にスパイカーはペアが「ストレート！クロス！」と空いているところの声を聞いて打つことが多いので、ディフェンスの動きにフェイントを入れる、スパイクジャンプの時に相手のコートを見てから打つなどの工夫をしている。</p> <p>主な実施場所：桜ノ宮ビーチ</p> <p>重要な他者：妻(元デフバレーボール日本代表)</p> <p>重要な他者：デフビーチバレーボール協会の理事長であるU氏</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>・デフビーチバレーボール協会の理事長であるU氏との出会いが最も大きな影響を与えた。ビーチバレーボールを始めてから現在までの全てを知り、転職やスポンサー集めを始めるきっかけとなった。U氏はビーチバレーボールの元プロ選手で、競技を通じた人間力の成長など、自身の経験談からデフビーチバレーボールの発展まで幅広く話し、今後の目標や人生の過ごし方について真剣に向き合うようになった。</p> <p>・U氏から「聞こえるか聞こえないではない、やるかやらないかだよ。現役生活なんて人生 80 年のうち 20 年と 4 分の 1 しかない。その中で聞こえなくてもやれる、新しい歴史を作っていこうよ。24-Xくんしかできないと思っている。」と言われたことは今でも鮮明に覚えている。</p> <p>・競技開始当初(約 10 年前)と比べて、デフビーチバレーボールの認知度が上がったと感じる。試合で全国各地へ遠征する際、運営スタッフや他の選手たちが競技と会場使用のルールを個別に説明するなどの配慮がある。審判も笛の合図が分かりやすいように腕を動かすなど、デフビーチバレーボールに対する理解が進んでいると感じる。</p>

今後のスポーツ実施	<p>・今後については未定だが、公務員と民間両方を経験した教師はなかなかいないと思うので、教師になるのも選択肢の一つだと考えている。さらに上を目指すために、競技と向き合う時間をより確保できるアスリート社員も射程である。東京デフリンピックが人生の中で大きなきっかけの一つになるのは間違いなく、自国開催のビッグチャンスはどう活かすかは自身次第なので、選手としてだけでなく父親でもあるので、人として今後の人生設計を考えながらやっていきたい。</p> <p>・デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。デフスポーツのみにこだわるのではなく、それぞれの環境で自己のパフォーマンスを発揮させることにこだわりを持ち、先輩たちの努力を無駄にしないためにも、現役の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえるよう頑張っていきたい。</p>
まとめ	<p>・デフファミリーとして生まれ、幼少期から学齢期をろう学校で過ごし、コミュニケーションに不自由することなく遊びや多様な運動経験をすることで現在の競技力の基礎が培われた。中学部ではろう学校特有の限定された部活動としてバレーボールに接することになったが、ネット型競技であるバレーボール特有の面白さに魅かれていった。</p> <p>・高校からは将来を見据え一般校に進学、聴者のコミュニティに入っていく。しかしデフバレーとの関わりは続いており、最年少でデフリンピック参加を果たすなど、特定のチームにこだわらないハイブリッド型でバレーボールと関わっていった。</p> <p>・バレーボール選手として2度、ビーチバレーボール選手としても2度、合計4度のデフリンピック参加を果たし、東京大会で5度目の代表を目指している。デフビーチバレーボール協会のU氏から強く影響を受け、自身の成長も含め、現在はビーチバレーボール選手としてデフコミュニティと聴者のコミュニティの両方でパフォーマンスを発揮することを求めている。デフビーチバレーの選手が健常者の試合で活躍することで、デフスポーツの認知度と競技力も高まる。また、ビーチバレーの試合では健常者とペアを組むこともあるので、デフスポーツのみにこだわるのではなく、それぞれの環境で自己のパフォーマンスを発揮させることにこだわりを持って練習や試合にのぞんでいる。先輩たちの努力を無駄にしないためにも、現役の自分たちが健常者の大会で結果を残し、デフビーチバレーボールの存在を知って応援してもらえるよう頑張っていきたい。それが、結果としてデフスポーツの競技力を高め、社会における聴覚障害者の理解や取り巻く環境の改善につながるものだと確信しているからである。</p>

(作成者名) 齊藤まゆみ